

奇譚クラブ

新しい風俗文庫誌

奇譚クラブ

KITAN CLUB

11月号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

画集に属する白花の
クラブと夢の緊縛アルバム



11月号 1960



定価 百四十円

IBM. 2805



緊縛フオトアラベスク

△収載内容▽二十六項目 写真七十七葉

- （限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。）

限定版特別第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

緊縛写真と緊縛画集

四馬孝緊縛画集（二十五枚）

- 女体耐久テスト
素晴しき会食
オシメカバーと赤ん坊
白いいけにえ
アクロバットの訓練
女学生 of 嫉妬
女体は美しさ玩具
人間燭台の実験
物置小屋の怪
生理めの私刑
奴隷という責め
水責めにあう美女
回転する女体
- 素晴らしき写真集 (八十四葉)
- 序曲「手吊」のポーズ
第二楽章逆手吊と足吊
緊縛感のクロスアップ
拘束女体の経過
股間縛り競艶
麗しき系列
狂った果実
晒し者なんだワ
腰巻の乱舞曲
- 女の逆恨み
三醜女の逆恨み
遠慮はいらねえぜ
女体の荷物
トランク詰の裸女
吊し責めの美女
浴場の悦虐
鞭の御馳走
淫虐な美容師
狂気の復讐
ヤキを入れてやる
電気責テスト
- 女の飲び八態
さあどうでもして
陳列された女体
忘れぬ豊満美
黒蛇地獄
女のふんどし
女のサポーター
吊り人形の哀歓
断然これは凄
囚人第十四号罷り通る

「緊縛写真グラフ集」

◎ 総グラビヤの豪華な内容と絢爛たるモデル陣

- ながしめ……絹川文代
荒縄全裸緊縛（野外）
……大塚啓子
円い乳房……愛川悦子
浴室におびえて……愛川
縄の陶醉……絹川文代
全裸悦虐態……大塚啓子
白痴美の誘惑……大塚
はねかえす縄……大塚
ううう許して……大塚
雪白の肌は縄にまみれ
て六態……大塚啓子
優姿ハダカ縛……絹川
忘却の彼方……絹川文代
股間縛り背正面二態……
……絹川文代
裸身さらし……愛川悦子
豊満くらべ……桜井葉子
亀甲しぼり……愛川悦子
怨めしき縄目……大塚
- 恍惚境……絹川文代
いためられた乳房
……桜井葉子
耐えられる……桜井葉子
月経帯の強制……大塚
手吊りと逆手吊り五態
……大塚啓子
捕われの麗人……絹川
湯責二態……大塚啓子
何をしようって言うの
……桜井葉子
新人媚態集……桜井葉子
いじめめく……絹川文代
メンスバンドの猿轡……
……絹川文代
観念横臥……絹川文代
変型手足しぼり……愛川
後手首腰縄……大塚啓子
隅から隅まで……愛川
鏡面万華模様（裏と表）

四十項目
百十五ポーズ

奇譚クラブ 十一月特大号 目次

(第十四卷第十五号)

表紙	レインコートの人	四馬 幸・画
表紙裏	①ドレス・デザイナー 現代女性緊縛風景	
②経装の令嬢		
色刷口絵	「どうだ白状する気になったか」 鼻ゼメ	
目次裏	「風流いろは草紙」	
扉	八女上人と女ドレイヴ	佐保 忍・作 海れい子・画
口絵画集	被虐の白い花びら	杉原 紅児・画 四馬 幸・画
白刺・芙蓉・梨花・白百合		
謝本屋・白菊園・白蘭地・白蘭地・白蘭地		

夢の緊縛アルバム……本誌緊縛モデル第一陣登場
 【出演モデル】新人 花木京子・ベテラン 須川文代・
 愛川悦子・花坂道子・山原美佐子・森千恵子・杉本更・
 大塚有子・平野美子・村田美子・村井知可子・安井久・
 子・坂口利子・加賀利江子・山田節子・伊吹真佐子・須川
 文子・春日あき・川島多美子・高瀬聖・中富枝子・中塚
 文子・松井美子・斎藤明子・口上二十四名
 【題目】ニューフェイスの第一表情「ベテラン緊縛スタ
 イル」天女降臨「優姿花の香」腰にもたえて「温泉地獄
 ・無防備」白日に映えて「床柱」浴室「裸」蒲団「ホリ



二 口 絵
 今夜のお客は女漫画家
 「若い庵主さんと 説や
 実写マゾヒスチック・フォト」 本誌写真部特写
 「どうだ、いじめてやろうか」「じつとしてない、尻を打て」
 「ああ、とことんきくんだ」「こころ、ふざけやがって」
 男性賣画集「ねじり屋」「おかしな男」 R 生
 フット・ウエア・ファッショナブル……EXOTIQUE
 緊縛の女王 須川文代さんに対する
 二十の質問とその回答……小林 清・記
 「今秋の縛り映画」……東山 隆史・78
 告白 アクロバット残酷記……水田真紀子・80
 映画「甘い生活」について思ふこと……哀崎 伸・88
 我が描くエッセイとコント
 マゾヒズム天国……田沼 蘭男・90
 或る空軍特校の獄中記より
 黒色の栄光……青佐 隆彦・100
 被虐の白い花……赤川 道郎・114
 告白 コンビネーションと女……高橋 五六・128
 雄輝荘奇譚……横村 義・130
 処刑の密室（地底の女奴隷市）……塔婆 十郎・140
 夏芝居 榊立姿……R 生・156
 女の相撲に就いて……宮崎 京人・158
 或る洗脚マニヤの一日……栗瀬 豊・164
 連載小説「宇宙のどこかで」……佐治 麻造・168
 ファンタジヤ・マゾヒスティカ……山本 節夫・186
 「白足装フェチ」への幻想と考察……阿部 龍丸・192
 第三次元小説 影の国……雪夜 進・196
 告白 女装の楽しみ……比良野 裕・206
 「手帖連載欄」……福 正三・200
 松井藤子悦庵小説シリーズ
 死を願う女……松井 頼子・212
 「狂宴」……一ノ瀬悦子・224
 「ヒポイズナイド、ヘニスナイド」……文津郡三郎・228
 コフロ派のつぶやき「人愛好者の記録」……志ま・あづり・230
 洗脚器フェチと洗脚ムード……清水 晴岸・232
 編集ノートと編集あとがき……編集 子・234
 読者通信……236



「狂宴」……一ノ瀬悦子・224
 「ヒポイズナイド、ヘニスナイド」……文津郡三郎・228
 コフロ派のつぶやき「人愛好者の記録」……志ま・あづり・230
 洗脚器フェチと洗脚ムード……清水 晴岸・232
 編集ノートと編集あとがき……編集 子・234
 読者通信……236

風流草紙

伝保心作
淹れっ子え

む

ら



楽あれは
先
苦より
鞭かある



昔
は置仕ら

う

美くしい
惜し
ぐっわ
猿に



い

命がけプレイも
これで楽し
なり

お

おそろしい
器具
並ぶ

く

くしけする

の

のつけから
縄でく
は



黒
髪かなし
主はなく



ア
マニヤ



地下の
室



画集 被虐の白い花びら 四馬 孝・画

白 菊

男はじっと辛抱して何かを待っている。女は今はなんの苦痛もないので平気な顔をしているが、しかし、いつまでも、このまゝでいられる

筈はなかった。やがて……。



芙蓉

真ツ白い雪のような肌が、台の上に重ね餅のように目の前にうずくまっている。しなやかなムチがうなりを生じてなり下された。「ヒーッ」絹を裂くような悲鳴が咽喉の奥からしほり出される。二閃、三閃力まかせのムチは続く……。白い肌は忽ちのうちに、赤いミミズ脹れで埋まった。



梨花

息もつまるような冷たい水が、鋭い水流となって全身にふりそそぐ。無防備の裸身にところきらず襲ってくる水は、鼻口にしぶきをあげて彼女の呼吸を一層困難なものにした。吊られた両手をふりふり、女は水ホースの攻撃を避けて……。



白百合

「どうだ、えい、さっさと男の名前を言うのだ。さもないと、この熱い蠟が、お前の真白い肌の上へポタポタと落ちるのだぞ。さあ、どうだ、それでも、正直に言わないと言うのか。」男のローソクを持つ手は、わなわたとふるえ蠟涙がたらたらと、その指を伝って流れた。



銀木犀

「これでもか、これでもか。強情な女だなあ、お前と言う奴は……」
ホールの真中にある円柱に両手首を括られたダンサーは、ムチ打たれるたびに「ヒイ、ヒイ」悲鳴を挙げ、目からは大粒の涙を流しながらも、男の訊問には白状しようとはしなかった。



白躑躅

「フフフ、これで五分か、まだまだ辛抱できるだろう。アクロバットはお前の商売だったからナ」美貌のアクロバット踊子を引き抜かんとした悪辣なマネージャーは、卑怯な手段で彼女を欺し、うんと言うまで、無惨な姿で縛りあげたのだった。



白薔薇

肉づきのよい白肌が電光に映えて、あたりを一時明るくする程の美しさだった。「ふん、そうして、いくら、かぶりをふったって、しまいには音を挙げるにきまっているんだ。どうせ、そうと分っていたら、痛い目を見んうちに、言う通りにした方が身の為だぞ」



沈丁花

彼女の舌にかませられている鉄製の金具が、容赦なく男の手でギリギリと引きあげられると、咽喉の奥からしほり出すような奇妙な呻めき声を挙げて女の上体が起ってきた。荒縄のトゲトゲが豊かな肌に喰い入って、くびれた乳房がいたいたしかった。



縛の夢

フォト
塚本毅撮影





可憐な人形





モデル

花 本 京 子

年 令 20才

身 長 154cm

体 重 42kg

逆手吊りの苦痛



天

て
ん

女

に
よ

降

こ
う

臨

り
ん



モデル

加賀利江子

年齢 21才

身長 162cm

体重 51kg





優姿花の香り





モデル
花坂道子
年齢 23才
身長 154cm
体重 42kg





モデル 須 川 令 子

無防備





モデル

須川 令子

年 令 21才

身 長 161cm

体 重 48kg

浴室



温泉湯元にて





モデル 櫻井 葉子

モデル

櫻井 葉子

年齢 19才

身長 160cm

体重 63kg



後手吊り





ベテランの 緊縛スタイル

モデル

絹 川 文 代

年 令 21才

身 長 163cm

体 重 52kg





モデル

萩 千 恵 子

年 令 23才

身 長 157cm

体 重 47kg

優
美
と
柔
軟







光澤



ハンモック



ニューフェイス
第一の表情

花本京子



鞭にもだえて



モデル

杉 美 美

年 令 22才

身 長 148cm

体 重 39kg



モデル

平野笑子

年齢 19才

身長 154cm

体重 43kg

モデル

中富綾子

年齢 19才

身長 156cm

体重 45kg



モデル

村井知可子

年齢 22才

身長 161cm

体重 53kg



モデル

X
7



モデル

愛川悦子

年齢 21才

身長 161cm

体重 49kg

モデル

中塚文子

年齢 22才

身長 158cm

体重 54kg





モデル

村田那美子

年齢 19才

身長 159cm

体重 50kg



床柱

モデル

伊吹真佐子

年齢 21才

身長 161cm

体重 53kg

ローソク



悦虐への道



モデル 絹川文代





モデル

坂口利子

年齢 22才

身長 158cm

体重 45kg





乗馬スタイルのドミナ

(BIZARREより)

馬の手綱を握って颯爽と歩を運ぶ二人の女性。鋭い拍車の刺輪が、ぐさりと胸に突き刺さるような一分の隙もないスタイル。スポーティなポニー・テイルの毛髪。蜂のようにくびれたウェスト。誇張された胸と共に、マニヤの心を固く握んで放さない。

遍路の難儀

滝 れい子・画

同行三人、弘法大師と一緒に八十八カ所を巡拝するうら若い二人のお遍路に突如難儀がふりかゝった。悪辣な乞食が巣くっているとも知らず、かまぼこ小屋で一服したのが不覚だった。小屋の中には健康そうな若い女の匂いが充満した。



夕顔の花

滝 れい子・画

灯を消した部屋に黄昏が迫ってくると、薄闇にぼっかりと浮かんだ夕顔の花のような白くむっちりとした女の続肌が、ふんわりと匂ってきた。縄を引くたびに咲きこぼれる白い花。重役と若い妓との二人きりの楽しいプレイのひとつとき。



帯に薊の絵を描いて貰うため解いた帯が始まりで、いつの間にやら床柱へ後手に括られてしまった。「あら、トイレにでも、たゝれたのかしら、でも女の先生だから安心だわ。」

今夜のお客は女流画家

滝
れい子・画



今日おめみえした爺やを対手によも山話がはずんで、その話の通り縛らせている若い庵主さん。豊かな膝をきちんと揃えてうっとりとしている。終電車の轟が遠くで聞えている。

若い庵主さんと爺や

滝
れい子・画





「あさ、とっとと歩くんのだッ」



「どうだ、いじめてやろうか。」



「こやつ、ふざけやがって！」



「じっとしてないと灰を落すよ」

——マゾヒスチック・フオト——

男性責画帖

より

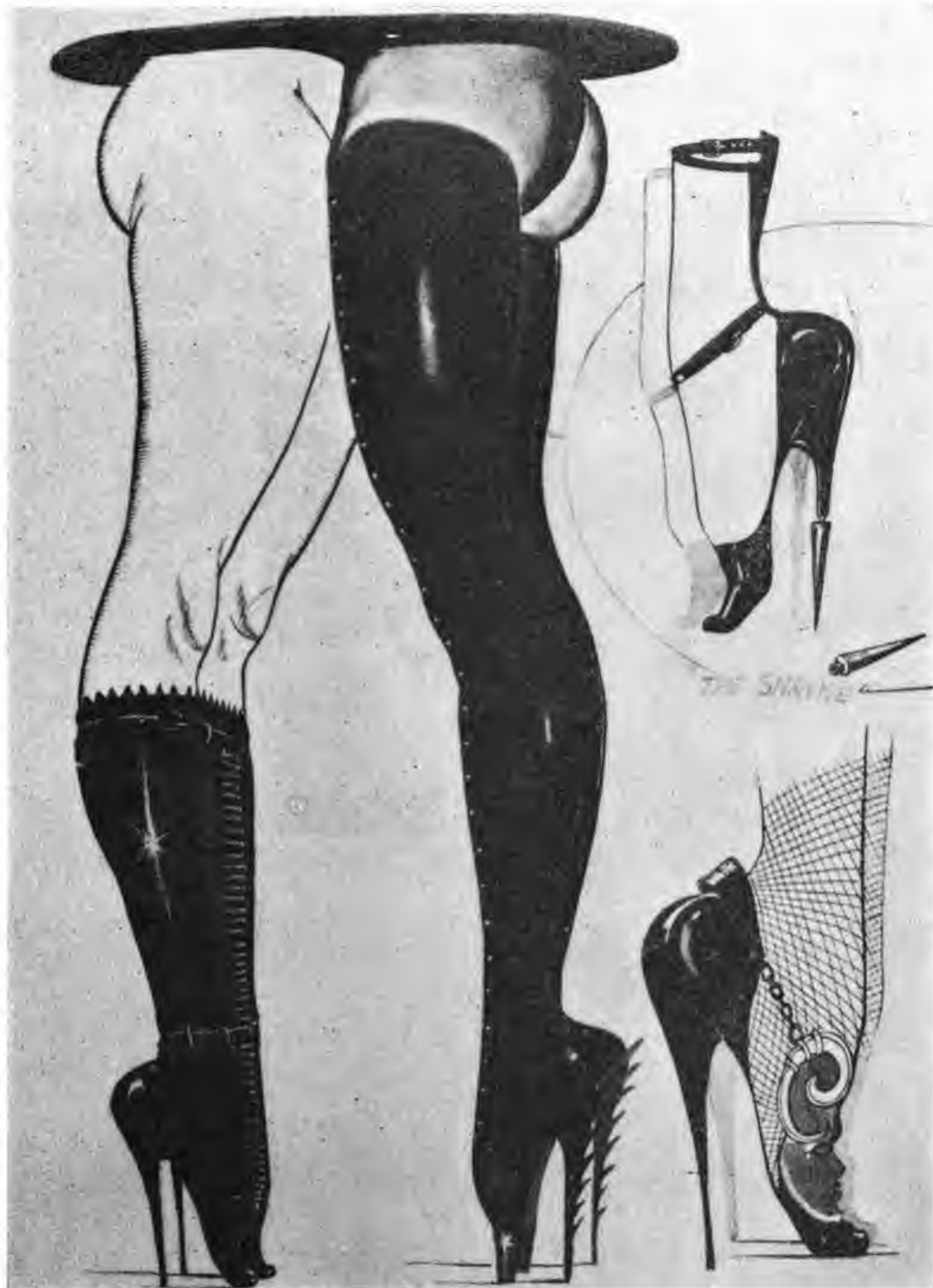
△ R 生画 V

(ねじり責) Yの字型に吊された股間に太い青竹を通し二人がかりでねじる。
「うんうんーむ」とうめきながら身体は次第に縄のようによじれてゆく。



(水責) 兇悪な共匪に捕えられた荒尾中尉は軍服を剥がれ
水責の拷問に遭う。





Footwear Fashions.....(EXOTIQUE No. 4) ヨリ

鋸の刃のようなヒール、針のように尖ったヒール、靴の先が人面になった鎖付のハイヒールなど、かずかずの楽しい幻想を抱かせてくれるフット・ウェア。



女主人と女ドレイ

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装十一月特大号

1960年 11月号

(第14巻第15号 通刊第147号)

緊縛の女王

絹川文代さんに対する

二十の質問とその回答

小林 清

絹川文代

絹川文代嬢へ二十の質問

小林 清

絹川文代さん

ファンを代表して、二十の扉ならぬ二十の質問をお出しして、お仕事に関係のあるいろいろのことについて感想をお伺いしたいと存じます。

随分、失礼な答えにくい質問もあるかも知りませんが、通り一遍お座なりのもの許りでは意味がないので、これもお仕事のうちと我慢なさって、何卒できるだけ有りのままに答えていただきたいと存

じます。(もともと、それ程おどろく程のことでもありません。読めば、なーんだと思われるかもしれませんが。或は物足りないかも知れません。)そうすれば、あなたの写真作品と違った意味で、さらにファンの血を沸かせること疑いなしです。

つい一、二年前までは、大根だとか、表情が成っていないとかいって、奇クの読者通信欄などでも、さんさんこづかれていた絹川さんも(註)その後は奮起一番、進境のあと目ざましく、毎号その麗姿は奇クのファンの血を激流させています。

(註)○絹川嬢、一体全体、苦しくないのか。無表情とはこの事だ。そんなに表情が下手なら、芸者の装いか女学生の装いか何かカラー

を出し給え。馬子にも衣裳」というから特色ある衣をつけ給え。そうすれば、何んとか見られるだろう。(三四、二、読者通信一六六頁)○十二月号の絹川嬢は、表情に少々欠点がありました。豊満な文代嬢の体にくるっと廻らした中繩に緊張感あり、又スポーツ的な足元も美しい写真でした。次回にはもっと苦しみの表情を出してもらいたい。(三四、二、読者通信一六九頁)○十二月号のグラビア・フォトは絹川嬢の表情が硬く、益田嬢の柔かみには及ばぬと思います。(三四、二、読者通信一七〇頁)

最近はお縄に際しての表情も豊かになって薄目を開いてうっとりとしたところ、恨めし気な流し目や、わずかに開いた口の喘ぎよう、虚空を掴んだ手の指の苦悶の表情。さては、きれいな足の指をくの字に曲げた素足のなまめかしさなど、正に緊縛の女王の讃辞を呈して差支えない貫録十分だと思います。今後も誇りと、それから、うぬばれないで自重して、ますます斯界のために活躍して下さい。

さて、その緊縛の女王に、次のような不躰な愚問を連発しますから何卒、気を悪くしないで誌上で賢答いただければ幸いです。質問にしては随分、長たらしい質問だと思いでしようが、答える方では、その方が楽だと思えます。さんざん相手に言わせておいて「オ、ノー、ノー」とか「イエス」とか言えばよいわけで、これが「緊縛についての御感想は？」などと漠然とした質問では、「さあ緊縛の何の感想ですの？」ということになりかねません。それで、なるべく具体的にお聞きする方がよいと思いますので、従って、長くなるかも知れませんが、我慢して下さい。

さて、前口上はこの位にして、早速、質問とゆきましょう。

一、緊縛を受けたのは、奇クの仕事が初めてですか。

二、あるいは、子供の時に、遊びで縛られたことなどありましたか。

三、奇クが初めてとしても、それまでに、映画や雑誌の口絵などで、緊縛場面を見たことは勿論あったと思うのですが、その時にどんな気がしましたか。胸がドキドキするとか、頭がカッカするとか、何か特別の気がしましたか。それとも全く無関心でしたか。奇クの仕事をする前に、奇クを見たことはありませんか。(この間、私が奇クに載ったあなたの『女囚第十四号』の写真を、ある女子高校生に見せたら、胸がドキドキしてたまらなくなったといっていました。)

四、初めて縛られた時の感想

不安だったか、はずかしかったか、いやだったか、あるいは、別に何んともなかったか。

五、被縛を受けて、次のような気持ちになったことがありますか。

(いつもでなくても、一回だけでもよい。)

1、身体がぎゅっと締めつけられるような気がして、何んにも纏わない時より却って気持がよい。

2、ぎゅっと身体が締めつけられるようで、はずかしさと不安、それから、もう仕方がないという気持が却って自分の心を落着かせた。

3、縛られている時の自分の衰れそうな顔付、なよなよした美しい姿態。眼をつぶっているの、直接見ることは出来ないが、縛られていながら、そういう自分を想像するのは、みじめだった。あるいは、楽しかった。

4、縛られたまま転がされて、いろいろな空想に耽っていると、突

然、起こされて、びっくりした。もし、そのようなことがあったとしたら、例えば、どんな空想をしていましたか。

5、男の人って、何故、女の人を縛ることにみんな夢中になるのだろう。女の人だって男の人に縛られることを望むではないか。

6、身体を自由を奪われてしまって、はずかしい、もう征服されてしまった、縄目が喰い込んで苦しい。

7、初めのうちはいやだったが（あるいは何んでもなかったが）縛られることが度重っているうちに、だんだんいやではなくなってきた。

六、最近、あなたの表情は非常に豊かで、殊に恍惚とした表情は真に迫るものがあると思われしますが、実際に緊縛を受けて、うっとりとした気持や、しびれるような陶醉境になりますか。

七、被縛の時、ノドが渇くとか、御不浄に行きたくなくなるとか、その他、何か生理的の変化は起きますか。

八、お嬢さんに、こんなことを伺って、大変失礼かも知りませんが、緊縛とセックスとの関連について、

1、あなた方のように、お仕事の場合は勿論別ですが、普通には夫婦の間とか、恋人同志のような間とかでは、緊縛行為と性愛行為とが或る程度の関連を持つということは通常であろうと考えられます。また、映画や読物で緊縛シーンを見たり読んだり緊縛写真を見たりすることによって、夫婦間の生活に刺激を受けることも事実と思います。そして、このことは、おそらく男女とも共通ではないかと想像します。

ところで、このように緊縛とセックスとが、場合によっては関連あることもあると仮定して、実際に緊縛の対象になる側、すな

わち、あなた方モデルさんにとって、受縄の際、セックスを連想するとか、自分がその対象になったような気がするとか、あるいはそのような情緒的なムードを感じることがありますか。（もちろん、このことは、はじめにもお断りしたとおり、一般論としておききしているので、あなた方がお仕事の場合、特定の縛者や撮影者とあなた方との間の具体的な感情の交流の問題としてはありません。奇巧の場合は、あくまで、緊縛美を捉えて読者を啓発するという芸術的立場から緊縛プレイの撮影を行うことに終始しているのだし、緊張と忙しさの連続で殊に縛者の方は、情緒どころのさわぎではないでしょう。従って、実際の縛者とあなた方と



の関連とかいった特定のものは全く問題になりません。そうではなく、ただ、一般論として、「緊縛を受けたときに、ふとセックス的な情緒を感じることがあるかどうか」ということに過ぎません。くれぐれも誤解のないように。」

2、あるいは、そのようなセックスとの関連は全然感じないけれども、受縄に際していじめられるというか、いたぶられるというか、何か、いためつけられるという気持はすることがあります。

(これも、特定の縛者その人にいためつけられるということではなく、一般的に、被縛ということが、いじめられるという感じにつながるか、どうかという意味、念のため) もし、そういう気持がすることもある場合、次のような言葉、たとえば、捕縛、就縛、囚われ、辱すかしめ、牢屋、鉄の檻、刑務所、収監、責め、拷問、処刑、とかいうような言葉や、それに関係した情緒に連想が結びつくことがあります。

3、あるいは、いじめられるという気持にさえ全然関係なく、ただ、物理的に身体が束縛されて動けなくなっているという気持だけです。

4、それとも、そのような自由拘束の感じさえ起らず、縄や紐など単なるアクセサリー(オビだの腕輪だの首飾りだのに近い)に過ぎないという感じですか。

5、もしくは、上にいったような気持や感じは、何れも起らず、全く無関心、無感覚そのものですか。

もっとも、これらについては、いつもそういう気持にならなくても、一度でもそういう感じがしたことがあれば、あげて下さい。(その場合、たまに起きる感じと、いつも起きる感じを区別して答えて

いただければ、なお好都合ですが)

九、あなたが緊縛を受けるようになってから三に述べたような映画や挿画を見た場合は、やはり以前と違って、研究的、批判的に見るようになりませんか。例えば、自分ならこうするとかいう風に。

一〇、あなたの載っている奇クは全部とってありますか。あなたについての分譲写真も全部お持ちですか。



一一、奇クに載ったあなたの写真のうち、自分で気に入ったものを順に十葉あげて下さい。分譲写真についても同様、十葉。(具体的に何年何月号のどこの何という風にあげて下さい。分譲写真についても同様。)

一二、奇クの記事は読みますか。読むとすればどんな記事を読みますか。読者通信欄は読みますか。あなたに関係した記事も可成りありますが、全部読みますか。今までの記事のなかで、印象に残ったものがあれば、名前をあげて下さい。四馬さんその他の絵や挿絵のなかで、こんなアイデアで自分もやってみたいという絵がありましたか。あったとすれば、何年何月号の何。

一三、他の同性が縛られるところに立会ったことがありますか。その時の感想は。縛る方と縛られる方と、どちらが羨ましがられるでしょう。連縛については、どうお考えですか。一人だけの方がやりよいですか。

一四、奇クには緊縛のほかに、切腹だとか、浣腸だとか、いろいろありますが、何か特別に興味をひかれることはありますか。

なお、次の言葉の中に、何か一寸でも興味か関心をひかれる言葉がありますか。あったらあげて下さい。

縛られる、就縛、括られる、繋がれる、捕縛、牢屋、刑務所、鉄の檻、女囚、奴隷、収監、腰縄、腰紐、しごき、鉄の鎖、手錠、足枷、足鎖、素足、足指、ハイヒール、責め、拷問、海老責、浣腸、護送、引廻し、刑場に引出される、死刑執行、ハリツケ、火あぶり、打首、ギロチン、絞首台、切腹……。

一五、男の人をいじめてみたいとか、男の人にいじめられてみたいとか、特に感ずることはありますか。

一六、妙ない方ですが、ボーイフレンドとか未来の人には、女の人をふん縛る位の意気のある男の方が頼もしいとは思いませんか。奇クの仕事以外に緊縛させたことはありませんか。

一七、足錠や足枷のような金具を嵌められる時の気持と、紐で緊縛を受ける時の気持は全然同じですか。金具、紐、麻縄、荒縄等、もし違ふとすれば、どれが好きですか。

一八、映画や奇クなどで、女性が死刑に処せられるシーン、例えば奇クの都築さん「女囚処刑の図」、や、拷問を受ける図(単なる緊縛でなしに)をみて何か感じますか。可哀そうな気がしますか。自分がそのヒロインになったような気がすることもありますか。

一九、あなたの立場から、こんなアイデアでやってみたら傑作ができるのではないかと思うようなアイデアはありませんか。思い付きでもよいから、何かあったら言って下さい。

私のイメージとしては、こんなことを考えるのですが、いかがでしょう。美しい絹川さんに、世界の名作のヒロインになってもらって、これを奇クの立場から、あるいはこれを緊縛美の探究という立場からといいかえてもよいと思いますが、これを追究して行ったらどうかと思うのです。

例えばジャンヌダーク——ジャンヌ(映画ではバークマン)が捕えられ、牢屋に入れられ、手錠、足枷を嵌められ、拷問を受けた末、刑場に運ばれて死刑に処せられる。その過程を、映画や芝居ではないのですから、舞台装置も何も要らない。むしろ、背景など何も無くして、専ら、あなたの姿態と、特に表情と手足にスポットを当てて、アップで克明かつ鮮明にその心理の動きを捉えて行く。先ず、捕えられ、あなたは観念して両手を揃えて前に差し出す。ガチャリ

と手錠が嵌められる瞬間の部分アップ。牢屋の中であなたは横座りか、あるいは横に足を投げ出している。そこに牢番が来て、足枷まで嵌められる。牢番は、あなたの美しい素足のところににじり寄って、その足首を（あるいは足の方が効果的か）しっかりと握って足枷を嵌める。その瞬間、あなたの足の指は力の限りくの字に曲って、ジャンヌの悲しみと怒りを表わす。（文献によるとジャンヌは手錠、足枷、首枷のほか、胴まで身動きのできないように鎖で繋がれて、「これではあんまりひどすぎます。これでは人間を扱う仕打ちではありません」と思わず悲鳴を上げたところ）それで、ジャンヌのあなたは、両足首を鎖で繋がれてしまっても、しばし、足枷をはずそうと両足をこすり合せたり突っ張ったりして、はかなく可憐にもがくところの足の指の表情を鮮明なアップ。（もちろん、ジャンヌがもがいても鎖が外れるわけではありませんが、ジャンヌの怒りと抵抗をあらわすわけ）それから拷問にかけられ、刑場に引き出されて死刑が執行される。刑執行に際しても、顔の表情、手指（虚空を握む）足指（足枷を嵌められる時と違って、拇指は甲の方に曲って思いきり反らせ、他の四指は裏の方に曲げるとか、五本の指をバラバラにするとか、いろいろやってみる。この五本の指をバラバラにするのは、「縮図」で乙羽信子がつトン巻きにされたとき、このような表情でしたが、バラバラにするのは余り美しいものでないかも知れない。研究を要す。）の表情、それから最後に顔がガクッリとなって絶命し昇天する。（今一寸、何年何月号か忘れましたが、いつかの奇くに、女のキリスト教徒がハリツケにされる場面、ハリツケ台上の拇指が反りかえる足指の表情が描かれているのがありました。また別には女囚が絞首刑に処せられる瞬間、足の爪が折れ

んばかりにくの字に曲った表情を描写したのもありました。）

この過程を、全部で十葉か二十葉位にまとめて、説明を入れて編集すれば、悲しくも美しい一つの物語が出来たのではないのでしょうか。そして、この過程は場面場面の完成図、出来上り図を静的に捉えないで、文字通りプロセスを動的に捉えられる。例えば手錠を嵌められる瞬間、足枷を嵌められる刹那というように。そうすれば、そこに生き生きとした動感が出てくるし、また、十葉の写真が二十葉も三十葉もの効果を発揮するでしょう。昨年、東京でバレエの貝谷八百子がジャンヌをやり、私も観ましたが、八百子自身については、ほとんど動きをしないで、専ら鎖をまとって台上に立ったまま、表情や小さな仕草でやりましたが、当時なかなかの好評で、大成功をおさめたといわれています。これらは、今迄宗教的立場から扱ったものが多いのですが、今度は緊縛美の追究という全く新しい角度から取り上げてみるのです。

あるいは、ノートルダム・ド・セムシ男——エスメラルダ（映画ではジーナ・ロドリゲス）は捕えられ、拷問室に運ばれて、右の足指に足枷責めの拷問にかけられ悲鳴をあげてノケぞって無実の罪を告白し、地下牢に収監され、ここで改めて厳重に足鎖で繋がれ何日か置かれ、次に処刑の当日は、両手を縛られ首綱をかけられ、足鎖を外すされて、ノートルダム寺院に運ばれてゆく……の過程も面白いでしょう。なお、映画のストーリーや場面なら、外にいくらもありましょう。

その他、日本でいえば八百屋お七、白木屋お駒、など、いろいろありましょう。お駒についての文献によると、「処刑の日、牢から引出されたお駒は、後ろ手に括られて黄八丈の大格子縞袷で栗毛

の裸馬に横座りに乗せられたが、赤い蹴出しから白いムッチリした素足をのぞかせた姿は、余りにも艶で、見た者のうちには三日三晩ふるえの止まらない者も続出。惜しい、もったいないの声は沿道にあふれ、永く白木屋お駒の名をとどめた……」とあります。要するに、絹川さんのように美しい女性が捕えられ、牢屋に入れられ、責められ、死刑を執行されるといういたましい過程は、それだけで十分素晴らしいストーリーになるし、おそらくファンを熱狂させること間違いなしだと思います。一つ、編集の方をお願いして、佳作、名作、傑作を残してくださいませんか。

二〇、絹川さんは、皆がいうように、顔や肢体や脚線など、何れも美しいけれども、私は一寸、人の気付かないところ、その素足も特別美しいことを指摘したいと思います。足指の表情もなかなか豊かで、いつも感心していますが、撮影に際しての足の指の表情などは、御自身で注意してつけるのですか、それとも無意識の天成ですか、あるいは、撮影者の指導によるものですか。女優さんで素足の表情の豊かだった人は、外国にはたくさんいるのですが、日本では、

往年の高峰三枝子さん



に指を屈します。彼女の場合は、天成もあるかも知れませんが、そ



れ以上に自ら自分の素足を意識して、努力したらしい。絹川さんのすらっとした脚線、きれいな足の指、その先にちりばめられたやや子供っぽい可愛いらしい足の爪の恰好など、高峰三枝子さんのそれにそっくりです。絹川さんは、足の爪は何日おき位に切りますか。

その場合、日本鉄ですか洋式の爪切りですか。ペディキュアは、マニキュアと同色ですか。爪を切る度毎につけますか。本当の美人や身だしなみは、身体の隅々にまで気を配るところに生れるといいますが、人の一寸、気付かない足の爪の行き届いた手入れとか、撮影の際の足指の表情とか、こういった隅々のところにまで気を配ることが、あなた全体を、あなたの作品全体を、宝石のように輝やかせることになるのです。ますますよく手入れして、ますます美しくして下さい。

さて、最後に、絹川さんの足のことに言及した序でに、素足と女性の羞恥感情一般ということについて、絹川さん御自身の感じなり御感想なりをきかせていただきたいと存じます。

仕事の場合は、もちろん別として、普通の日常生活においては、例えば女性が胸部などに一種の羞恥感覚を持つことは事実でしょう（もっとも、汽車の中などで、胸をはだけて乳をやる人もいますけれど）。足について考えてみた場合、一般に日本女性は、日常生活で素足を人前にさらすことは別に何んとも思っていないことは、御承知のとおりですが、何かの場合に、ふと、足にはずかしさを感じるといふこともあるものでしょうか。

外国のはなしになりますが、南方の熱い国の人達は年中ハダシですから論外として、奇巧の文献によると、「例えば、中国、蒙古、アラビア（イラク）、ペルシャ（イラン）、トルコ、イスパニア（ス

ペイン）などでは、女性はその素足に羞恥感を有し、また、これをもって異性の愛欲をそそった。……イスパニアにおいては、女性の足をもって性的刺戟の出発点となす思想あり（私の註、性的刺戟の出発点とは、どういうことかよく分りませんが、性愛行為の前戯として相手の足を愛撫するということか）、女はその足を人に見せることを恥じ、皇女達も決してその足を人に見せなかった……」（二十七年七月号本誌所載『女の足の蠱惑』赤坂剛氏）とあり、また、日本の誰かの小説には、ある娘さんが、まだ膚寒い春のある日に街に出るのに、わざわざ靴下を脱いでサンダルを履いて外出するくだりがあり、作者は「彼女は女の素足が異性の気持をそそることをちやんと計算に入れているのである……」と書いていましたが、このように足を隠したり、逆に見せびらかせたりするということは、どういふことなのでしょう。

前の外国の例を見ますと、スペインは別として、あとは大体その風俗や習慣や宗教から、女性が身体を隠蔽する傾向の強い国が多く、従って、「隠すから見たくなるのだ。見たがるから見せびらかしてやるのだ。」ということになるのか、あるいは、もともとはずかしから隠すのか、卵が先かニワトリが先かということにもなりましようが、こんな議論をここでしても始まりませんから、先に進んで話を戻しましょう。

私の経験では、二十人近くの女性（大部分一八―二五才位の学生かBG）の横座りの写真を、それぞれ一人ずつ撮ったことがあるのですが、その二十人ばかりのうちの一人は、（家事見習中）「靴下を取って」というと、「恥かしいわ」といいながら靴下を脱ぎ、あとの五人（BG四、人妻一）については、横座りのポーズをとって

から、何れもスカートの裾で素足を隠そうとするのです。もちろん、こちらは「そのままです」といって、露わにしたまま全部撮りました。が、この場合、スカートで隠そうとしたのは、はずかしいと思ったからでしょうか。それとも、人前に足を投げ出して写真を撮っては不作法だと思ったからでしょうか。

もっとも、こんなことは、馴れてしまえばバカ気なことでしょう。

絹川さんは御自分の素足というものについて、恥かしいとか、あるいは異性の関心をそそるものであるとか、何か意識されたことがありますか。それとも全く無関心でしたか。

先程、私は撮影に際して、絹川さんの足指の表情まで豊かで感心していると書きましたが、このことは、私がこの小文でいろいろお伺いした他の事項と同様に、今後のお仕事に関係あるきわめて大事なことだと思いますので敢て附加しました。

(あとがき)

絹川さん、随分非礼な質問を並べたうえに初めはできるだけ簡条書きで済まそうとしたのですが、結局随分長いものにな



ってしまい、しかも、最後の二つなどは、国会議員のように質問に名を藉りて自分の意見を述べ立てたような恰好にさえなってしまう、大変恐縮しています。これも、質問の意の在るところを徹底させて、立派なお答えを得たい一心から出た行きすぎと、お許し下さい。

私がこの小文において意図したところは、お仕事を通じて生起するもろもろの現象についての率直な御感想を、絹川さんを通じて伺

いたいことにあります。

・もちろん、お答えを得なくても、第三者として、こうでもあろう、ああでもあろうと臆測や推量することはできません。しかし、臆測や推量をいくつ積み重ねても、ひっきりや、臆測や推量の累積にはなっても、一個の事実にはなりません。想像や創作を何べん積み重ねても、事実は生れて来ないでしょう。

私は想像や空想の価値を否定するものではありませんが、事実との関係はそのようなものだと思います。それで、私としては、絹川さんを通して、それらの事実を知りたい、真実を探究したい。そして、これは、そのお答えの累積は、貴重なものになると思います。私も単なる好奇心や物好きからだけで、やっているわけではありません。

もともと、奇クが苦勞して、緊縛美の発見や、人間性の奥深くひそむ、もろもろの性向の忠実な探究に努力しておられることは、まことに貴重な労作であり、従って、それぞれの人々の熱狂的な支持を受けているものであり、また、あなた方は、その中で重要な役割を演じているヒロインである次第でもあるので、どうか、それだけの粘りをもって頑張ってくださいようお願いしますとことです。

二十の質問への回答

絹川 文代

編集部の方から「紅色の自画像」の続きを書くようにと、顔を合すたびに言われていましたのに、生れつきの物ぐさから、とうとう途中で尻きれトンボになってしまい、どうもすまないと思っていますしたところ、小林さんからの二十の質問を持ってこられて、その返

事を書くように、と言われましたので、埋め合せのつもりで出来るだけ丁寧に思った通りを書こうと思います。

私のこの拙いお返事が幾分かでも皆様のご参考になるのであればうれしく思います。文章を書くのはニガ手ですので、うまく書けるかどうか心配です。今、質問状の一から二〇まで読ませて頂きましたが、すぐお答えできる事柄もありますが、雑誌や写真などを見ないことには、すぐにはお答えしかねるような質問もあるように思いました。とにかく、一から順を追うて正直にお答えします。

一、緊縛を受けたのは、お訊ねのように奇クのモデルになったのが最初で、それから二年半ぐらいになりますが、他では、そういったお仕事はしていません。

二、子供の時に遊びで縛られたというようなことも只今の記憶ではなかったように思います。

三、私は映画が好きなので、よく見ますが奇クのお仕事をするまでは、緊縛場面だけについて正直なところ、余り深くは関心を持っていなかったようです。映画を見るといっても、筋の運びや、甘い雰囲気、主人公の運命などについて熱中して、それだけ楽しんでいました。それが、奇クのお仕事で自分が縛られるようになってから、妙にそういった場面ばかりが強く印象に残るようになりました。多くは殆ど、あっという間に消えてゆく短い時間なのですが、胸がどきどきしたり、時には全身がかかっと熱くなって、急に汗ばんできたりします。そんな場面を見たいと思って、映画館へ行くわけはありませんが、緊縛場面が多かったりすると、自分がわざわざ、その為に映画を見に来たように錯覚して思わず胸をどきどきさせて熱中したりすることがあります。映画では日活のアクションものが

第一番に好きで、時代劇ではやくざ物が好きです。次にはミュージカルもの、松竹調のメロドラマは好きではありません。

奇クのお仕事をする前には残念ですが、奇クを見たことはありません。又、雑誌の口絵などでも、特にそういう絵を見たいと思って見たことはありません。

四、初めて縛られた時の感想といっても、お尋ねのような不安だったとか、はずかしかった、とかいうような気持は持たなかったと思います。嫌だったら、このお仕事続けておりませんものね。それまでも、舞台に立ったり、カメラの前に立ったり、大勢の人から見られるということには馴れておりましたから、縛られる、ということに対して殊に、お尋ねのような

気持は抱きませんでした。でも、別になんともなかったかと、おっしゃられると、そうとも限りませんの。

やはり、今まで一度も経験したことのない、自分の身体を縄で縛られるのですもの。少し不安という気持でしようか。言葉ではちょっと、うまく説明はできないのですが、不安といえ、人間が何か初めてのことをやる時の淡い不安、といった程度でしようか。その時の気持を今思い出そうとしています、それ以上、はっきりと覚えておりません。

五、被縛を受けて、次のような気



持になったか、というお訊ねについて。

1、縄で力いっぱい縛られると、身体がぎゅっと締めつけられる気がするというよりも実際に文字通りに身体が縄できっちり締めつけられるのです。後手に括られて、胸や腕がきっちり締めつけられるのは悪い気持ではありません。普通の写真モデルに比較して緊縛モデルの方が、なんだか私にぴったりするように思います。

2、最初縛られたとき、少し不安のような気がしたと思ったのは、今までに自分のお仕事の中に、そういったことがなかったために感じたことで、二度目からはそういうことはありませんでした。

3、お尋ねの質問と少し違うかもしれませんが、他の人から美しく見られたいという気持は、女の方でしたら殆どの方が持っておられるのじゃないかと思っています。それで私も縛られて写真をうつされる時は、こうしたら美しく見えるだろうかとつとめて美しく見えるように心掛けております。縄で縛られた哀れな顔を自分で想像するのは、みじめだなんで考えたことは一度もありません。それよりも、こうしたら美しく見える、男の方が美しいと見てくれます、といったことに楽しい気持がします。大体、私はどんなお仕事でも楽しくさせて頂いておりますが、このお仕事は楽しいものの一つです。

私の身体のどの部分でも、美しいと見て下さる方のいることは、うれしいことですし、その為にいろいろと努力することは、楽しいことです。どういふ風にしたら、男の方の心をひきつけることが出来るか、縛られたモデルとして、一生懸命やるつもりです。

4、縛られたまま空想に耽っていたというようなことは特になかったように思います。

5、はじめのうちは、女を縛ったこんな写真が何になるんだろうと思っていましたが、この頃では、男の人が夢中になる気持が、だんだんと分るような気がしてきました。きっと、女の人、男の人に縛られているうちに、縛られることが好きになるんじゃないかと思うようになってきました。

6、とりたてて、はずかしいとか、征服されてしまったという気持はありませんでしたが縄目が喰い込んで苦しい。とか、肌が縄目にはさまって痛い、とかいうことは何度もありました。辛抱できなくて一時中止して頂いたこともあります。二の腕の肉が縄と縄にはさまっていて、「痛い、痛い」と言ったのですが、試べてみて何んともないと言われるので、そのまま辛抱していましたところ、あとで皮下出血していることがわかったこともあります。



7、初めのうちも殊更いやという気持はなかったのですが、縛られることが重っているうちに、いやでなくなるというよりも、むしろ縛られることが好きになったのではないかと考えたりします。

六、だんだん、そういう演技をつけて貰っているうちに馴れてきましたし、縛られている時の心境なども分ってきましたので、自分でも出来るだけ、そういった場面にふさわしい表情を出すように努力しています。が、なかなか、うまく表情がでないで困っています。時々オーバー気味だと言われる位、私自身としては努力はしています。お尋ねの、恍惚とした表情とか、うっとりとした気持、或はしびれるような陶醉境とかいったことは勿論のこと、その外、痛い、とか泣いているとか、その時の雰囲気、その中へとけ込んでゆこうと一生懸命やっています。実際にそうなるから、表情に出るのか、表情を出すために、そうなるようにするのか、どちらでしょうか。あなただったら、どちらの方がよろしいのです。

七、縛られたからって、特別にそういうお訊ねのようなことはございませぬ。いつもお仕事の初めにはトイレへ参りますものね。女って、実際に縛られているときはかえって平静で、あとで考えたりしたときの方がショックじゃないのかしら。

八、緊縛とセックスについてのお尋ね。

1、実際に縛られてみて、ということではなしに、一般論としてでしたら、普通のモデルになるときよりも、緊縛モデルの方がよりセクシャルじゃないかと想像します。直接、肌に縄や紐が触れるということ、又、縛られてゆく過程に於ても、そういう縄と肌との接触というものが、女の気持にどういう変化を与えるか、ということも御想像いただけると思います。だから受縄の際、そういう情緒的なムードを感じるといふことも事実だろうと考えますが、それも相手次第で、顔を見ても、うんざりするようないやな人もありますし、電話で声を聞いただけでも胸がわくわくするほど好きな人もあります。だから、女にとっては相手が誰だって、只、縛られさえすればそういうムードになる、というのは、言いすぎではないでしょうかしら。私だって、大好きな人からでしたら、その方が縛ると言われれば、喜んで縛られますし、またどんなことをされたって嬉しいしおっしやられるような感情も湧いてくると思います。感じの悪い相手だったら、たとえお仕事だって、縛られるというようなことは、私いやですもの。

2、私の場合、只、縄を受けるから縛られるから、いたぶられるとか、いためつけられるという気持がするということは特別に思いません。それよりもこの人から、だったら、という気持の方が強いんじゃないでしょうか。二人の違った男性から「こちらを向いてごらん」という同じ言葉をかけられても「何を言ってるの、いけ好かない。」という気持を抱く相手と「まあ、こうですの。」と媚を含んで寄りそってゆきたい気持にさせられる相手とがあります。そういう好き嫌いの感情が私には特に強いようですので、一般的にという

のでしたら、お尋ねの気持は、相手によって全然、湧かないときもあり、大変強く湧くときもあるのじゃないかと想像されます。

1、2、3、4、5、の御質問は、殆ど同じようですので一括してお答えしたいと思います。その前に、逆にお尋ねしたいのですが、男の方のことは存じませんが、女性について、誰彼なしに縛られて、このような気持になるものだとお考えなのでしょうか。握手しても、手に何かが触れているという物理的な触感だけの場合もあり、又、電気に触れたように全身に激しいショックを与える場合もあると思います。もし泥棒に縛られたときなんか、恐怖の感情だけだと思えます。しかし、少くとも好意を抱いている相手の人から、縛られるというような場面になったら、一般論としては、相当の感情の昂ぶりを起すのでは、ないでしょうか。縛られた初めの頃、「何か悪いことをして縛られたみたい」と、言うような意味のことを言葉にしたことを覚えております。でも、だんだん馴れてくるうちに、これがお仕事だという気持で、そういう言葉の連想はうすらいできました。

九、そうですね、やはり研究的に見るようになりました。突然、目の前に現れたときは、どきっとショックです。

一〇、雑誌は自分に関係もあるものを時々見せて頂く程度です。写真は私の分は全部、焼増して頂くよう最初願ひまして、アルバムに貼っておりましたが、その中、撮影枚数が非常に沢山になってきましたので、自分の好きな分や、これは残しておきたいと思つたものを特別にお願いして焼増して頂き、今ではアルバムも三冊目になっていきます。分譲写真としては、とりたてて持っておりませんが、私のアルバムに貼ってあるものと重複した分もあると思います。

一一、今、私の手元に雑誌も分譲写真もございませんので具体的にお答えは出来ないのですが、黄八丈を着て縛られているのなんか大好きでした。口絵にも載りましたが、あれは私好みのものを他にも沢山撮って頂いて大きく引伸して今でも保存しております。その外、どうしたわけか口絵にも使われていませんが、バタフライ一つでアクロバットのポーズを撮ってもらったのも自分では好きなので、全部、焼増してもらい、アルバムの第一頁に飾っております。手元に私のアルバム以外、何も参考になるものがありませんので、こんなお答えしかできなくて、お許し下さい。

一二、余り読んだことはありません。先にも申し上げました通り自分に関係したところだけを時々見せて頂く程度です。

一三、私が縛り役になったり或は他の方との連縛などで十回ばかり同性の緊縛に立ちあったことがあります。相手は大塚さん、愛川さん等です。これは縛りの写真撮影のときだけでありませんが、二人、三人、四人と同性が増えれば、或る程度の競争心から、お互いに緊張しますし、お化粧にも時間がかかるように思います。又、反面、親しくなって、いろいろとお話が出来るとなると、お友達になれて楽しいです。縛る方と縛られる方と、どちらが羨ましがられるか、やはり身体の楽な方がいいのじやないかしら。大塚さんを全身ぐるぐるまきに縛りあげて私が「情婦マノン」のラスト・シーンのような恰好に足首を持って背中へ背負ったポーズをとった時など、一枚の写真に十数回もテストである時は本当にグロッキーになっちゃいました。なにしろ、大塚さんは、よく肥っているの重くって重くって。その他、いろんな趣向のを大分、撮り楽しい思い出もありましたが、特写の分とかで殆ど雑誌には載っていません。

処刑されたあとの死体の表情とかで私の大好きな写真も大分ありましたので。

一四、今までの奇クのモデルとしては、やはり緊縛が一番多いですが、流腸や切腹も大分やらせて頂きました。緊縛と同じように、その雰囲気に基づいたりした表情を出すのが大変です。これから、うんと勉強して、そういう表情を出してみたいと思っています。緊縛の際の苦痛の姿態、流腸の際の苦痛と羞恥、切腹の際の悲壮な苦悶。似かよったところもあるようですし、その区別をつけるのも、大変むずかしいことだと思っています。特別に、どれということはない、みんな、それぞれに興味を持っております。挙げられた言葉の中、関心をひかれる順に書きますと、一絞首台、打首、縛られる、女囚、足枷、素足、足指、責め、流腸、括られる、ハイヒール。

一五、ぶん殴ってやりたいと思うくらい憎い男の人もあり、もみくちゃにして貰いたいと思う程好きな男の人もあります。女一人が生活していますと、いろいろな男のあくどい仕打ちを経験することがあります。嘘ばかりつく男、欺して只働きをさせる男、こすい男、こんな男は徹底的に殴って殴ってのばしてやりたいと思います。実際には殴りつけてやるわけには、ゆきませんが、人前でもかまわず大声で罵倒してやります。それで、そんな奴から「あの娘は、大声をすぐ出すから」と言って恐れられますが、時には、つまらぬことから喧嘩をやらかして、あとで困ることもあります。それで、出来るだけつつしむよう心掛けていますが、女だとして馬鹿にする男には大声を出してやりますし、場合によっては爪を立ててやります。でも、誰彼なしにいじめてやりたい、なんて気持ちが湧く筈もございません。憎い男だったら徹底的に、羞かしめ、いじめてやりたい。そ

の反面、私の大好きな男の人が、私をいじめてやると言われるんだっ
たら、私はその人に殺されたって本望ですわ。

一六、思いません。奇クの仕事以外では緊縛させたことはありません。

一七、特にどの小道具がいいということはありませんが、自分を
より美しく見せてくれるものの方がよいと思います。黒いイブシの
かかった足枷を足首にされて、ハダシで道を歩かされる、といった
のは、一度やってみたいと思っています。荒縄だったら、カスリの
着物の田舎娘の風で、浴衣に赤い紐なんかもびったりするんじゃない
でしょうか。いろいろ変ったものを使って束縛されたいという気
持もあります。

一八、「女囚処刑の図」は見えていませんでお答えしかねますが、
時代劇の映画でハリツケになったり、馬で引廻しになったりという
場面は好きですし、自分もそういうヒロインになってみたい気がし
ます。そういった死に直面した際の若い女の色気というものを出せ
たらと思います。先にお尋ねのあった切腹なんかもそうですが、死
に直面したときの美しさというものを、何らかの形で外面にあらわ
されたら、と思います。

一九、私の只今の立場としましては、こういうことをやれと命じ
られたら、出来るだけその雰囲気の効果を手上げるように忠実につと
めたいと思っておりますが、自分から、こういうものをやりたいと
いうアイデアまでは持っておりません。しかし、お挙げになった物
語は意欲の湧くようなものばかりですので、そういう場面をやらさ
せるのでしたら一生懸命やりたいと思います。むずかしいことは、
よくわかりませんが、映画、テレビに出たこともあり舞台の経験も

ありますので、おっしゃるようなジャンヌ・ダークや八百屋お七、
或は白木屋お駒のようなヒロインだったら、十分感じを出せるつも
りです。うんとむごたらしく、しかもうんと美しいものにして、残し
ておきたいような気もします。

二〇、撮影に際しての足の指の表情の出し方については、最近で
は私自身が工夫しています。こういったスチール写真の撮影という
ことは、このお仕事の前には余り経験がありませんので、最初のう
ちは、只美しく写ったらいという気持ちだけを持っていました。今
までのファッション・モデルとかヘヤー・スタイルのモデルとか、
いったお仕事では、感情を外へ出すということより、如何に美しく
撮ってもらうかということに注意していましたから。

そんなわけで、緊縛のモデルになったときも、初めのうちは縛ら
れてきれいに写されるということだけに気を使っていました。そ
の中、次第に手の指の握りぐあい、足の指の力のいれぐあい、視線
のやり方、その他、全身のこなし方などについて、その都度、細か
く指示されたり注意されたりしまして、次第に、そのこつをささる
ようになって参りました。

最近では、「苦しくてたまらない表情」とか「鞭うたれて痛がっ
ている場面」だとか、大体のその場の雰囲気を言って貰って、あと
は自分で工夫することになっています。この頃では、凡そ、要領がの
みこめてきましたので、これからはうまくやれると思います。足の
指の表情については、これからも十分注意して御期待にこたえるこ
との出来る写真を作って頂くようにしたいと思います。

足の爪は四日か五日目ぐらいでしょうか。仕事がかさなって忙し
いときや旅に出たときなんか、化粧靴に道具を入れて持っておりま

すから、出先で手入れすることもあります。爪切りも日本鉄も両方使います。ペディキュアとマニキュアは、いつも同色です。変った色を使ったことは一度もありません。爪を切る度毎につけるということはありません。つけないでいる場合も多いですし、動きの激しい時や、お炊事、お掃除で落ちた際など、もっとヒソパンにマニキュアするときもあります。忙しいお仕事が続いて疲れている時など、急に呼ばれてモデルになった際、手入れがおこたっていて、「はげている位なら、していない方がましだ」と叱られたことがあります。

たしかに、女性である以上、足の先から頭の先まで十二分に手入れをして、いつも美しくしていることが大切だと思います。殊に私たちのように全身を人目に晒すことを仕事にしている者は、そういう心構えは特に必要だと思います。

最後の素足と女性の羞恥感情ということについてのお尋ねに対しては、今年の春、私自身経験したことをお話しして、お答えにかえたいと思います。私のいます婦人アパートは若い人が殆どという関係もあって、大変あけっぱなしで、みんな服装なんか派手ですので、私なんかも肩までのセーターとかショート・パンツとかいった露出の多いものでも平気で廊下を歩いたり、時には、そのまま散歩に出たりすることもあります。どういうわけか、私がなんでもないありふれたワンピースを着たりしていても、大変挑発的に見えるらしく、お友達とお揃いで作った服でも、そのお友達が着て歩いても、なんともないのに、私だけが、なにか露骨だとか挑発的だと言われたことがあります。

大体、私は外出勝ちですので、家のことは通いの女中さんにして

貰っているのですが、その日は、丁度、私が旅から帰った日で、女中さんもおらず、冷蔵庫も空っぽでしたので、買い物籠を提げて、ぶらりと市場へ出かけました。ショート・パンツにサンダルという恰好でしたが、自分では別に気にもとめず、近道をして私鉄の線路づたいにやってきたときです、丁度お昼休みで道の片側には、ずらりと二十人ばかりの線路工夫が休んでいました。

線路に沿った狭い道ですので、その人たちの鼻の先を通らなければならぬのです。「困っちゃったなあ」と思いましたが、今更、引きかえすのも変なので「ええ、ままよ」と、そ知らぬ顔をして歩いてゆきました。二、三人行きすぎた時、その人たちの中から「姐ちゃん、きれいな足やなあ」という冷やかしの声がとび出しました。それをきっかけに、あちらこちらから、「真白い足やなあ」とか、その外、いろんな冷やかしの言葉をあびせかけられました。その時ほど、自分の足に注がれている痛いような視線を恥しいと思ったことはありませんでした。

その男の人たちの何十という視線が、その言葉によって一せいに私の素足に注がれてきたのです。平常、そんな軽装を平気でしている私でしたし、それに、今迄人前で素足を晒したことは何度もあり、写真撮影でポーズをつけて貰っている時など、足の指すら握って、ああでもない、こうでもないというじり回されたこともありましたが、今度のように露骨な関心を足に対して示されたことはありませんでした。

恥しい、といっても、顔の赤くなるといった、あの恥しさではなく、なにか足の裏がこそぶくようになって、そして、そのこそぶきさが必要に上へ上ってきて、全身へひろがり、いても立ってもいられない

「今秋の縛り映画」

東山映史

という奇妙な気持ちでした。早く足をかくしてしまいたい、早く立ち去ってしまいたいという気持ちと、もっと、ゆっくり見せてやりたいという、相反した気持ちが入り乱れました。女にとって、たとえ、それが足であっても、きれいだと言われれば、うれしいわけですが顔がきれいだと言われた時とは違った恥しさを足に対して感じたのです。足をかくしたいという恥しさなのです。

それでいて、或る意味では、見せびらかしてやりたいといった自分の身体を誇示したいという、むしろ挑発的な感情さえあるのです。

今秋の「縛り映画」最大のも
のは、大映の舟橋聖一作「白子屋駒子」と中里介山作「大菩薩峠」だろう。どちらも美人のトップスター山本富士子だからいただける。

「白子屋駒子」は駒子が番頭忠八と、夫の多四郎を殺し、そして江戸の市中を引き廻しになる。山本富士子の駒子が白衣で本編で、その豊富な肉体をきっちり緊縛され、ハダカ馬に乗せられ、引き廻される姿は今から楽

しみである。忠八は新人の小林勝彦、原作には、日本橋の晒しものが出ていたが映画では巻頭に引き廻しがある。ラストの伏線というところが「近松物語」の長谷川一夫と香川京子のおさん茂兵衛の引き廻しを思い出す。

今一つの大作は「大菩薩峠」の山本富士子のお浜だ。これまでも、入江たか子、三浦光子、長谷川裕美子らがやっている。許婚宇津木文之進に勝を譲ってほしいと相手の机竜之介に頼みに

から不思議です。このときの心理をうまく言葉に言いあらわせないのですが、とにかく、自分の足がこれ程までに、あの人たちの注意をひいているということは、私にとっては、全然、嫌な気持ちばかりでなく、うれしいような恥しさでした。

もし、あれがサラリーマンのような人たちでしたら、チラッと遠慮深げに視線を走らせるぐらいで何も言わないでしょうし、あの線路工夫の人たちにしても、二人かせいせい三人ぐらいだったら、あんなひどい冷やかしかたはしなかったでしょう。

丁度、いき入れて退屈しているところへ、赤く染めた毛をいただけで、風になびかせて娘一人が買物籠を提げてショートパンツで来たのですから、あの人たちを刺戟したのも無理ないのですが、もし黙っていてくれたら、私はそのまま足早やに通りすぎてしまっていたことでしょう。でも、変な冷やかしの言葉をかけられたばかりに、私の感情に非常な動揺を与えられてしまいました。

気分的には下品な線路工夫だと、さげすみながらも、私の身体の方はなんだか、むずがゆいような気持ちを抱かされたのです。しかしその時の私は、怒ったような顔つきで、脇目もふらずに、さっさと行きすぎてしまいました。買物をすました私が、帰りにその場所を通ったときには、その線路工夫たちは、汗を流しながら枕木のかえをしており、私の方へ視線を向ける人もありませんでした。

男の人たちが若い女の素足に対して強い関心を抱いているということが、そのときはっきりとわかりましたが、そういう目で見ると今迄も、男の人たちの視線がチラリチラリと私の足に向けられていたことを思い出します。女の貞白い足は、男の方にとって魅力的だということを知らされた思いで、これからも、緊縛モデルとして十

行くお浜、その艶姿を見た竜之介はその帰途をかどわかさせ、水車小屋で、猿ぐつわをはめられ、縛られたお浜を犯す。そうして妻にする。今度の竜之介は雷蔵、雷蔵お富士の美男美女の「大菩薩峠」は美しいだろう。「大菩薩峠」には可憐な巡礼娘お松が出る。今度は中村玉緒。「大菩薩峠」で祖父を竜之介に斬られ、義賊、裏店の七兵衛に救われ、神尾主膳の屋敷へ腰元奉公。此処がエロ、グロの殿堂。かるた会のため遊びで、札をとられるたびに一枚ずつはがされ、長襦袢を脱がされようとする。此処で救われるのだが、彼女の伯母のお豊が、お松を知らぬと断り、七兵衛からリンチを受ける。真ッ裸で、密通の番頭と、店頭で晒しものになる。東映作品では、日高澄子のお豊が長襦袢一枚で晒されていた。今度は誰かきまっていけないか、どの様な目にあわされるか。

らしいが、新人が縛られる筈。「切られ与三郎」といい、このところ大映に縛りシーンが多い。「競艶八剣伝」では、美川紙子がスパイで腰元に入り、ばれて縛られて拷問され、男装の阿井美千子が捕えられ乳房を調べられる。彼女も「甲賀の密使」などでよく縛られている。最近では第二東映の作品に縛りがない。角田喜久雄の「将棋大名」では、中里阿津子のお千代が捕えられ、人質となって立木に縛られ、猿グツワをはめられ、責められる。他にも中藤が下男と縛り合されたり、但し、縛りだけである。高田浩吉の「はだか大名」でも青山京子、円山栄子らが縛られ、犯されかけたり、仲タスリル・シーンが多い。次郎長シリーズの「次郎長血笑記」では、近衛十四郎と雪代敬子の巾下長兵衛夫妻が下田の久六に捕えられ、縛られてなぶり殺しにあう。石松殺しで凄惨な殺しを見せたので楽しめる。

分、素足の美しさを出すよう心掛けたいと思います。

それから、男の方達の視線について、今ちよっと思いついたのですが、電車やバスに乗っているときなど、無遠慮な視線を強く全身に感じます。でも、そんなことは外出するときは、いつも経験することですし、殊更、無視するような態度でいますので、別になんともありません。丁度カメラの前に立ったときや、舞台、或はステージで沢山のお客に見つめられたときなど、大して心の動揺を起さないのと同じように、そういう心構えといえますか、心の備えが出来ているからでしょうか。それが、なんでもない一寸、手足や脛、襟足などをチラッと見られたといったことでも、心にすきがあるときは、むしろように恥しく思うときがあります。お尋ねのことに関連がないかもしれませんが、書いてみました。

きわめて詳細な御質問に対して、お座なりのお答えばかりのようになっちゃいまいし申し訳ありません。この二十の質問状を拝見しましたときは、あれも書こう、これも書こう。この間にはこう答えようと思っていましたのに、いざ机に向ってペンを持ちますと、中々原稿用紙が埋まらず、思ったことの半分も書いていないことに気づき、心残りの気持ちにさえなっちゃいました。でも、只今の私のいつわりのない気持ちを正直に書いたつもりです。正直に書いただけに、或は前後矛盾したところが、あるかもしれませんが、それは私の筆の至らないところとお許し下さい。

もしお逢いして直接お答えするのでしたら私、もっともっと、沢山お喋りしてしまうかもしれません。

どうか、今後ともよろしく御指導下さるようお願い致します。

(おしまい)

〔告白〕

アクロバット残酷記

△私のつたない体験の一部です。▽

水田 真紀子

(香川県大川郡三本松町)

私がB子さんと特に親しくなったのは、私が文化女学院の三年生の春頃からでした。B子さんはどちらかと云うと今でいうドライで多分にM過剰の方で、席がとなり合っている関係で知りあう様になったのですが、特に私を何かと面倒みたり、かばって呉れたりして私もB子さんを次第に頼りにするようになってきていたのです。

よく女学生仲間で云うS的存在の關係になつていたのかも知れませんが。友達からもよくひやかされたりして又、私自身もB子さんによく甘えて行ったり、B子さんに可愛がって

もらうのを嬉しく思う様に事実なつていたのです。

その年の夏、夏休みに入ってからのことでした。B子さんが面白い所へ連れて行つてあげると誘ってくれて、都内の、とあるモダンバレのレッスン場へ行つた時のことでした。

東横線の沿線からちよつと入つたところだつたと思いますが、B子さんはその女の先生と親しいらしく、友達のような口をきいていました。フロアの片隅、ドイツ一枚になつた女の人たちが激しいレッスンを続けているのを私も珍らしいものをみる思いで見物して

いましたが

「ねえ、アクロバットのすごいところ、あとで特別に見せてあげるわ」

B子さんに云われて

「まあホント、見たいわ」

「とてもスリルがあるのよ、フフ」

B子さんは意味あり気な笑いをしましたが、そのうちにレッスンが終つて、お弟子さんたちが帰りかけるのを先生が、

「S子さん、ちよつと残つてちょうだい」

と一人の女の人を呼びとめました。呼ばれた女の方は、私より一つか二つ年上の眼の可

愛いいスラリと伸びた姿態の美しい方です。

「今日はこの方にアクロバットの練習をおみせするのだからちょっと残ってね」

重ねて先生に云われて、何故かその方は瞬間パツと顔を赧らめて

「だって、今日あたくし……」

恥かしそうにしました。B子さんが、

「S子さん！ そんなこと云うと、もっと可愛がられてヨ」

おつかぶせるように云いますと、Sさんはそれきり下を向いてしました。

「さあ」

先生にうながされてSさんは、一しよに奥のドアに消えましたので

「B子さん、どうしたの？ あの方何だか気がすまないみたいじゃないの」

「ああいうのよ、あの子、とってもハニカミやなの。でもすごく可愛いだよ」

「まあ、可愛いだなんて」

「今に分るわ、だけど、あんたも今日はずっとあたしの云うこときいてね。我がまま云わないで」

「アラ、変なこと云うじゃない、あたしこそこんなところ見せて貰ったりして」

「だからあたしと一緒にいるのよ、今日はう

んと可愛がってあげる」

「いやだわ、B子さんたら」

何時にないことを云われたので、私は少し恥かしくなって

「B子さんの意地悪……」

ぶつ真似をしたりしました。間もなく先生が現れて

「さあB子さん、お連れして」

と云いましたので、私もB子さんに手をひかれて奥のドアを入りました。廊下を曲ったところから階段が下についていて

「あら、地下室ね」

私が驚いて云うのをB子さんは私のうしろから押すようにその階段を降りてゆくのです。先生が先に立って地下室のドアをあけたので、何の気なしにその中へ入って行きましたが、私は中の光景を見てアツと驚きました。地下室はコンクリート張りの殺風景な部屋でしたが、鉄格子だけのベッドや木の台やロープが天井からぶら下ったりして、まるで何時か映画で見た西欧の牢獄みたいなのです。いえ、それだけではないのです。Sさんと云われるあの女の方が、後手に縛られて傍の鉄の柱につながれているではありませんか。

「まあ、どうしたの？ これは」

私が思わず叫ぼうとするのを、B子さんは「これからアクロバットのレッスンが始まるのよ、さあ見物しましょう」

「だってあの方、縛られたりしてるじゃないの」

「プロローグよ、いいから黙って見てれば分るわ、もっとも騒いだって外へは聞こえないけど」

「あたしいや。いやだわ、こんなこわいことするの、帰るわ、帰して」

あわててドアを押そうとしましたが、動きません。

「ホホ、鍵をかけましたわ」

先生の声です。

「B子さん！」

ふり向いて

「あたしいや、こんなの。帰して」

「帰さない」

B子さんの声が急に冷酷になったようです。

「我がまま云わないで見ましようよ、だからさっき、あたしが云ったでしょう」

「だって、こんなことをするなんて」

「いやだっても帰さないわヨ、じっとしてな

いんだったら、あんたも縛っちゃうわヨ」

「いや、そんな」

「先生！ その縄かしてエ」

B子さんが矢庭に私の肩をうしろから抱きしめました。

「あッ、そんな……」

私は無意識に逃げ出そうとするのを先生も寄ってきて、さんざんもがいたあげく背中に両手を廻されて縛られてしまったのです。

「ひどいわ、こんなことするなんて」

縄をほどうと一生懸命両手を動かしてみ

ましたが、十字に合わされた手首はビクともしません。だんだんまだ手首に喰い込んでくる様なのです。

「ずいぶん暴れるもんだから、セーラー服の胸のホックが外れちゃったじゃない、ホラ」

B子さんが、その間から手を入れようとするのです。

「ヤヨ、やめて」

「スリッパの肩紐までずれてるわ、ホラ」

その上まだ肩を片側脱がせ

ようします。

「ああッ！」

恥かしさのあまり声がつまりました。

「いい肌してるわね。よけいあんたが好きになっちゃった」

B子さんは、その素肌にされた私の肩を抱いて

「もっと上を向きなさいよ」

片方の手であごを邪慳に上に向けて

「いい唇してるわ、ネ先生」

私は眼を閉じたまま恥かしさに真ッ綴にな



ってしまいました。こうして私はそのままコンクリートの床の上に転がされて、それから始まったS子さんに対する色々なプレイを見せられてしまったのです。

S子さんは柱からほどかれて先ず私の転がっている前に連れてこられて縛られたまま正座させられ、胸へも乳房の上下に二、三巻き別のロープをかけられてまるで罪人の様にされて、先生が太い棒の様なものを持ってきて背中その縄に通してから

「この人の前でレッスンを始めるけど、いいわね」

と念を押しました。S子さんはうなだれたままそれに返事をしませんでした。先生がその棒をゆっくり廻し始めますと

「アッ！」

小さな悲鳴が洩れてS子さんの顔が苦痛を忍ぶ様に上を向いてきます。棒を廻す事によって胸にかけた縄がしまつて身体と両腕に喰い込むのです。次第にS子さんの身体がうしろに反る様になって正座させられている股が開いて

「ウーッ！」

苦痛を噛みしめるS子さんの声が耳をつきます。

「ホラ、もっと廻すのがいいのかしら」

先生は尚も力を加えてゆきます。

「あー、あッ！」

S子さんはたまらなくなってきたか

「見、見せます、先セッ！」

首をうしろに反らせたままこう叫びました。

「そう、ならいいわよ、これ以上がまんしてると綺麗な肌に痕が残るからネ」

そう云って先生は笑い乍ら棒を抜いてB子さんに

「じゃあ、S子を裸にして」と云うのです。

「まあ、ハダカ？」

私がびっくりして我を忘れて声をたてました。

「先生、あたし自分でなります。」

S子さんがうるんだ眼をあげてけなげにも云うではありませんか。



「いい子ねエ、じゃあ縄をほどくわ」

S子さんを縛ってあった縄は一旦ほどかれました。S子さんは立ち上って、腕のところを痛そうにさすりながら隅の方へ行こうとするのを

「S子、ここでなさい」

先生に云われて仕方なしにその場で服のボタンを外しかかりました。先ほどのレッスンは終って帰りかけていましたのでS子さんは

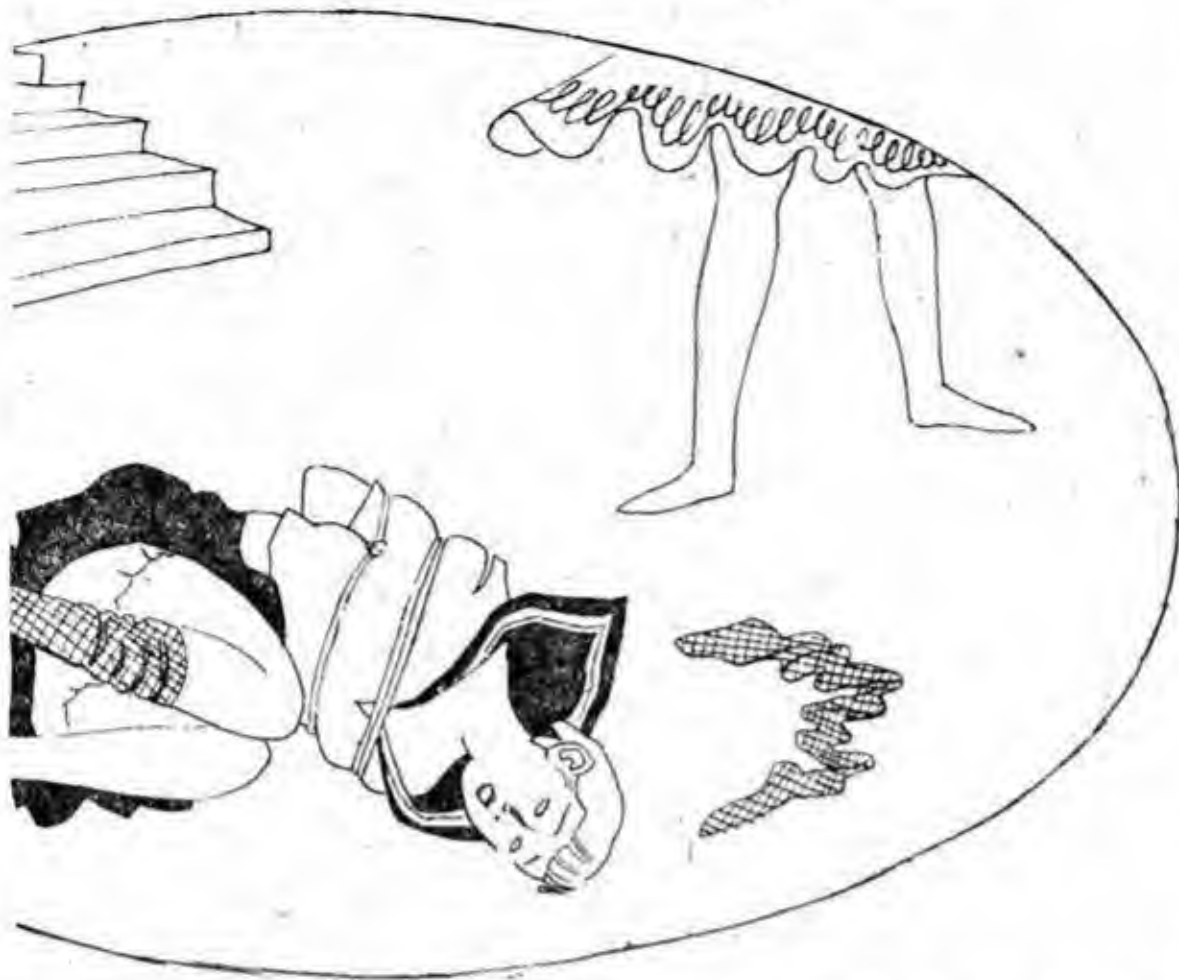
自分のスーツを着ていたのです。上着をとり、スカートのファスナーを外して落します。白いスリッパだけになって、その次はナイロンのストッキングを脱ぎました。スリッパも落しますと、あとはもうブラジャーとパンティだけの素肌です。眼をつむってブラジャーの背中留めを外すそうとするのを

「先ずこれまででいいわ」

先生が後ろに廻したS子さんの手をそのまま組み合せて後ろ手に又縛ってしまったのです。S子さんは私の眼の前で裸身を晒け出されたまま再び縛られてしまったのです。そうして置いて先生は手に革のむちを持つてピシリッ！と床を鳴らして

「ハイ、横に脚を伸ばす」

云われてS子さんの両脚は徐々に左右に広がってゆき、アレアレと思う間に一直線に左右に伸びてピタリと床に内股が着いてしまいました。ふくよかなS子さんの脚が思いきり左右に拡がり、スラリと床に着くのをもあたり見て、今まで何の気なしに劇場なんかで見てきたアクロバットと云うものに云い様の



ない痛々しさを感じました。あまり眼近かに生々しいS子さんの素足を見たからでしょうか、それともS子さんの両手が後ろで縛られているからでしょうか。普通こんな場合、音楽に合わせてリズムカルに躍動するので美しい

のでしょうが、S子さんののは只股を無残に押しひろげたままで上体がまるで動かない人形のよらなポーズなんですもの。その姿勢で只じっとさせているのは、もう舞踊ではありません。お仕置です。

私だったらこんなにされる前にもう股がはり裂けてしまうでしょうに、さすがにアクロバットをやっているS子さんの事ですから、そんなに苦痛では無いのかも知れませんが、それでもS子さんの顔は、とてもじっとは見ておれません。

「足を前後に。ハイッ！」

ピシリ！先生の鞭が又床で鳴るとS子さんは床に脚をくっつけたままで足先で大きく円を描く様に片足を前に、反対側の足を後ろに廻し始めたのです。上体はそのままでは今度は脚が前後に一直線に伸びてしまいました。前に伸びたS子さんのつま先が丁度転がされている私の顔の前に伸びてきて、頬に素足の指先が触れるのでした。チラと

見たS子さんの眼に「ゴメンナサイ」とあやまっている様な表情を見ました。「いいのよ、S子さん」そう云ってあげたいくらいです。この姿勢は前よか苦しいのかS子さんは上体をくねって後ろに反らせたり、少し身体を廻したりしました。それを見ていたのでしょうか、先生が

「S子、ポーズが悪いわよ」

と寄ってきたかと思うと、後ろに廻ってS子さんの両腕を伸ばしてグッと上に持ちあげたのです。

「ああッ！」

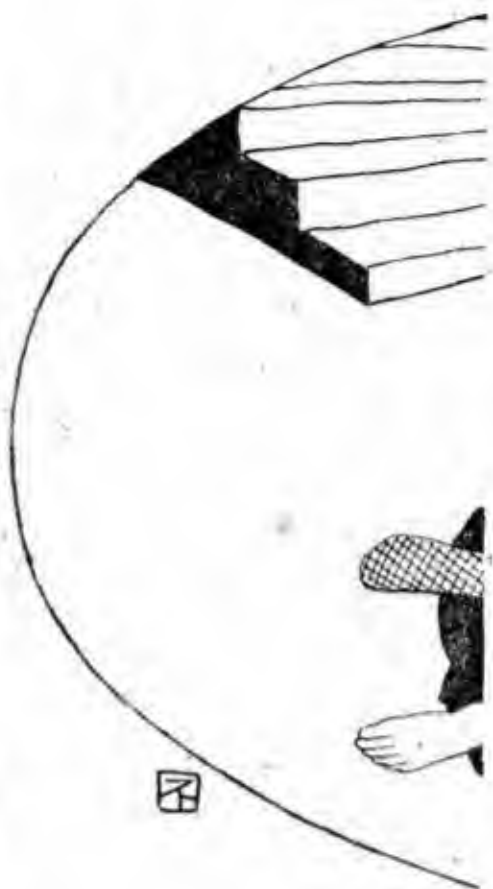
S子さんの細い悲鳴とともに縛られたままの両腕がもち上って、伸びきったままもち上げられ、勢い上体が前に傾き縛られた掌が私に見えるほど持ち上げられると、S子さんは首をガククリ垂れ、腕のつけねの柔い肉がくびれあがるくらいもちあがって

「あーッ、ああ」

長い悲鳴が洩れ始めてくるのです。そんな姿勢で暫く苦しがらせて今度は逆にS子さんのあごを掴んでぐうッと後ろに反りかえるように曲げてゆくと

「あ、あッ！」

S子さんの口から痛々しい声がして、柔い



S子さんの身体は又反りかえってしまいうのです。ブラジャーがグッと突き出た姿になって、あごが上に向くと苦しそうな息づかいがいやでも私の耳に入るので。

「どう、ここが痛いかしら？」

先生が後ろに伸びた片足の、ものの後側を靴の裏でグリグリ踏みつけたりするので。

「ウウウッ」

咽喉がひき吊って声にならないS子さんの声。

「先生、もっと曲げなきゃあいやよ、S子の身体もっと曲るわ」

S子さんが云うのです。

「ホホ、S子相変らずね、じゃあ、こんな姿勢では無理よ。なら、こうしましょう」

此処でS子さんの身体は離されて今度は両

足を揃えたまま床にうつ伏せに寝かされたのです。どうするかと思っていると、S子さんの足首はさき程縛られていた柱を挟むようにして別の縄で嚴重に固定されてしまいました。S子さんはうつ伏せにされたまま両足首で固定されてしまったので

で交叉されて縛られているS子さんの手首にロープを着けて、そのロープを一旦柱に廻すとS子さんの前に来てしゃがんだまま

「じゃB子、こうすればいいんだろ」

そのロープを引いてゆくのです。それにつれてS子さんの身体は当然後ろにひっぱられて頭が上り、肩が床から離れて後ろへと反り返るようになってゆきます。足が固定されているのですからいやでも逆に反る筈です。胸が床から離れ、腰のところから曲って上半身は次第に弓の様に後ろに反ってゆくのです。

「いいわね、センス」

B子さんが喜んでいようです。両手を後ろに取られているのでS子さんの両胸が一層膨らんでブラジャーが張り裂けるくらい膨らんで半ば天井を向く迄曲げてゆかれます。

「もういいわ、センス、ロープを縛ってよ」
S子さんは、そんな姿勢で固定されてしまいました。

「どう、凄いでしょ」

B子さんが今度は私に云うのです。私は余りにひどいので、身がすくんで口もきけません。

「アラどうしたの、ホラ、S子のここんところ、こんなにいい曲線を見せてるでしょ」

そう云い乍らS子さんの脇腹から腰のところをB子はしゃがんで撫ぜるのです。

「アッ！」

S子さんの鋭い悲鳴がして、身体がピクリと動き、その手を避けようとしているようですが、自由の無い身ではそれも出来かねて

「此処さわるのがそんなにイヤ？」

そう云うとB子さんは尚のこと其処を撫ぜるのです。

「まあ」

私までが素肌をさか撫でされた様で身ぶるいがします。ドンナに乙女の肌が敏感なものかB子さんも十分知っているのに、そんないやがらせをするのです。まして脇腹ですもの。「いやアねエ、あんたまでが顔を赧くするのとなんかないじゃないの」

B子さんは、そんな私を見ると今度は私の方へ寄ってきて乱れたままになっている私のセーラー服の肩のところを又払って

「いやよ、よしてよッ」

私がそうさせまいと腕くのを

「あら、ひどい力ね、ようし、こうなったら胸も縛っちゃう」

「いや、いや、かんにんして」

恥かしくてたまらないのを先生まで寄ってきてまるで荷造りでもする様に二人して私の胸をぐるぐる縄で廻し、足をかけたりして、その縄を締めつけたりするのです。二の腕がくびれる程縄が喰い込んで両方の乳房がちぎれるように痛むのを情容赦も無く縛られて、再び転がされた時はもう私は肩で息をしていました。それなのにB子さんたら、そんなにされた私の襟元を

「いやよ、いやよったら」

泣き叫ぶのもかまわず更に押し払って両肩をむき出してしまったのです。幸い胸を縛られていたのでそれ以上脱がされませんでしたけれども、それでも両方の肩があらわにさらけ出されるともう羞恥で顔もあげられませんでした。先生とB子さんがそんな私の姿をじっと上から眺めている様な視線を感じて、横

ざまに転がされてはいましたが、上半身をうつ伏せて顔をそ向けたまま暫く息も出来ないでいたのです。そのうちに、S子さんの

「ウウウウッ！」

と云うせつなげな声でしたので、そっと眼をあけて見ますとS子さんは、あのままの姿で先生に鞭の根元のところで、太腿のところをあちらこちら、グイグイとこねられているのです。

「こんなことで苦しいようじゃあ、アクロバットダンサーにはなれなくてよ」

先生はそう云い乍ら顔を思いきり後ろに反らせて眺めているS子さんを責めているのでした。B子さんはと見ると立ったまま腕を組んで上からそのS子さんの肢態を笑い乍ら眺めていましたが

「先生、もうブラジャーははずさせていい？」

そしてこうする方が面白いわ」

と云って無難作に背のホックをはずしてしまったのです。

「アレッ」

S子さんのブラジャーはパリりと落ちました。綺麗な発育しきったS子さんの乳房は、はちきれるようにとび出して

「ほら、こうするのよ」

何時の間に持っていたのかB子さんの手には大きな鳥の羽が握られていて、それでS子さんの裸にされた上半身を軽く撫ぜ出したのです。

「いや！ あれッ！」

身も世もない声でS子さんが縄をひきつるようにして身をくねらせるのを、脇腹や無抵抗に半ばひらいたままの腕のつけ根や、更に両腕の斜面にまでその羽で擦ぐってゆくのです。

「またB子の趣味が始まったのネ」

先生はそう云ったきりで、それをとめようともしません。S子さんは思い切り動かせる処は全部動かして、腕いて苦しい声を出してB子さんのなすがままにされていました。だって、どうして逃れることが出来るでしょう。私までが身を縮めました。もうこれ以上続けるとどうなることかと思った時、やっとB子さんはその手をやめました。S子さんはもうそれで何かぐったりとなった模様です。

そんなになったS子さんを更に今度は柱からほどいて改めて足首を又一つに縛ってしまふと、ロープで手首を縛った縄に伸ばして通し、膝が曲って次第に手首と足首がくっついてくるのを、そのロープで天井の環に吊り下

げようとしているのです。やがて身体が曲って手首と足首が背の上方で一つに重なる、二人して尚もロープの端をひっぱってゆくので更にS子さんの身体は反りかえって弓なりになり、遂にお腹の処から床を離れて宙に浮いてゆきました。

「ウーッ！」

と一声S子さんが洩らしましたが、その身体はやはりアクロバットをしているせいか、想像以上に曲ったまま床から一米も上った処で止められてしまったのです。さすがに膝のところが抜がって両腕はピンと伸びたままでしたが、体重がかかってくると、とても足を揃えている事は出来なかったでしょうと思います。S子さんは首を垂れて

「ウッ！」

と、それでもこらえきれずに小さくもだえました。私はあまりの仕打ち方に我身を忘れ

「B子さん、ひどいじゃない？」

抗議しようしますと

「馬鹿ね、だまってらっしゃい」

おつかおせるように云うと、私の所へきて

「駄目ね、黙って見てないところよ」

と矢庭に私の両足をつかまえて

「アッ！ いや！」

思わずうつ伏せになるのを、両足首を握ったままそれをS子さんにしている様に後から上に上げようとするのです。両足をバタつかせて、そうはさせまいとするのですが、両手が使えず動いただけで乳房に縄が喰い込むので力が入らずスカートが捲れるくらい上に反りかえらされると

「痛いわ、痛いわ」

悲鳴をあげる始末です。腰のうしろ側が灼けつく様です。下半身がもち上ってスカートが半分以上捲れ上ると痛さより恥かしさが先に立って

「かんにんして、もう云わない」

やっと足を離して貰いましたが、もう足をちぢめても伸してもスカートの乱れを直す事も出来ず、よけいに太腿の黒いストッキングが出てくるばかりでした。そのうちS子さんも下されていて床に横たえられていました。が、今度は両手首を縛ってあった縄をほどかれて両手を左右に拡げられ、別の柱のある台に十字架にかけられたように改めて縛りつけられたのです。S子さんは殉教台に上ったマリアみたいな裸の身を十字にされ、首をうなだれていました。が、先生はそのS子さんの細いウェストの処も別の縄で台に固定するとS

子さんの両脚を左右に拡げさせ始めたのです。両手首とウェストの処で台に固定されているので、両足先が左右に上っても落ちるような事はありませんでしたが、それでも自分の体重が、その縄にかかってその辺の皮膚が痛々しそうです。

「もっと拡げるのよ」

B子さんの声です。S子さんの両脚は自分の意志で相当左右に拡げられましたが、何分宙に浮いているので思うようにならなかったでしょう、どうしても上らない一線がありました。時がたつにつれ、ともすればその高さから次第に両足が下ってこようとするのを「駄目よ、B子さん、そっち側持てよ」

先生が寄って行って二人してS子さんの両脚を思いきり持ち上げ「土」という字の恰好に、いやそれ以上に両脚が押し拡げられてゆき、そのまま足先を両手首を縛った横棒にぶら下げて縛ってしまったのです。水平以上の角度に左右に伸びきったS子さんの両脚が、とても魅力的なポーズをかし出していましたが、お腹の筋肉を苦しうに動かし乍ら、それでもじっと我慢をしているS子さんの身体を眺めているうちに、私は私でたまらなくなってきたのです。と云うのは恥かしい話ですが、先ほどからこうして冷めたいコンクリ

トの床の上に転がされているせいか、夏とは云え身体が冷えてきたのでしょうか。先程からも我慢をしていたのですが、どうにもならなくなつて

「B子さん！」

思わず呼びかけてしまったのです。S子さんを眺めていたB子さんが振り返って

「なあに？ どうしたの？」

寄つて来ましたが、ふと又恥かしさが先に立って云えません。

「何さ、どうしたのよ」

B子さんは私の顔をのぞき込んでいましたが、私が何も云わなかったものですから又、

向うへ行こうとします。私は思い切つて

「B子さん！」

「何なのよ」

「あのネ」

顔を真ッ赧にして消えるような声で

「ネ、トイレに行かせて」

そのまま消え入りたい気持でした。

「なあに？ 何ンて云ったの」

B子さんは聞こえなかったのか、大きな声で聞き返すのです。

「あのネ」

「何サ、はっきりおっしゃい」

「我慢出来ないの。トイレに」

小さい声で云うのに

「トイレ？」

大きな声でB子さんは云っちゃうのです。

「いや！ B子さんたら」

「あ、そう、トイレに行きたいの？」

B子さんは又大きな声を出して先生の方を振り向いて、今度はウインクみたいな恰好をします。先生も何故かニヤリと笑つて

「ははは、そうだったの」

B子さんと顔を合せて意味ありげな仕草をするのでした
(次号へ続く)

感想文

映画「甘い生活」について思うこと

△「週刊現代」8月28日号関連▽

真 崎 伸 一

私は奇譚クラブの頁をひもといているうちに、その甘美な異常の世界に引きずり込まれ精神的に陶醉してしまっている自己を見出し、しばしば愕然とすることがある。この雑

誌を手取るたびに、何と奇妙な魅力をもつる内容だろうかと常に感慨を新たにしている。そこに描写されている、さまざまの世界、又は人生は、まさしく歪んだものである。私はハ

ッキリと言おう。いかに正当化されておろうとも、やはり異常なものは異常なのである。しかし私は、これらの異常をみそくそにやつて否定するつもりはない。こう述べている私は自身の血の中に異常なものがどんとと流れているのであるから、異常の世界を否定することは、即ち自分自身の存在を否定することにもなりかねないからである。奇譚クラブの内容を構成するさまざまな写真や絵画や文章は確かに異常の世界を取扱ったものであると、重ねて言う。然し、奇譚クラブの奇妙な味と言うのは、異常の世界を読者がうっ

かりとしているうちに何か正常な感じとすりかえてしまい、これらの異常の世界の方が当然正常であるような錯覚におとしめる点にあるのではなからうか。無論、読者の方でそのような願望を有しているが故に、心理的に尚一そうその錯覚が強まることは決して否定できない。私の場合は特にその傾向が強いようである。

だが異常はあくまで異常なのである。いかに正当化の為に巧妙な理論を持ち出そうと、その事実を覆い隠すことは不可能なのである。私は時々、私自身をつっぱね投げ出して、もう一人の理性的な私が、異常な私の部分を、冷静に判断せしめる機会を与えることを試みる。得るものは少い。だがわずかに、どこまでも異常の傾斜の中へくだって行こうとする私を、制動せしめるだけの効能があるように思えてならない。下手に用いると、効めが強すぎて激しい自己嫌悪にとりつかれてしまうこともある。

『週刊現代』が八月二十八日号誌上に「暴かれた上流階級の変態クラブ」(映画、甘い生活の日本版)と言う見出しのもとに「あけぼの会事件」のことを載せている。私はこの記事を読んで実にいやな気分におち入った。どうせ興味本位の週刊誌のことであるから、ある程度の虚偽をおりませて、読んで面白いよ

うに書いてあるのであろうが、何故か私の胸内には訳の分らぬやるせない忿懣が込み上げてきた。その記事が真実であるかどうかは当事者でないから、私には全然判らない。然し正常な一般の人々から見れば、その記事の観点は、しごく当り前のことだと全面的に肯定されることは間違いない。正常な人々にとって、私達の異常な世界は、世にも奇怪な理解できない軽侮すべき白眼視すべき現象なのである。次元の異った世界の人々を見るような目で見るに違いない。又、そう見られて当然であると、私は断定せざるを得ないのである。

私達は明らかに時代の中の少数者なのである。しかも優秀な才能における少数者ではなく、奇妙な性向を有するところの少数者なのであり、異端者、まさしく性^{セクス}の分野における異端者なのである。異端者たる者はいつの世においても何らかの形で迫害にさらされる。私とて同様である。だからと言って正常な人々に真向から挑む勇氣は残念ながら私にはない。私は悲しき少数者なのである。私の主張が通用する訳がない。主張を何度繰り返したとて、水の中に油をたらすようなものである。質の違うもの同志はいままでたつてもとけ合わないのだ。そうした絶望の中で、かすかに私は精神分析学や心理学に希望の曙光らしきものを見つけたと思つたことがあつた。

た。それらの学問は權威をもってある程度までは異常性向を支持してくれた。だが医学の一分野として発展したそれらの学問は治療の学問、技術なのである。そこにそれらの限界が厳然と存しているのである。私達がそうなの、だと言ふ事実は同情をもって認めてくれるけれども、そうあるべきだと言ふ主張は決して容認してくれない。

一体、私は何を言おうとしているのか。それは私自身にも判然としない。私は現在、正常と異常のかけ橋を求めて戸惑っているのである。そして私の肉と心は異常の世界の中にひたり切っているのである。だから私の見方がともすれば異常の世界の正当化の方向に偏重するのは仕方あるまい。『週刊現代』は結論として、「甘い生活とは悪徳、乱脈、狂態と言ふはかはないのではなからうか」と、きっぱりときめ付けている。正常な眼から見れば、それでいいのである。然し兎もすれば自己嫌悪におち入る私にとって、異常な私にとって、その結論は恐しく惨酷に響いてきたのである。

奇譚クラブの読者の方々は、いかに考えられるかしらないが、私はこっぴどく打ちのめされたような感じを味ったのであった。それでも私はひそかに甘い生活を夢み続けるのだ。

(完)

わが描くエッセイとコント

「マゾヒズム天国」

田沼醜男
タヌマシコオ

9 わが青春のマリアンヌ

新宿花園の青緑が盛だった頃、ストリップパアの花清久美そっくりの女がいた。当時、彼女は一九才、タイト・スカートが大変よく似合った。脚の線が綺麗で殊に膝小僧の恰好がよかった。

彼女は私よりも背が高かった。私をみとめるとクルリと軽快に踵を返して店の奥へはいって行く。客の靴は女が持って上ることになっていたが、彼女はそれをしなかった。私は自分の靴をぶら下げ、彼女のまるいヒップの後から階段を昇った。

「大分、来なかったじゃないか。今日はゆっくりしてけるんだろ？」彼女の声は何故かセックスを思わせた。私は跪いてパンティーの上から接吻した。彼女は高く笑ってストリップパアのやるようにグイと腰を突きだした。

私は彼女の横に立つ。そして彼女の美しい脚と自分の曲りくねった脚とをならべてみる。

「何してるのよ」

「脚を較べてるんだよ。君の脚、長いねえ」

「そうさ、あたしはスマートなんだよ」

私は熱くなって、その脚を膝小僧をふくらはぎを犬のように舐めまわす。彼女はキャアキャア笑って私の首根っ子にまたがった。私は両手でギッシリと彼女の脛を抱きしめる。

彼女が横になると私はパンティーに手をかけて丁寧にすりおろす。左脚、右脚、と彼女は順に脚をもちあげてパンティーを脱ぐ。私はそれを顔にあてがって体臭を胸いっぱい吸いこむ。

「あんたの犬みたいな性質、よく判ったよ。あたし本読んだんだか

ら。パンティー泥棒、モモ切り魔、あんたみたいな男がするんだね。最低だよ」

彼女は若いからマゾヒストとモモ切り魔の区別が判らない。しかし、そんなことが何であろう。

まっ白な太腿が私の頭上に聳えている。彼女は私を軽蔑しきっていたから、よく自分の恋人のことを話してくれた。

「まだ十八なんだけど脊が高くって、とってもハンサムさ。あたし好きな男には幾らだって金使うんだから。こないだなんか一晩で一万円を使っちゃった」

私は、わざと口をはさむ。

「僕のことは好きじゃないの？」

「ウフフ、誰があんたなんか……痩せちゃって幽霊みたい。自惚れるんじゃないよ。あたしは、あんたみたいなタイプ嫌いなんだ。脊の高い男でなきゃ好きにならないよ」

機嫌が悪いときは、やたらに怒った。

「何するんだよ。やめろってば！ 馬鹿、馬鹿野郎！」

彼女は美しい眼をつりあげて怒鳴る。私は頭を畳にすりつけて平伏するのだった。

「勘忍、勘忍して下さい」

「ホラ、こうしてやる！」

私は仰向けになった。彼女は荒々しく私の髪をつかむと、布団のまんなかき引きする。そして私の顔の上へ、べったりと足の裏を押しつける。ふっくらと肉づきのよい真白い足の指が私の鼻から目の上にかぶさってくる。私は彼女の足の裏を舐めまわす。彼女の逞ましい太腿は私の頭の上にそびえている。そんな私の哀れな姿を彼

女はキラキラ光る横眼で見おろしていた。

「頼むからにらんで……僕をにらみつけて！」

彼女は大きな眼でグッと上から見すえた。

赤線が廃止された後、偶然、彼女に会ったことがある。相変らず彼女は美しかった。行きつけのバーで酒を飲んだ。何回か盃を重ねたとき彼女は私の髪をつかんで床に引きすえた。ひらかれた膝小僧奥に白いパンティが見えた。

次にそのバーの行ったとき、マダムに恋人なのかと訊ねられた。ある意味で彼女は私の恋人であった。私に青春の夢を与え、一生の思い出を与えてくれたという意味で……彼女は島崎M子という。もしもお心当りがあつたら是非ともその後の消息を報せて頂きたいと思う。

10 ロリータ・ユキへの手紙

どうかお許し下さい。私は貧相な中年男ではありますが、通りいっぺんのファンではなく、あなたの発達した肉体と雄々しくも攻撃的なお性格に、身も心もトロトロに魅惑され征服され這いつくばって、おすがり申しあげる者でございます。

今日もあなたの野性的なストリップを拝見し、その思い出にふけりながら手紙をしたためております。

ああ……バラ色の白人のような脚、見おろすような凜然たるお表情を思い浮かべますたびに、会社においても電車の中でも昂奮を抑えることが出来ません。そして実話雑誌から切抜いたあなたの写真に接吻しながら夜ごと恥しい行為にふけてしまうのでございます。

一生のお願いです、憐れと思し召して私と結婚なさって下さい！

あなたは多分、ハンサムで若くって背が高くってお金持の男性と結婚したいと思っていらっしゃることでしょう。勿論、私はその条件のどれにも当てはまりません。でもそういう男性と私とどちらがあなたに思いこがれているかと云えば、それは私に決まっているのでございます。

私は、およそ女のひとに好かれたためしのない男でございます。でも大学まで出ておりますし真面目この上ない人間なのです。結婚と申しまして、絶対に世間普通の亭主になろうなどとは思いません。お命令に絶対服従する覚悟は出来ております。

恋人をおつくりになろうと何をなさろうと一切、苦情は申しません。万一そんな素振りでも見せましたなら、撲ろうが蹴ろうが踏んづけようが思うがままにお仕置きして事の道理を思いださせて下さったらよろしいのです。料理とか洗濯とかも一切なさる必要はありません。あなたの汚れものでしたらパンティだろうと長靴下だろうと大喜びで洗わして頂きます。想像しただけでも私は天にも昇る心地がいたします。

どうかお情けと思って、この夢のような生活をお授け下さい。あなたの胸三寸で一人の中年男を魂の底から幸福にして下さることが出来るのです。人生は短いものです。好きな男性と一緒にいるのも嫌いな男をいじめて暮すのもたいして変わらないではありませんか。お願いです！　どうか色よい返事をお聞かせ下さい。

哀れな中年男より

ロリータ・ユキ様へ

11 少年少女に跪く

「おじさん、遊ばない？」

呼びとめられた途端、胸がドキッとした。大柄な不良少女……そんな感じだったのだ。たしかに私より頭一つだけ高かったろう。ブルー・ジンの長い脚をスックとひらき真ッ赤なカーディガンをひっかけて見おろしていた。若い肉がコリコリ附いて盛りあがったヒップの下に短いパンティの線がありありと透けて見えた。この体重でギューッと踏みつけられたら……私の貧弱な四肢を踏み敷いている少女の雄姿が眼に浮かんだ。

「君、幾つだい？」

「十六よ、おじさんマゾッ気があるでしよ？」

少女はそう云うと、いきなり手をのばして私の二の腕をつねりあげた。私は驚きと悦びに身を震わしながらうなずいた。

「君みたいに若くって大きな娘さんにいじめられたかったんだ、夢にまで見たんだ」

「ウフフ、音あげるまで責めてやるから」

私は熱くなつて少女のパンティの線をジン・パンツの上から視線を走らせた。

「金よこしなよ」

ホテルに着くと少女は、すぐに催促した。私は財布から千円札で五枚渡した。少女はマニキュアした鋭い爪でひったくると

「ユーもっと持ってんだろ？　あと二、三枚よこしなよ」

私は呆氣にとられて見上げた。少女のバラ色の唇の間から透き通るような歯列がこぼれた。そして一発、私の頬に平手打ちをくれるとじつと私の眼を見つめて

「たっぷり責めあげてやるからさア」

この殺し文句を浴びせられてはマゾ男は一たまりもない。私は昂奮に震える手で三枚の紙幣を渡してしまった。少女は私の眼の前でスラックスをずりおろして見せた。飽くまでも遅ましい太腿、若々しい筋肉の緊張……私は夢中でその脚にかじりついた。

「何すんだよオ」

少女は槍のような膝小僧で私の頸を蹴つとばした。情けないことに少女とは体格が格段の違いだし若さが違うから、亀の子のように仰向けにひっくり返ってしまった。少女は、さもおかしそうに身体を揺すって笑った。

「サシだってミーのが強いね。ゴロまいたことなんかないんだろ」

「……ゴロまくって？」

「喧嘩だよ。おッ殺し合いのゴロまく勇氣あるのかよ」

「とってもないよ、そんなどえらい勇氣は」

そう云い乍ら私は性こりもなく少女の脚下に這い寄って行った。

不良少女と意気地なしの中年男という設定に胸を躍らせながら。

「君は……君は、そんなことするのかい」

「スケはゴロまかないよ。何も知らないんだね」

「そうなんだ、馬鹿なんだよ。知ってるのは……君みたい若くって体格のいい娘さんにいじめて貰いたいってことばかりさ」

「ユー、最低だよ」

「いいねえ、君の脚……近頃の若い女の子の身体は凄く発達しているから街歩いてても挑発されて仕方がないよ」

「ウフフ……昼間ッからスケに責められたいなんて考えてるのかい」

「そればかりさ。殊に外人の娘なんか見たらたまらないね。ああ

いう立派なお臀に敷かれたら、どんなにいいだろうなんてね。凄く昂奮しちゃうよ」

「外人のスケがユーみたいの相手をしてくれるわけがないよ。高嶺の花さ」

わざと馬鹿げたことを云って女に軽蔑される。この心理を理解出来ない者にマゾヒストの資格はない。少女は軽蔑しきったのか私の手が遅ましい脚をモソモソ這いずっても別に気にもとめない風だった。私は腿の白い肉に唇を押しつけた。

「気持ち悪いよ、芋虫みたい」

「いいじゃないか。君の太腿……まっ白くって脂がたっぷりあって外人の脚みたいだね。舐めさしておくれよ」

「じゃあ、もう一枚よこしなさいよ」

「搾りとるなァ……いいさ、君のように体格のいい女の子はいくらだって搾りとる権利があるんだ」

というわけで私はもう千円だして腿を舐める許しを得た。たしかに少女の身体は素晴らしいものだった。あらゆる部分がマゾ男の渴仰する女神にふさわしい暴慢さをたたえているようだった。少女はおそろしく短い白のパンティをはいていた。私の舌はその縁をまさぐった。

「パンティ汚れちゃうよ、ユーの舌なんかで舐められたら」

「私の舌より君の下着の方が尊いわけだね」

「当りまえさ」

少女は可愛らしく威張ってみせると、もう一発、私の頬に平手打ちをくれた。私は一つの計画を思いついた。そこでデパートの包紙にはいった買物をだしてみせた。

「パンティじゃないの」

「七色パンティさ。女房にはかせようと思ってね」

「ユーのスケじゃ、よっぽど不細工だろうね」

「そうさ、君とくらべたら問題にならないよ」

「女房にも責めさせるのかい」

「うん、まアね」

「どんなことするのさ、云ってみなさいよ」

「このパンティはかして責めさせようと思ったんだがね。君がはいた方がずっと似合うだろうな」

「そうさ、くれちゃいなよ」

「うん……いまはいてるのを脱いで見せてくれたら、あげてもいい」

「ウフフ、ミーがパンティ脱ぐところが見たいんだろ」

「うん」

「よし、拝ましてやる！」

少女がパンティに手をかけた途端に、ドアをノックする音が聞えた。咄嗟に私は警官だと思った。慌てふためいている隙に少女がドアを開けた。すると、はいつて来たのは肩から皮ジャンパーを引っかけた少年であった。



「おっさん、俺のオンナをよくも可愛がってくれたなア」

「君は、君は……失礼じゃないですか」

「何だとオ」

少年の鉄拳が私の頬に炸裂し、私は床に頭を打ちつけてころがった。少女は恰好のいい唇に気持よさそうな笑いを浮かべて見おろしていた。それを見た途端、私はいまの状況がいかにマゾ好みだということに気がついた。少年がスリリとして少女と同じように美貌の持主だったことがマゾ本能に油を注いだ。私は若い二人の尾もとに両手をついて這いつくばった。

「勘忍、勘忍して下さい。どうか生命ばかりはオタオタ……どうかお情けを、お慈悲を……」

そう云って私は右手に少年の靴を、左手に少女のハイヒールをかかえこんで接吻した。少年は、さも軽蔑したように切れ長の眼で眺めていたが緊張を解いた様子で云った。

「じゃ自分が悪かったって認めるのか、悪かったから何されたって構まわんって云うのか」

「私はあなた方の父親位の年頃です。不細工ながら女房もいるのでどうか生命ばかりはオタオタ……」

私は、みじめに許しを乞いながら、ひそかな快感にふけっていた。

少年少女は小声で何か相談していた。ときどき二人の押殺したような笑聲が頭の上から聞えて来た。

「ヤロコマシなんて男が見るもんじゃないよ」

「いいじゃないか、話に聞くだけじゃつまらねえよ」

「この男、凄いやマゾらしいもの、嬉しいがっちゃうわよ」

「嬉しいがらして搾ろうや」

「それもそうね、じゃ見てなよ」

少女は爪先で私の額を小突いた。

「覚悟おし、一晩がかりで責めあげてやるから」

私は慌てた。明日は会社があるし少女と遊んでも今夜は帰るつもりだったのだ。

「それはその……」

「ユーのお望み通り責めてやるって云うんじゃないか、文句があるのかよ、この助平じい」

少女は、さも憎々しげに私の頭を蹴つとばした。行く処まで行くより仕方がないのだ。私はマゾの宿命を観念した。

「私の考えが足りませんでした、申しわけございません。ヒラニヒ

ラニ」

「よし、持ってる金、全部およこし」

「全部？」

「骨がミシミシ云うまで虐待してやるからさ。責めて貰いたいんだろ？ 体格のいいスケにさァ」

少女はそう云いながら私の瘡めた頸筋にまたがって強い太腿でグイグイはさみつけた。私はもう夢中になって財布ごと少女に渡してしまった。

「今夜のこと、サツにしゃべったら承知しないよ」

「はい」

「嘘ついたらぶっ殺してやるから！」

「はい」

「判ったらパンティーぬがさしてやる」

少女は真ッ赤なカーディガンをひっかけただけの姿で立ちはだかっていた。そして荒々しく私の髪をつかむと真正面からベツと唾をはきかけた。私は必死の力で少女の両脚にすがりついた。

「夢のようです、あなた方みたいに若くて体格のいい恋人に虐待されるなんて……どうか私を捨てないで！ これからも私を道具にして愉しんで下さい、あなた方の便器にだってなります！」

少年が耳をつかんで私の顔を覗きこんだ。

「これから毎月、貢ぐんだぞ」

「はい」

「いくら貰ってる？ 全部よこすか」

「全部？ 半分では……」

「全部よこしたらいいじゃないの、噂アなんて捨てちまいなよ、汚

い嘛アなんてさア」

少女はそう云って太腿を私の肩に乗せ前から頬をしめつけた。

「案外ウブだね。マゾのやり方、教えてやろうか」

「はい」

「よし、仕込んでやる！」

少女のハイヒールが私の胸を蹴った。私が仰向けにころがると、顔の上にデンとまたがり、上から私の眼をのぞきこんだ。

少女はニヤリと笑ったかと思うと巨大な臀と強靱な太腿でグイグイと私の顔を締めあげた。眼の前がまっ暗になり、鼻がひん曲げられ窒息しそうになって……やがて少女はゆっくりと立ちあがった。

私は疲れ果て、見上げる元氣もなかった。

「マゾはミームみたいなスケにからつきし弱いのか。判った？」

「はい」

「奴隷の洗礼、受けたことある？」

「いいえ」

「受けさせてやるから口をお開き」

若い二人の笑声が遠くに聞え、私はいつとはなく意識を失って行った……。

12 ピーチェス・ブラウンの印象

「谷崎潤一郎の原案、丸尾長頭の構成演出による『白日夢』二部作。豪州から来日した十九才のヌードのピーチェス・ブラウンも特別出演する。……白狐の精（ピーチェス・ブラウン）の湯上り姿に夢中になった角太郎（多賀満）がキツネに化かされて殺される」

——東京新聞の記事より

私が感激しながら見上げていた。眼もさめるばかりの金髪娘ピーチェス・ブラウン……実際、白人女性というものは、どうしてこうも美しいものであろう。深遠な緑をたたえた眼、彫りの深い理智的な顔、横幅のある豊かな腰……同じ人間だというのに、どうしてこうも美しいものかと、つくづく感じ入って眺めていた。

ピーチェス・ブラウンは音楽に合わせて激しく腰を揺すりながら私の見上げている方へ近附いて来た。そうして、ああ……ピーチェス・ブラウンは碧い眼でジッと私を見おろしたのだ。ほんの一瞬間だったろうが、私は年甲斐もなく真ッ赤になってしまった。誰だって白人の女にまともにみつめられたらドキマギするに決まっている。

次の瞬間、ピーチェス・ブラウンは私の頭の真上で重量感のある脚をサツと振りあげた。はりきった肉のなかに食いこんだほそいほそいパンティーの縫い目が有無を云わさず眼のなかにとびこんで来た。そしてうしろを向いてパツとフレヤアのスカートを上げたので私の鼻先に一陣の甘い風が吹きつけ、白い太腿の裏側がはっきりと見えた。

私はもうボーッとしてしまっていた。日頃崇敬する白人女性が私に太腿を、そしてパンティーの奥ふかくまで拝ませてくれたのだ。これが感激しないでいられようか。

13 金髪娘の暴行

日本語を勉強しはじめた基地のうら若い金髪娘たちは緑美しい芝生の上、今日も雑談に打興じていた。そのうちに一際目立って大柄なショート・パンツも凛々しい娘が云いだした。「こないだタニザキの『痴人の愛』読んだわ。ジャップの書く小説にしちゃ気がきい

てるわね」

「ジャップなんて、みんなあんなこと考えてるのかしら」

「ナオミが混血児みたいだって何度も云ってるでしょ？ あれ白人崇拝よ、きつと」

「ニグロと同じね」

「あたしたちに弱いだよ。からかってやると面白い」

「いや！ ジャップなんて、さわるのも気持が悪いわ」

「ジャップってよっぽど変態に出来てるのね」

「でも一匹位奴隷にしたいと思わない？」

「だって……しよっ中、変な眼で見つめられてたら、のんびり出来やしない」

「相手を人間と思うからよ。モンキイと思えばいいんだわ。奴等だってそれが望みなんだもの」

「じゃ、あなた裸でジャップの前にいられる？」

「いられるわよ、見るなって命令しとけばいい。きつとヒイヒイ云って苦しむわ」

「でも見られちゃうかも知れない」

「見たら鞭でひっぱたいてやる！」

「あたし、眼の玉えぐりだしてやる！」

「虫けらみたいに踏み潰してやる！」

「ほんとに憎らしいわねえ、ジャップって」

「ねえ、うちの隣に大学生のジャップが一匹いるのよ。誘惑して痛めつけてやりましょうか」

「賛成！」

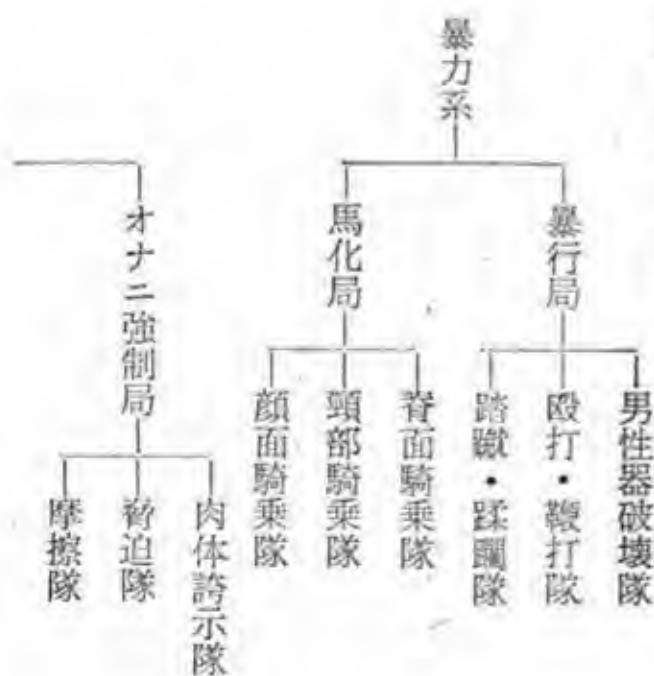
と云うわけで狙われた大学生は金髪娘の時ならぬ招きに天にも昇

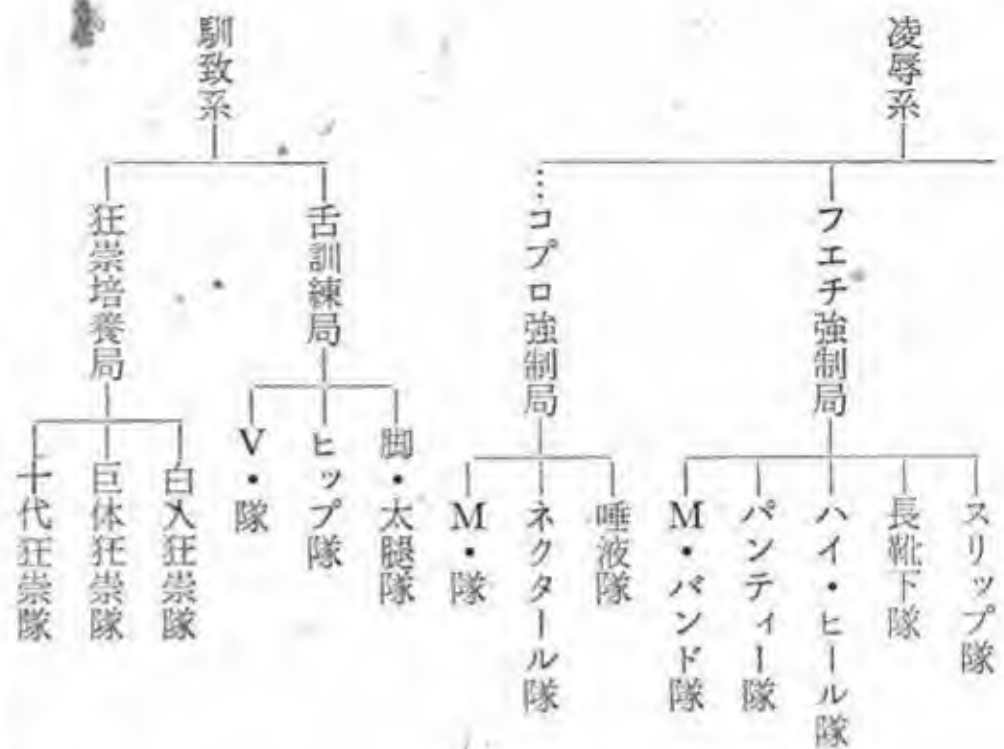
る心地。一張羅の制服を着、ポマードをコッテリつけて参上つかまつった。ところが彼を待ちかまえていたのは日本人の白人崇拝を骨の髄まで知りぬいたアマゾンたちだったのだ。

何が起ったか詳しく記す必要はない。翌日、大学生は身も心もズタズタに引裂かれて帰って来た。眼玉はえぐりとられ、片腕は肩の処から引きちぎれ、膝の骨は踏み砕かれ、猿股一枚で四つん這いになって帰って来た。驚いた両親にも口をつぐんだまま、自分の部屋に閉じこもって首をくくった。手には外国製の優美なパンティーを握りしめていたと云う。鑑定の結果パンティーからは女性の体液と、そして大学生のものらしい唾液が大量に検出された。

14 世界アマゾン軍団

一人で愉しめるマゾ遊戯を御紹介しよう。先ず世界アマゾン軍団の組織を考えるのだ。たとえば：





次に各々その長官を選びだす。たとえば私の場合……肉体誇示隊々長には「娼婦ローズ・マリー」の真相」でタイト・スカートを高々とまくりあげパンティーを見せつけて

「長い間、眺めさせてやると独身男はノビちゃうからね」

と嘲笑したベリンダ・リイを選ぶ。長靴下隊々長には「嘆きの天使」でワルト・ユルゲンスに逞ましい脚を突きつけ靴下をはきかえさせたマイ・ブリットを、十代狂崇隊々長には若冠十九才のジャクリーヌ・ササールを選ぶだろう。更に馬化局々長には「ローマの旗

の下」において雪白の太腿を露出して馬に打ちまたがりマゾ男の血を沸かせたアニタ・エクバークを。暴力系長官には「河の女」において小男を愚弄しながらマンボを踊り、最後に鎌を振りあげてこの男を脅迫した五尺八寸、十八貫のソフィア・ローレンを選ぶ。

最後にアマゾン軍団に日本支部があるとして日本女性の中から長官を選びだすのだ。さしあたり白人狂崇隊々長は混血のヘレン・ヒギンスか入江美樹、馬化局々長は「痴人の愛」の叶順子などに落着く。マゾヒストは趣味性が強いから各自お気に入り構成を考え、それに憧れの女神を配置して行けば一晩はたっぷり愉しめるというものの。

15 混血児が支配する

中東諸国やフィリピンでは上流階級の人々は大抵、美しく高貴な容姿をしている。醜い土着民とは似ても似つかないように見える。それもその筈で彼等は白人との混血なのだ。これらの諸国では混血児が国を支配する。うら若い混血娘の意識は……

「あたしは土人じゃないんだ。国籍こそこんな賤しい土人国の娘だけれど、あたしの身体も魂も白人のものなんだ。だからあたしは白人の青年と遊んでやる。汚い土着民になんか唾もひっかけてやらない。だって土人は、あたしとは人種が違うんだもの。いくら意地わるしたって構わないんだわ」

土着民青年の意識は……

「ああ、お嬢さんはなんて美しく成長されたのだろう。あの青い突刺すような眼！あの眼で見られると魂がトロけるようだ。一度でいいから、あのバラ色の腿ッたに接吻させて貰いたいものだ。でも俺

新浣腸写真

紙画印
子啓
大塚 啓子

イルリガートルの

嘴管による浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちい」)

黒蛇のようにウネウネとうねってゴムの管は恐怖の浣腸液を運んでくる。嘴管がマニヤの心をひきつけるように目の前で光っている。

エネマシリンジの

嘴管による浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちえ」)

ゴム球を握るたびに一端から浣腸液は絶え間なく送り続けられる。啓子嬢の手の中にあるエネマは妖しい曲線を見せてマニヤの心をゆさぶる。

硝子製三〇〇C

シリンドラによる浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちか」)

白い硝子冷たい感触は乙女の手の中でおい光を放って浣腸液を吸い上げ、シリンドラの中からフツフツと白い液が玉になってこぼれ出る。

禪美と禪縛り

大手札型印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 桜井 葉子

略号「ふし」

豊満な全裸の若き女性が六尺禪をあられもなく着している正面と背面の写真に禪を着けながら縛られている写真を配して一組としたもので特に禪美マニヤの要望に応えた提供品——。

達下層民だから接吻さして貰えないだろう。今度、生まれ変わって来るときは、俺もお嬢さんと同じ血の人間に生まれて来たいものだ」

支配階級と被支配階級が人種的に区別されると、そのときこそ下層民は魂の底から絶対従順になり、階級制度は確固たる基盤を持つ。この点については本国人階級、混血児、日本土着民の三階級に分けて日本の未来を描かれた沼正三氏のユニークな文章がある。パンパンの腹から産まれた混血児の前に跪拝するという光景は、いかにもマゾヒスティックではないか。遠からず芸能界にはそういう時代が到来するに違いない。

過日、愉快な経験をした。混血のハイ・ティーン入江美樹のマゾ的な写真が「若い女性」三月号に出ているという本誌のエッセイを読み、古本屋を捜しまわったときのことである。やっと中野駅南口の本屋で一冊みつけたが、そんな写真は見当たらない。エッセイによれば

それはグラビヤ頁にあり「斜め横向きで両足を開き鋭くこちらを見つめているポーズ」、そしてその裏の頁には「片足先を少し上げ……この足の裏をお舐めと命令されているような感じを受ける」写真がある筈なのだ。何度も引っくり返して眺めているうちにグラビヤの最初の方が一、二枚破られていることに気がついた。それでも猶半信半疑で西荻窪にまで足をのばした。そして、めあての写真にありついた。前後の頁を調べると中野で見た雑誌は、まさしく入江美樹の写真だけを破ったものだということが判った。エッセイの筆者が売り払った雑誌かも知れない。しかし、そうでないとするれば……日本のマゾ男にとって、この十六才の混血少女はなんと貴重な存在であることか！ テレビ番組「魅惑の宵」を私は必ず見ることにしている。

(挿画 杉原虹児)

或る空軍将校の獄中記より

黒色こくの栄光えいこう

香 椎 隆 彦

F—国 ジエイ・ロドルス少佐の手記
左に掲げるものは獄中に於て記された

ミューラー空港基地

一九××年四月、おれが本国の首都ハルゲン空港を、長距離攻撃機をみずから操縦して、単機ミューラー空港基地を目ざして飛び立ったのは、建国祭前夜だ。おれは当時、西部戦線で空中戦闘中、左翼に直撃弾をくらって機体は炎上したが、奇蹟的に命だけは拾って、本国に送還され、負傷の癒えた後は、そのまま本国の参謀本部第三課に配属されていた空

軍大尉だ。おれのニックネームは「禿鷹」と呼ばれていたが、これは、敵機三十八機を撃墜して大統領から直々に功績十字章を授けられた時、新聞が名付けたものだ。

総司令部参謀本部第三課ジエイ・ロドルス大尉は、直ちにミューラー空港基地占領軍司令部に着任すべし。

任務。ミューラー基地駐在Y・V作戦要員の士気昂揚につき、立案、実施、監督の

こと。
資格。Y・V作戦本部参謀として、少佐の資格を与えられる。

ミューラー空港基地に飛び立ったおれの飛行服の胸ポケットには、こういう指令書が収められていた。この指令は、ばかに唐突なもので、禿鷹と呼ばれるおれの任務としては、あまりばつとしたものではなかった。前日、参謀本部の課長中佐に呼ばれたおれは、ミニ

挿 画 (四 馬 孝)

ーラー空港基地駐屯Y・V作戦部隊の現状について意見を求められた。

おれは最近、特に、功績十字章受賞者として、管区司令総官の視察に随行して、ミューラー基地を訪れていたから、その概要は承知していた。

ミューラー空港基地は、ヨーロッパの中部にある空港で、戦略的に、全欧州を翼下におさめうる極めて重要な軍事基地であった。そこに、占領軍航空総司令部があることだけでも、空港の規模の大きさは知れるが、所属爆撃機五百余機、所属戦闘機七百余機、各種攻撃機輸送機百八十機という大編隊は、ここに一大要塞を形成していた。

「基地の警戒が殊に厳重を極めているのは、そこにY・V誘導弾作戦基地が設置されたからだ、ということとは知っているだろうな」

課長中佐は、肥満した首筋を、だるそうに左右に動かしながらいった。

「存じております」

おれは、うなずいた。

広大な空港基地は、実に百米間隔で五重の鉄条バリケードに囲まれていた。バリケードの周囲は、常時二十余台の哨戒車が、厳重に巡視していた。さらに、空港の周辺二キロメ

ーター以内の人家は、強制的に立ちのかさされて、それ以内に民間人の立ち入ることは、厳重に禁じられていた。厳重というのは、何人といえども無断侵入者はこれを射殺してもいいことになっていた。これはまるで陸にある離れ孤島のようなものだ。とおれは思ったものだ。

「Y・V作戦は、今後の我々の作戦展開に最も重要なポイントとなるものだが、参謀本部に報告されたところによれば、最近このY・V作戦要員の士気の乱れが顕著なのだ」

「作戦要員は、精鋭な選抜隊員で編成されていたのです」

「そうだ。その兵士達が士気を乱しているという報告は、実に遺憾なことなのだが、事実なのだ」

課長中佐は、おれに机上のメモを渡した。

最近一カ月間に発生した事故件数八件

死者 七名

重傷 十三名

軽傷 三四名

「これは？」とおれは訪ねた。

「大部分が、隊員相互間の暴行事件によるものなのだ」

「原因は、精神のたるみですな、要するに」
「彼等は、秘密維持と特別訓練のために、すでに長期に亘って、休暇も外出も許されていないのだ。原因は、それだよ。家族との面会も、通信も禁止されている。勿論、ミューラー基地内には、主要な娯楽設備はないのだ」
「女がない、ということですか」

課長中佐はうなずいた。

「しかし、特別作戦区域に、主要な娯楽設備を設置——つまり君のいう女をいれることは不適當だ。敵国の女は危険を犯しやすいのである」

「作戦は、まだ長期に亘るわけですね」とおれは念を押した。

「無論、そうだ」

「休暇外出を与えることができないとする」と、結論は、簡単ですな。それにもかかわらず女は必要なわけです。娯楽機間を秘密作戦と矛盾することなく設置するのに、さほどの困難はありますまい」

「そうか」

と課長中佐はいったが、それは、おれがそういうのを待ちかまえていたような顔つきだった。

それから、おれがその任務をひきうけるま



でにいたった。我ながら、ばかばかしい。ペテンにのったような経過は省略する。管区司令が指令し、課長中佐が直接指令書を発行し、少佐の資格が与えられるということは、ミューラー基地におけるおれの権限が、かなり幅

の広いものであることを暗示している。それに、ミューラー基地にいけば、おれは、ときには最前線に飛び立つこともできるだろうし、そいつは、本国の首都でうだうだしているよりましなことだ。もって冥すべきだろう、とおれは自分にいいきかせたのだ。

ハルゲン空港を飛び立ったおれの攻撃機はやがて占領地帯の上空にはいった。しかし制

空権も完全に我が方に帰した夜空は、快適な単独飛行を妨げるなものもない。おれは秘密維持と矛盾なく慰安設備を設置することと士氣昂揚にふさわしい女のあてがい方を考えるをまとめると、夜空の中の単独飛行の快感にふけた。

眼下の大地は、闇に埋っていた。この国を我々は僅か二カ月で、

完全に制圧したのだ。我々の軍隊は、陸海空ともに、勇敢で熱烈な行動力と大胆な電撃的作戦力で、敵国に恐れられていた。しかも、我々は、優れた血と世界を制覇すべき運命とを所有する誇り高き民族だ。そしていま眼下の闇に埋もれた村々と町々と人間は、我々の捕えた獲物であった。我々は誇り高き民族として、現実には、彼等を支配し服従させ、奉仕させる権制を、掌中に収めていたのだ。

奴隷館設営

おれがミューラー空港基地に到着したのは明け方であった。おれは到着すると直ちに、出迎えのY・V作戦隊長マスレイ大尉とともに、ジープで空港内を一巡した。航空司令部は広大な基地の南端にあり、Y・V作戦本隊は、北端に位置を占めていた。おれの眼は、Y・V兵舎に最も近接した小型格納庫にとまった。

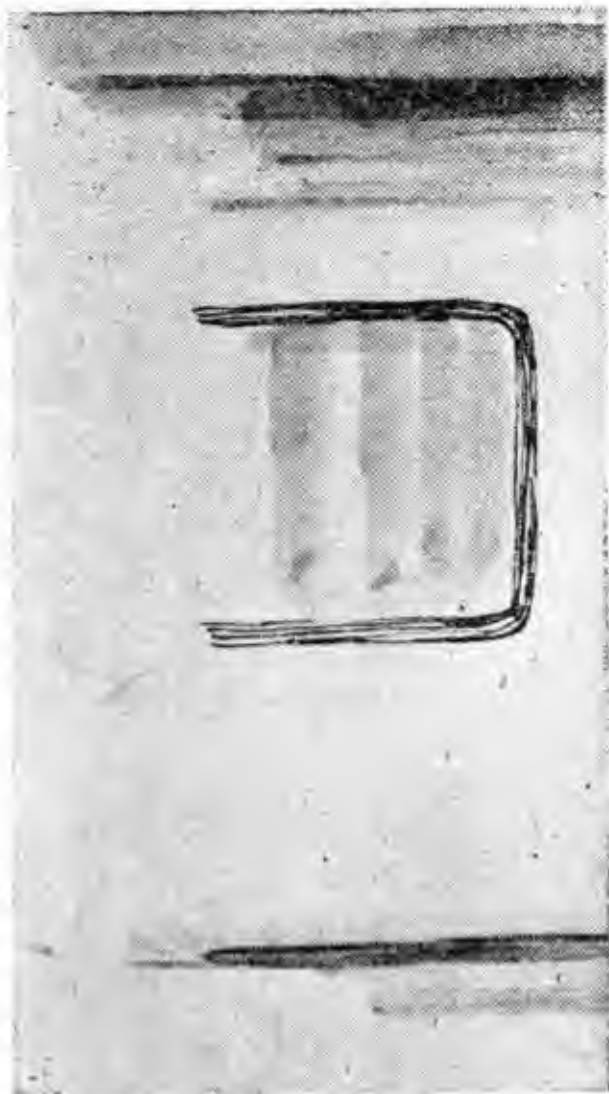
「あれは現在、使用中かね」

「第十三号庫ですか？ 空庫です」

と若い士官学校出の将校は答えた。

「それはいい」と、おれはうなづいた「それは丁度いい」

おれは、それからY・V兵舎の将校クラブ



に入って、マスレイ隊長におれの計劃を説明し、企劃班員として、若干の下士官を含む兵を三十名要求し、少尉を二名、班長としておれに配属させるよう要求した。

機上では一睡もとらなかったが、おれは、新しい前線の空気を吸って、心身ともに爽快であった。マスレイ隊長と打ち合せをすませたおれは、司令部にいて、航空司令官に着任の挨拶をし、計劃を説明して、受領すべき品目を要請した。

「格納庫を？」

おれが、受領したいものとして小格納庫を口にのせたとき、戦車のように肩幅のがっちりとした勇敢な前線指揮官として定評のある司令官は、驚いた表情をみせた。

「お取り計らい願いたいのです。第13号庫を改造して用いたく考えます」

「いいだろう」

彼はちよつと考えたが、すぐフランクな態度で許可した。

「よろしい。しかし凡て慎重に行いたまえ。」

それから貴官の居宅は、将校クラブに予定しておいたが、その点、希望はあるかね」

「御配慮を感謝します」

と、おれは司令官の明快な態度に、好感をもつて答えた。

おれは朝食をとった後、推薦されてきた企劃班員を巨大な空洞のような格納庫に集合させた。

「おれの計劃は、この格納庫を精神鍛練の大ホールに組み立て直すことだ。七百名のY・V特別作戦隊員に不自由を与えぬだけの酒も女も踊りも歌も、なにもかも、この建物に収容する」

おれがそういったとき、兵士達は、にわかにはざわめいた。おれは彼等の息が、どっと吐

き出され、彼等の眼が、きらきらと熱っぽく光るのを見た。

「ありつける！」という声があがった。

「女がくるのだ！」

「女がくるのではない。我々は獵人となって、占領国の女どもを捕えてくるのだ」

喚声と嘆声が湧き起った。それは咽頭からではなく、じかに屈強な若者達の肉体から響きだしてくる声だ。

「しかし承知しておいて貰いたい。おれはお前達に、ただ酒や女を与え、だらだらした女遊びをさせるためにきたのではない。快楽は、苛烈な戦闘の合間の憩いだけではなく、快楽のうちにも、さらに烈しい闘争心、荒々しい血の息吹きをかきたてるものでなければならぬ」

おれの神経に、兵士達の鼓動が、ひたひたと伝ってきた。おれは、具体的な計劃を説明していった。

選抜された企劃班員を、少尉を長とするA班二班に分ける。

A班は、格納庫の改造を担当する。この改築工事には、Y・V隊員全員が参加するが、作業は二週間で、完成しなければならぬ。完成した建物は「奴隷館」と名付ける。内部に

は、一般的な小休息室だけでなく、小劇場、酒場、室内競技場を設置する。

B班は、女狩りに従事する。これは殊に沈着と敏速を要する作業だ。商売女をかき集めるのとは訳が違う。美しい素人の女達を、ひそかに誘拐してくるのだ。Y・V隊員は、選ばれた者だ。選ばれた優秀な者には、選ばれた女が与えられねばならぬ。また、誘拐を表立ったものにして、政治的な紛争の種となることは避けねばならぬし、女達にいたずらに警戒心を与えては、今後の女狩りを困難にする。一人や二人の女を狩り集めてくるのではない。

おれは午後の時間をA・B各班別の打ち合せに過ぎた。夕食は司令官とともにした。将校クラブの自室に入ったのは、夜が更けてからだ。おれは酒瓶を傾け、西部戦線の空を舞った日を夢みた。おれは続いて、撃墜王「禿鷹」に注がれた栄光をたたえるこの基地の若い兵士達の眼差しを想起してにがく笑った。おれは栄光を望むのではない。おれはその眩しきとともに不意に虚無の深淵を心の中にみた。

狩り集められた女達

「進行状態は予定より早いな」
「いやあ、さかりのつききった連中が、眼の色を変えてスピードアップしているのですからね」

マスレイ大尉は、士官学校出らしくない言葉使いをした。とはいっても、マスレイ大尉自身の眼もぎらついて昂奮気味だ。改築工事は、小劇場と酒場にとりかかっていた。最も肝要な小休息室は早くも完成した。

おれは工事現場を離れると、女達を収容した檻へまわった。

奴隷館の改築工事中に、すでに、各地で捕獲された女達が到着しはじめていた。それらを収容するために、格納庫の備品室を最先に収容室に改装して、次々と送りこまれてくる女達を放り込んでおいたのだ。

時は春だが、収容室は、寒風が肌をさす冬のように殺風景だ。床は素板のまま、窓には鉄格子をはめ、壁板も剥きだしのままで、カーテン一枚ない。明りは裸電燈をぶらさげ、天井まで二重に刺のある鉄条をびっしりと張りつめた。収容室の出入口には鉄柵をはめて大型鉄錠で閉じた。時計もテーブルも椅子もベッドもない。バケツと水ガメがあって洗面用だ。便器もバケツだ。俘囚の女達に生活の

うるおいを与える必要はない。女達は、冷めたい床板の上に、一枚の毛布にくるまって寝る。枕は与えない。食事は床で、アルミの食器を使用する。女達は、完全に脱走を拒絶された殺風景な檻の中で、俘囚の身の上を、否応なく、ひしひしと味わっている。

亜麻色の髪をうなだれた肩に垂してうずくまる若い女。

小さな物音にも、おどおどと眼をおびえさせる黒髪の人妻。

窓の外の自由な平野をみつめて必死に気をまぎらす女優。

泣きじゃくって慰められている小娘のような金髪の女。

頭をあげて我慢強く、なにごとかに堪えている気の強い赤毛の女。

捕獲された女達は二人四人十人と日毎に増えていった。おれの目標は、当面七十名から百名だ。女狩りも順調に作業を進めていた。

俘囚の女達に生きた心地を与えないのは、改築作業の休憩時間だ。

若い勇み立った兵士達は、休憩時間になると、白い獲物に集まる鷲のように、わっと女の檻の周囲に押し寄せて、久しく触れたことのない女という生き物を、押しあいへしあい

して、ぎらぎらと射すような眼つきで眺めまわした。女達は檻の奥に一塊りになっておびえた背を向けたが、そんなことは、飢えた獵人の眼にはなんの役にも立ちはない。舌なめずりする兵士達の視線は、女達の一人ひとり裸に剥き、鼻は女の匂いを深々と吸い込み、唇は露骨な品さだめの言葉を吐き出した。

いくらか気の強い女がいて、收容された当座に、男達を憎悪に満ちた眼で睨みかえしたが、あつというまに、無数の男達の凄じい眼差しと、生臭い息の礫を浴びて、屈服してしまった。獣のような男達の集中攻撃を敢然とはね返すなどとは、灼熱地獄で、熱風を浴びるようなものだ。逆に兵士達は、咽頭の渴きを癒せることの近いのを知って、勇気を鼓舞されて工事をスピードアップさせる。

おれが女達の檻の近くにいったとき、不意に格納庫の外で犬の吠え声があった。足をそちらに向けると、トラックが軍用犬を十頭、下したところだ。女の監視用に求めた犬だ。

続いて手錠をはめられた新着の女が、珠数つなぎになって、トラックを下りてきた。六人の新入荷品だ。

「連れてこい」

と、おれは女を搬入してきた兵士にいった。

「点検してやる」

「少佐殿の部屋にでありますか？」

「そうだ、シャワーを浴びさせてからだ」

「シャワーを？」

「小型消火ホースで水をぶっかけてやれ」

おれは自室のオフィスの引き返して、到着したばかりの俘囚の女達に着用させる制服の見本をひろげた。透き通るハーフシユミーズだ。いいだろう、とおれは思った。二十ダースの発注書にサインして、ことのついでに、二、三の事務をとり、電話をかけた。

女達は、その間に裸のまま、オフィスに入ってきた。シャワーを浴びて濡れた裸のまま。素肌に水滴がきらきら光って、びしょ濡れの髪から微妙な体の曲線を伝って、雫がしったり落ちていく。蒼ざめて、唇を恐怖と冷気にわななかせた濡れ鼠の女達は、おそろしくなまなましい。前手錠の指先からも、水がしたたって光った。

「珠数つなぎにした捕虜はとれ」

と、おれは電話をかけながら、手まねで監督兵に指示した。

縄をはずされると、それでも女達はいくら自由な心地になるのか、一様にむっちりした裸の胸をほっとあえがせて、とりとめなく

体のあちこちを動かした。

電話をかけ終えたおれは、女達の方をふり向くと、六人を床に座らせ、椅子ごと後へそらすようにして女達を見据えた。

「お前達は、特別に選り出されて、我々のところに来た。我々は占領軍として、また優秀民族として、お前達に誠実な服従と奉仕を要求する。一切の独断、反抗、不従順は許さない。我々は、お前達が敗戦国民であり劣弱人種である事実も十分わきまえて慎重に行うよう望む。あらゆる刑罰は用意してある。我々はお前達を遇するのに、言葉を多く用いようとは思わぬ。凡ては肉体を通じて味わってもらおうと決意している」

女達は、一人の女を除いては、どいつもこいつも身を縮めるようにして、蒼ざめてうなだれた。黒色の艶やかな髪の子だけが、一人ソッポをむいて、反抗の意志を示そうとしている。

「その女、前へ出る」

あくまでも反抗の意を示そうとするように女はおれの前へためらわずに出た。おれは立ちあがった。こういう女は見せしめのカモだ。

「不良め、ここでは、気位は不要だ！」

とたんに、おれの手は女の横面をびしりと



張っていた。女は左右によろけた。
「我々は軍人だ。我々は反逆を好まない」
往復ピンタをたて続けにくらわせてやると
女の白い体は揺れた。ととのった顔が蒼白に
なった。ピンタによろけた女がよく伸びた脚

に、ちよつと足をかけると、仰向けに臀餅を
ついて、ぶっ倒れた。体の肉が弾んだ。うま
そうな体だ。
「両手をつけ。這うのだ」
と、おれは怒鳴りつけた。

「ぼやぼやするな、お前達もだ！」
おれは、おびえきっているほかの女達
も、ついでに怒鳴りあげた。

びくっと濡れた女達の体が起きた。上
体が傾き、乳房がいつせいにびくんとお
辞儀をする。女達の背面の豊かな白い隆
起が、ずらっと並んだ。監督兵が口笛を
ひゅっとならした。おれは鞭を捌いた。
鮮烈な鞭音が、たからかに空気を裂いた。
手錠が床にすれて鳴った。

「動くな」

おれは女達に声を浴びせて、右端のブ
ロンドの女を立たせた。

「これを着てみる。お前達の制服だ」
おれは見本品の黒のハーフシュミーズ
を投げつけた。清楚な若い顔立ちの女だ。
睫毛が濡れていたが、まだシャワーのと
きの水滴が睫毛に残っていたわけではあ
るまい。

手錠をはずされた女は、腰までしかな
い透き通るハーフシュミーズを着けた。恥ら
いが女の臉をかげらせて肩が力なく落ちた。
白い肌を透ける黒が見事な対照だ。黒い幕を
おろした豊かな乳房ときゅっとかくびれた胴
が、悩ましい情感をかもしだした。

「一遍まわれ」

女は不器用にまわった。膝のあたりが、とめようもなく慄えていた。水々しい艶を帯びてすんなりと長く伸びた脚が、娘らしさを示して強くふっくりした流れを見せている。女はおれの凝視に、腰を斜めにひいた。

おれは捕獲名簿に眼を落して、女の名を調べた。シェリー・ゼム。未婚。二十才。女子大生。ウルフ大学教授の二女。

おれは女に近づいて、濡れた髪をつかんでひいた。女の顔は上をむいた。突き刺すような視線に吸い寄せられて、女はおれから眼をそらすようにもそらせない。

「シェリー・ゼム。ここでは大学で学んだことなど、なんの役にも立たないよ」

シェリー・ゼムは、口許で精一杯、微笑を浮かべようとしていたが、頬から臉には怖れと緊張がはりついて硬ばっていた。

「はい」

おれは女の髪をつかんだまま、女の均整のとれた体をぐいと引き寄せた。しなやかな体が弓なりになった。女は、なにかを拒むように頭をふった。接吻でもされろと思ったのか。

おれは女のしなった体の背後に空いている手をのばして、臀の頬を力一杯ひっぱたいて終

りにした。清楚なブロンドの女は、頬を染めた。

女の検査選別

奴隷館は三階建ての構成だ。多少、荒っぽい粗雑さはまぬがれないが、戦場の慰安設備としては是非もない。その代わり、女達は選りすぐられた一級品だ。

小休息室四十室、特別室、治療室完成。

事務室、教化調練室ができあがった。

小劇場、ホール附酒場が完成。

室内競技場、室内プール完成。

二週間後、奴隷館が完成したとき、捕獲された俘囚の女達は八十名に達した。

続々と到着する女達を一人一人、事務室に呼んで検査選別するのは、手間がかかって、面倒だ。おれは一挙に片付けようと思った。

「劇場にその準備をして女達を集めろ」と、おれは要領を指示して企劃班に命じた。

「女達は清潔に洗って、検査選別をしやすくしておけ。それから当日を開館祝いしよう」もっとも準備といっても、なにも特別な装置はいらないのだ。

当日、勇猛な我がY・V作戦隊員は、最少の保安要員を残して、劇場にやってきた。数

百名の兵士達は、奇妙なショウの開始を待ちかまえて、騒然と、勢いよく、男臭い息をふきあげていた。通路に坐り込んだり、鈴なりに立ち並んだ男達の沸きあがるような熱は、狭い劇場に火山の胎動を感じさせた。

一方、楽屋には香わしい女の匂いが、むっとするほどもっていた。それも道理で、そこには八十余人の女達が、検査選別のしやすいように裸に剥かれて、鞭を携行した監督兵と五頭の猛けだけしい軍用犬に見張られて押し込められていたのだ。

おれが劇場にいくと、兵士達は喚声をあげておれを迎え、俘囚の女達は、どいつも裸の体を不安と緊張と恐怖に、びくっと硬くした。

「オールライト。直ぐ始めよう」

おれは四人の補助員——軍医と訊問係と記録係と指導員の下士官だ——に声をかけた。

「女どもは全部揃えて番号をあたえてあるだろうな」

「二名、不従順な奴がおりましたので、ステージに見せしめの為に吊しておきました。他は全員異常ありません」

おれは、むせて咳をした。どうやら裸の女達の匂いにむせたらしい。

我々はステージにしつらえたデスクに着い

た。

「客席の照明を消せ。幕をあけろ」

幕が開くとステージに吊された白い女を見た兵士達は、一瞬、異様な沈黙をした。

「長く待たせた。開場祝いを兼ねて、我々は今から女どもの検査選別をする。諸君は、美人コンテストのつもりで観て貰いたい。登場する女どもは諸君に奉仕するために狩り集められたものどもだ。これは今夜から諸君のものだ。F：国の勝利を導く大統領の栄光を讃えよう」

「万歳！」

劇場が割れんばかりの拍手と喚声に沸いた。

ステージの袖で鋭い鞭音が鳴った。それが開始の合図で、ひっきりなしに鞭が炸裂し始めた。悲鳴がそいつに交響して裸の女達の登場だ。

「それ、行け！」

胸に一番の番号札をつけた女が監督兵の鞭に追いあげられてきた。剃き卵の女は、ステージの明るさと吊るされた白い二人の同僚と暗い客席の熱っぽいどよめきにひるんだ。

「くるんだ」

指導員の下士官が、身をすくめた女を、無

情に怒鳴りつけた。

二番の女が続いた。三番、四番と、次々に続いて出てきた。白い体のオンパレードだ。

「吊るされたいのか」

鞭がステージ一杯に鳴り響いた。女の臀にピンクの鞭痕が浮いた。女は臀をあわてて押えて、跳びあがるように医師の前に立った。

「口を開いて舌を見せろ。後を向いて脚を曲げろ。病気は？ ないな。よし次だ」

軍医は聴診器もあてなかった。検査済みの鞭が、女の腰をくねらせた。

「もう一チョウ、かましてやれ！」

客席から声が懸った。注文には応えてやらねばなるまい。女はまた臀を押えて前かがみに体を折った。

次のデスクが訊問係だ。

「名前と職業と年令をいえ」

「アヌーク・ペレント。二十才。アスナーヤ劇場のステージダンサーでした。」

「ダンサー？ 両手を上にあげて廻れ。脚をあげてみる」

女は腕をあげたまま、踊りにひきしまった形のよい右脚を振りあげ、左脚を次にあげた。屹り立った胸が揺れた。太い脚がぶるんと弾んだ。ふん、よくあがりやがる。と呟いた訊

問係の下士官が、おれをみた。

「劇場へ」

と、おれはその女を選別した。記録係が、俘囚名簿に所属を記入した。指導係が気を昂ぶらせて、振りあげた肉付きのいい腿を鞭で叩いた。

「あっ」

と女は美しい顔を歪めた。

女達は、続々と、乳白色や冴えた青白い肌やピンク色の発育のいい均整のとれた体をふって、ステージに登場してくる。滑らかな体の曲線が、絶妙な動きをみせる。一刻も早く恥しい行為を終わりたいと殊勝な心がけで立つ女がいる。おれはその殊勝さを賞でて、たっぷり恥しい姿態をとらせてやった。脚が萎えてしまったように、訊問中にへたへたと坐り込んでしまった女がいる。まだ若々しい水々しさがしたたり落ちるようだ。そいつを罰のために四ツん這いにしてステージを廻らせるのには、鞭が六回、必要だった。

愁いを含んだ顔が幽かに匂い出すような美しい女が、裸の胸を押さえて、眼も眩む思いをようやく耐えながら、請願した。

「私の父は、F：国人です」

「お前の父は亡命した非国民だと調査済み

だ。酒場へいけ」

金髪の長い一途な決意を唇にみせた女が、盛りあがった胸をはげしく波だたせて抗議した。

「屈辱よりも、死を……」

「馬鹿者、ごたくを並べるな！」

おれは怒鳴りつけて、柔らかな頬の肉にピントを張ってやった。

「うろたえるな。劣弱人種の女に文句をいわれた屈辱は、覚えておいてやろう。教化訓練室へ放りこめ」

客席から咆えるような叫びが、その女に叩きつかった。女は透き通るほど蒼ざめた。気をきかせた監督兵が、その女を逆立ちに支えてステージを歩かせた。よちよち歩きの女の脚を不意に離すと、女は、どすんと惨めな恰好にぶっ倒れた。金髪が床にさっと流れた。暗い客席がどよめいた。

各地の美女が一堂に集ってステージに登場する。審査員がその女達を吟味する。美人コンテストの趣向と同じことだが、ちよっと違っているのは、女達が鞭に追われることと、水着のような誤魔化しものを身につけていないことと、俘囚の身を戦慄させていることくらいものだろう。が、そこが大違いだとい

たい奴はいうがいい。断っておくが、ヒューマニズムなどというのは、貧乏人根性だ。間違えてはいけない。戦争に道徳なんてものは本質的に存在しない。戦争は殺人競争が本質なのだ。まして我々は優秀民族なのだ。劣弱人種をどうあつかおうと、とやかくいわれる筋合はない。

鍛えられる女達

選別を終ると、おれは女達に、それぞれの所属を色で示す制服を着させた。もっとも透き通るハーフシユミーズは、制服という概念にはあてはまらないし、裸でいるよりも、かえって女達の羞恥心を刺激するようだった。イコールをひいていえば、そいつは兵士達の好奇心を魅力的にそそるといふものだ。

最初のうちこそ少々女達はごたごた手を焼かせたが、一週間、十日するうちに、女達は我々の予定したように動きだした。圧倒的な我々の力は、女達を屈服させるのに、さして手間どらなかった。

初夏であった。おれは教化訓練室にいた。室内には新入の女が教化訓練をほどこされていた。真白い肌に惱ましく盛りあがった乳房があえいで、額に乱れた髪が、苦痛にしば

りだされる冷汗にはりついている。女は椅子にかけて、金縛りにあったように、じっとしているが、女のふっくりした体は、かすかな震動を続けていた。電気椅子にかけてあるのだ。女のむっちりした太腿に鉄バンドがくいこむようにはめてある。後手の手錠は、椅子の足のコードにつながっている。首環がはめられて、それは椅子の背のパイプに固定されていた。

その向うでは、回転階段を、絶え間なしに踏んでいる女がいる。円型のエスカレーターのような回転階段には頂上がないので、女はいつまでたっても、足踏みをとめることができないのだ。もうアゴがあがって、脚をあげるのもやつのようだった。体中が、波だつような呼吸だ。白い人間の体をした二十日鼠というところだ。

もう一人の女は、教化係の質問を受けている。椅子に坐って、教化係の問いに答えているのだが、テーブルの下にいれさせられた手に、なにか細工をほどこされているのか、時々、女の背は苦痛にそりかえって、ひくひくと痙攣を起している。

「ああっ……」

と電気椅子にかけられた女の咽喉から、何

度目かの魂消えるような絶叫がほとぼりして、女の背はぐいとのけぞった。電流は間歇的に断続するのだ。柔らかな体がいっぺんに硬直して、数秒の後に、すたと力を失ったようにだらんとした。かぐわしい息が唇からあえぎでた。新しい汗がまたにじみでた。がっくりと頭がたれた。おれはその女の状態をなめるようにみつめた。

「嫌、いや」

「わかったかね」

「はい」

精も根もつきはてたという具合だ。

「もっと、よくわからなければいけないよ」

と、おれはなぶるようにいった。

「まあ今夜一晩かけておいたら、一切の反抗も諦めるだろう」

とおれは教化係の兵に伝えた。女はそのおれの言葉に恐怖した眼を見開いた。この眼が屈従と絶望に変わるまで、しめあげなければなら



らんだろう。

電話がかかってきた。受話器をとった下士官が、おれに電話だ、とつけた。

「副司令と参謀大佐が視察にお見えになっています」

と副官の声だった。

「オフィスにお待ち願え。すぐにいく」

おれは教化調練室をでた。廊下をピンクと水色と黒のハーフスキーマーズの女が歩いていた。それぞれ酒場と特別室と室内競技場の

女達だ。

室内競技場を通り抜けようとすると、丁度練習の時間で、女達は、担当兵の鞭に追われてバレーボールやテニスや、フェンシングの練習をしていた。バレーボールをする女達の体は弾んでいる。テニスをしている女は、左右前後に打ちわけられる球を追いかけて、くたくたになっている。フェンシングを練習させられている女の制服は、相手の兵士の剣にびりびりと破かれている。

室内プールは水浴室もかねている。水の中に叩きこまれる女、悶えて顔をだした途端に水中へ押し込まれて、したたかに苦しむ女、水浴する兵士達は、喜々として、女達の頭を押さえ、脚をひっぱって、なぶっている。

オフィスに入ると、副司令と参謀大佐は、窓辺に立って外の情景をみている。挨拶をして近寄ると、参謀大佐は、外を指さした。

「なにをさせているのかね」
と彼は訊ねた。

軍用犬を連れ、鞭をたずさえた訓育担当の下士官が四、五人で、二十人ばかりの女達を外にかりたてて、とり囲んでいる。女達は劇場所属を示す白いハーフシュミーズも脱がされて、小さなスコップを持った手を懸命に動か

していた。明るい午後だ。土塊がいつせいはねあがっている。

「のろのろするな」

と号令をかけた赤ヒゲの下士官を呼んで、あれは、なにかね、と訊ねた。

「自分達の体が横臥できるだけの穴をほらせとるのです。鍛えてやろうと思ひましてね」

おれは、その訓練方法をきいて笑った。低く笑った。

「十分にしこんでやれ、十分にな」

オフィスの我々は、いったんテーブルに向きあった。赤いハーフシュミーズの女が、コーヒをいれてきた。おれは司令部のお歴々に、案内をする前に、若干その概要を説明した。

その間に、外の女達は、五十センチほどの深さの穴を堀りあげた。

「水を撒け」

と下士官が合図の手をあげた。ホースから噴出する水があたりをびしょびしょに濡らし、いく。穴の底にも水が溜って、掘ったばかりの穴は、土塊を溶かして、泥々になる。

「各自の穴へ体をいれろ」

「ぐずぐずするな」

女達は反抗の無意味さをよく知っている。

泥水の穴の中へ女達は、白い体を次々に横たえていった。

「穴の中で体をこねあげろ」

清潔な体が、忽ち泥にべとべとに汚れた。髪も汚れ、体の隅々まで、くまなく汚れて、女達は泥まみれになる。

「よし、立て」

女達は体を起して、立ちあがった。一瞬前の白い女達の情景は、惨めな、泥んこの女達の情景と変っている。胸から腹から、背から太腿へ、泥水が雫りおちる。汚辱の象徴だ。この移り変りが女達のまぎれもない現実だ。

「手足を開け」

泥人形に、勢いよく消火ホースの水が叩きつかった。泥人形は、みるみる白い肌を現わした。濡れた体は露わに慄えた。

「穴に伏せ」

とまた号令がかかった。

「立て」

「伏せ」

「立て」

「伏せ」

執拗に下士官は号令をかけた。泥の体を洗われてほっとする途端に、女達はまたしても泥まみれになる。執拗に汚れ、執拗に洗



奴 隸 娘

(黒奴被虐の一コマ)

ルーキー・赤沢

訪れた従兄の家で私は大歓待を受けた。従兄の家族は妻も含め、皆、南部では大都会のニューオリンズ市へ遊びに行っており、彼一人だったから、よけいに歓待してくれたのだろう。三度の食事は、とびきりの酒がついた。純フランス風であった。身のまわりは、クオドルーン(白人の血 $\frac{3}{4}$ 黒人の血 $\frac{1}{4}$)の美しい奴隷娘が献身的に世話してくれたし、夜は夜で彼自慢のコンキューバイン(めかけ)達——この殆どはクオドルーンかオクトルーン($\frac{1}{2}$ 黒人)の混血だったが一のサービスがつつがなく、快的にはや一週間を過したのであった。

その日も、午後から私は従兄チャールズ

とジンをちびちび飲みながら、よもやま話をしていた。心地よい風がしきりに吹く。広いベランダの前には泉水が緑にゆれていて、そのまわりはシュロとかカシの繁みがあり、奴隷達の苦役する農場を視界からさえぎっていて、この世の楽園と思われた。チャールズが急に「さあ、今夜は生(ナマ)でいこうか?」ときいた。「生(ナマ)?」「ナマだよ、野生の奴隷だ。彼等をひっぱってきて虐めて虐めて訓練し文明化するのもオツだよ、その中のコンキューバインみたいに、だらだらしてない新鮮なナマだよ」「それは面白い」横で給仕していた奴隷娘がニヤツと笑った。チャールズはさすが、その娘の尻を覗うった。「主人の話

われ、何度でも同一行為の反復だ。

「なにをしたというのかね」

「理由? ありませんよ」

おれはそんな質問に驚いた。分りきったことだ。なぜという理由はいらない。理由のない制裁こそが、女達を訓練するのに、最も適切なのだ。

「駆け足、足踏み」

泥まみれの女達が、その場で駆け足の歩調をとった。ぱっぱと泥水がはねあがる。

「歩調を高くとれ!」

女達の太腿が勢いよく跳ねあがった。消火ホースの水が、不意に、その女達に突きささって叩きあげる鞭となった。激しい水圧によるける女がいる。

「穴に伏せ」

「立て」

徹底的にぶちかまして鍛えるのだ。女達は勇者にふさわしく鍛練されねばならぬ。遅しい肉体的な強靱さと従順な服従心を兼ねねえねばならぬ。おれは、激しく進める水圧に美しく整った体をぶるぶると振動させる微妙な情感を満足な眼差しで眺めながら、そう思った。

これが、おれの「黒色の栄光」へのプロローグであった。

をきいてはならん！この黒ブタめ」

×

×

奴隷小屋からチャールズの引く馬車がきた。日は暮れ果てペランダの前の泉水は涼しかった。馬車が止ったので見ると馬車は鉄の檻だった。檻の中には見るからに頑丈そうな黒人娘が七人、ぼろぼろのホームスパンを着て乗せられていた。檻は黒人達によって降された。コンキューバインや邸付の黒人も一せいに集ってきた。チャールズは檻の中の黒人娘達に手を出して、「その着物を脱げ」と命じた。娘達は教育はなかったが、やはり恥しそうにしていた。「脱げ！」黒人娘は観念して脱ぎ、その着物を渡した。横から一せいにホースの水が注がれ、そのするどい水しぶきに娘達は悲鳴をあげた。十分も洗れたあと、香水の入った水が浴せられ、黒人娘達は檻に入れられたまま部屋に運ばれた。

×

×

チャールズと私は、パンツ一枚（ゴムで丈夫だった）と拍車のついた靴だけで、その部屋へ入った。チャールズは「君の好きな女を一人選んでくれ給え」と言った。私

は従順そうで背の高い美人を指さした。チャールズはこれも背の高い、いくぶんやせ気味の美人を選んだ。その二人の娘は檻から出され、地面にある鎖止に首輪と手枷をつけられた。

「お前達は主人様にサービスするのだ。外の者は鞭五十打を黒人男から受けるのだ。だから、お前達二人は死ぬ気でサービスしなければならぬ」

×

×

チャールズと私と二人の黒人娘ばかりとなった。チャールズは「黒人は歯が強いし鼻も息が強いので、顔に拘束具をつけなければならぬ」と言った。それは馬につけるようなものだった。次に黒い皮のパンツがはかされた。その尻には馬のような毛がたれていた。私達はそれをつけながら娘達の身体をつねたり叩いたりした。

その黒人娘の馬が出来てから、私達はそれに乗って部屋中を駆けめぐった。少しでも遅れると鞭で心ゆくまで叩いた。さしもの頑丈な黒人娘も遂にのびてしまった。

（以上）

兵士達は氣力を回復した。統制は整った。Y・V作戦は軌道にのった。おれは、小さな勲章を、また胸に飾るようになった。

いまさら、なにを弁解することがあろう。それを知らず、おれは副司令と参謀大佐の司令部のお歴々を、案内しはじめた。

最初は、標本室であった。そこには、直径一メートルぐらいのミラーボールが、三台、ゆっくりと回転していた。美しい眩しい光を反射するミラーボールには、それぞれ、四人の女が、巨大な球面を抱くように、背を刺きだしにしてはりついている。まだ十五、六才の生硬い感じの少女も、二十才を越して、肉付きがあでやかに成熟した女もいる。

「お叩きになりますか」

我々が入っていくと当番兵が、こちこちになつて、お伺いをたてた。

参謀大佐が、当番兵の鞭をうけとった。

「二ダースほど小手調べをするがね、仰向けにはできないのか」

「括りつければ大丈夫であります」

「張りきった腿をうちたいのだ」

「承知いたしました」

女達の体が、かすかに震えて、肌の艶がきらきらと雫をしたたらせるように、鏡の光線を反映した。

鞭音と悲鳴が、仰向けに体を彎曲した女達の唇と、伸びやかな脚から、あがった。（了）

被虐の白い花

赤川道郎

四馬孝・画

罨 (わな)

その翌朝、史郎を送り出した榎子は倉三から渡された紙片を初めて開いてみた。

無理矢理、掴まされてポケットに押し込んだまま財布の下敷きになっていた。しわくちゃになっていたが、倉三らしい乱暴なエンピツの走り書きで、

上京区千本通××上ル、ナイトクラブ、スマロ内、白戸、と読めた。

史郎との新しい夜が約束された事で榎子はどうしても倉三に会って、きっぱり話をつけたいと思っていた。榎子は今日、史郎が帰るまでに、それを済まそうと思っていた。

ただ一人、久し振りに市電の吊革に掴まると、引きつるような脇

の痛みに、榎子は今朝から何度めかの、顔をしかめた。しかしそれは、榎子にとっては何か心たのしい、身体の底から、力づけるような痛みであった。歳末を間近かに控え、クリスマススイブを明日に迎えて、それらしく色づいて眠っている街並も目に入らなかった。これから自分がやりとげようとしている大仕事に緊張して身を固くしている榎子には、路傍の石に過ぎなかった。それよりも鈍い身体の痛みの方が切実に彼女の心を捉えて離さなかった。

大体ここだと見当をつけた停留所を降りた榎子は、すぐにスマロを見つける事が出来た。それは今、榎子の乗って来た、広い電車通りと、それから東に入る洛西京極といって二、三の映画館とどれも同じような飲食店が、ぎっしりと向い合った小路の角にあって、安っぽいモルタル塗りにクリスマス用のけばけばしい装飾が、矢鱈と



施されてある、かなり大きい建物だった。

流石に柩子はたやすく、それに入りかねて、何度も其の前を通り過した後、思い切って、その建物にはおよそ不以合な程、小さくて重そうなドアを押した。すぐ二米ばかり前にホールへ通じるらしい別のドアがあって、そこは、ほんの一坪ばかりの土間になって

いて小さな豆球がぼつんと一つ灯いているだけで外は打って変った暗さだった。左手に地下へ通じるらしい曲りくねった階段があった。「御免下さい」

柩子は、恐る恐る云ってみたが、それに応えてくれる人の気配はなく、内部は、しんと静まりかえっている。

水商売の店を尋ねるには少し早かったかしら、それにしても倉三は、この様な店で一体なにをしているのだろう。

柩子が心細さに、ふと出口の方を振り向くとドアのすぐ右手の壁にクリーム色の呼鈴の取付いているのに気がついた。しばらく、ためらった後、柩子はそれを、思い切って押してみた。微かに、どこかでリリーンと、澄んだ音が聞えると、地下の方に足音がして、その階段の中途から、若い男が、上を窺がうように顔を現わし、柩子を見とめると、大股に階段を飛び越えてあがって来た。

細く仕立てた黒いズボンに派手な柄物のスポーツシャツ

の裾を押し込んでゐる。やくざ風の粗野で大作りなその顔は、ずんぐりとした男の軀と共に、いかにも、ふてぶてしい感じを与えた。

「何か御用ですか？」

顔に似合わず案外、丁寧にその男は問いかけて来た。

「あ、う、白戸と云う人、こちらにお出でですか」

「はあ……」男は曖昧に應えると、「お宅さんは」と、うさんくさそうに訊いた。

「榎子と伝えて下さい」

頼野と云つても倉三が知らぬかもしれないと思ひ榎子が、そう云うと、男は「あっ」と驚いたようで、改めて榎子を見直してから、

「兄貴、いや白戸さん、待って居ますよ。さあ、どうぞ」男はいそいそと先に立った。

男について曲りくねった階段を降り切ると、すぐ左右にトンネルのように通路が広がっていて、正面には赤や青の豆球とモールで装飾の施されてある頑丈な扉のついたホールへの入口らしいものが有ったが、それは固く鎖されていた。そこから右へ折れた。かかりの部屋に倉三はいた。壊れた椅子やテーブルが乱雑に積まれてある一隅に作られた三畳程の破れ畳を敷いた床の上で、だらしなく胡坐をかいて酒を呑んでいた、彼は榎子の顔を見るなり、

「おう榎子、来たか」と、忽ち相こうを崩した。

大分、酔っているようなのが、ますます榎子の身を固くさせた。

「まあ掛けな」と倉三はそう云ったが、その場所も無いので榎子は立ったなり話をする事にした。若い男は倉三と二、三、話のやり取りをして出て行ったが「兄貴、兄貴」と呼んでいた、その親しそうなようすを見て、史郎に写真を売ったのは、あの男ではなかったかと

榎子は思った。そして其の写真の事を一番に責めてやろうと榎子は決心していたのだが、いざ倉三とこうして向い会うと、榎子の口調はどうしても嘆願じみたものになった。

「ねえ、お父さん。私、頼野と正式に結婚して、もう二年になります。お父さんを裏切った事になりますが、お父さんがあんなふうになくなった時、私にはどう仕様もなかったんです。やっと幸せになれたんです。お父さんの御意は一生忘れませんから、私をこのままに置いて下さい。ね、お願いします」

榎子の話を、おすつとした顔で酒を呑みながら聞いていた倉三はコップを置くと榎子に改めて開きなあった。

「やっと幸せになれたって？ お前、それではなにか、俺と一緒にいた頃は、不幸せだった。と云うのか、何を云いやあがる。ガリガリに痩せやがって、虱だらけだったお前が、そんなにきれいになれたのは一体、誰のおかげだ」

倉三にとっては、どうだと云わんばかりの大見得だったろうが、榎子としては彼のものにされた忌まわしい思い出が、その恩誼を感じていながら、むしろ、それとこれとを、差引き計算してみても自分の方に、お釣がくる位に思っていた。それがつい

「それは良く判っています。だから……」

と迄榎子に云わせたのだが、それから、自分の恥部を改めて倉三の前に曝すよう言葉にならなかった。だがこう云う事には至って察しの良い倉三は、すぐその言葉尻を取り、

「だから、なんでえ、俺の女になった。俺の言いなりになったって云いたいんだらう。笑わすな、俺がああなる前の頃には、自分から裸になって、縛られるのを待っていやがったくせに……」と倉三は声

を荒げて、榎子に迫まった。

耳をふさぎたくなる倉三の言葉に、榎子は顔を真赤に火照らしながら、もう必死だった。

「いいえ、そんな事、決して思っていない。御恩は忘れないと云いたかったのです。」

榎子は倉三の座っている床まで進んで、それに、膝と手をついて頭を下げた。

「お願いします。私をこのまま、そっと置いて下さい。たのみます。お願いします。」

倉三が自分に対し具体的にどう云う考えを抱いているのか判らぬ榎子には、こう頼んでみるより方法がなかった。そしてその自分をじっと見下している倉三の眼を痛い程意識しながら、しまいには涙を流しくり返して哀願した。

「そんなに云うなら、お前の事は忘れてやってもいい」

頭の上で、せせら笑っては、いまいかと思っていた倉三の声が急に和らいだので榎子は思わず、「え！」と顔を上げた。だが倉三の顔は元のままで和らいでもいなかったが、その榎子にかおせるように云い出したのは、妙にしんみりとした調子になっていた。

「だがなあ、榎子、それについては話がある。」

榎子は倉三がようやく具体的な話を持ち出して来たらしく、しかもそれが、あさの倉三のそれと、てらし合せて見て、そう自分に悪くなさそうなので、胸をときめかせて倉三の話を待った。

「丁度、半年前に刑務所を出られたんだが、お前同よう、ショーの座を持ってみなければ行先の無い俺には裸で放り出されたようなんだ。お前も苦労したろうが男の俺には、なおさらの事だ。そ

うこうしている中、食い詰めて、ようやく古い友達のやっている此のクラブを見付けて、無理矢理もぐり込んだんだが、これと云って仕事を貰った訳でもない。いい加減、心細くなって来た時に、榎子お前を見付たんだ。あの時には大層なようだが地獄に仏とはこの事だと思つたよ。もっともお前の方は、どう思っているか知らんが、俺にとっちゃあ、広い世間に身内と云えば、まあお前一人だから……」

そこで倉三は煙草に火をつけ、榎子の反応を確かめるような間を置いた。しばしの沈黙があつて、

「妙に話が愚痴ってしまったが、そんな事はどうでもいいんだ。結局、俺はどうしても、以前のようにショーを持ちたいんだ。」

榎子に相談するように云って酒をあふった。会うそうそう軀でも求めかねないと、こちこちになって用心していた榎子も、こう倉三にしんみり話し込まれると、つい聞入って自分にも覚えの有る倉三の境遇に満更、彼の心境が判らぬでもなく、いささか同情めいたものが胸の中に湧いてきた。

そんな榎子を見抜いたように倉三は話を結論へ持っていた。

「そこでだ、お前もさっき云ってくれたが、いいか、こんな事は云いたくないんだよ。云いたくはないのだが、俺に一寸でも恩とか云うものを感じていくのなら、力を貸して欲しいんだ。お前だつて俺があつさり忘れてやると云つたって、同じ京都にいつまでも居ると思えば気持が悪かろう。ショーさえ持てりゃあ、景気の余りよくない京都になんか、二度と来ないでもいいんだが、どうだろう」

榎子はもうその話の途中から頭のなかで史郎に正直な訳を話し、出して貰えそうな金の予算をたてようとして、あれこれ考えを廻ら

していた。夫に出さず手切金との計算、平常の榎子なら、出来る筈の無い事だったが、史郎の広い確かな愛情を信じ、その史郎との幸福な生活が続けられそうな微かな明りを見出した今の榎子は平気で思いめぐらしていた。

——しかし、かりそめにも一座を持つとなれば大層な金であろうが、それを夫の会社員と云う地味な職業を知っているような倉三が、それに足る金を自分達から引出せるとも思っているのだろうか、それとも、取れるだけ取ってやれと云う算段か？——

榎子の懸命な思策はまとまらず困乱して、不用意なまゝ口をついた。

「それは、お父さん、出来るだけの事はさせて戴きますとも。でも私に出来るお金なんて、たかが知れていますけど、あらたにショーを持つとって、大変なお金が必要なんです、しょう、少しでもお役に立てるかしら？」

「とり合えず、お前には二十万程出して欲しいんだ」心配していた以上の桁外れな金額を無難作に云ってのけられて、いきなり顔を逆撫ぜされたように榎子はうろたえた。

「そ、そんなには、とてもお父さん」

「そうだろうと思っていた。だがな、どうしてもそれだけの金は要る。元々お前にそれだけの金が出せるとは思ってやしない。力を貸して呉れと云ってるのは、そこなんだ。お前がな、本当に俺を助けてやろうと思っいてくれるのなら、その金の作れる算段が有る。」
榎子は倉三の巧みな話し振りに思うさま、曳きずり

廻されている自分をはがゆく思いながらも、反射的に問い返していた。

「算段って？」

「実はな」と倉三は、あたりに立聞く人がいる筈も無いのに、ぐいと榎子に顔を近づけて声を落した。

「こゝにはな、ほんの時々だが常連の、それも支配人が選り抜い客だけを呼んで、大層な金を取ってから、一寸変ったショーを見せたり好きな遊びをさせたりする秘密のホールが有るんだ。そのホールへ明日と明後日のクリスマスに客が呼ばれて来る事になっているんだが、それにお前が出てくれさえすりゃあ、二十万という金は支配人と約束されているんだ。なんならお前にも一万や二万の小遣いは



やっただって、どうだ。何も嫌な思いをして、びく／＼しながら亭主から金をせびってくれんでも、ほんの二たばん、それも十一時頃まで、なんとか云って家をあげてくれりゃ、それですむんだ。俺だって、何も堅気に収まっているお前を荒だてて迄どうの、こうのって、やりたくないんだ。どうだい、ひき受けてくれるか」

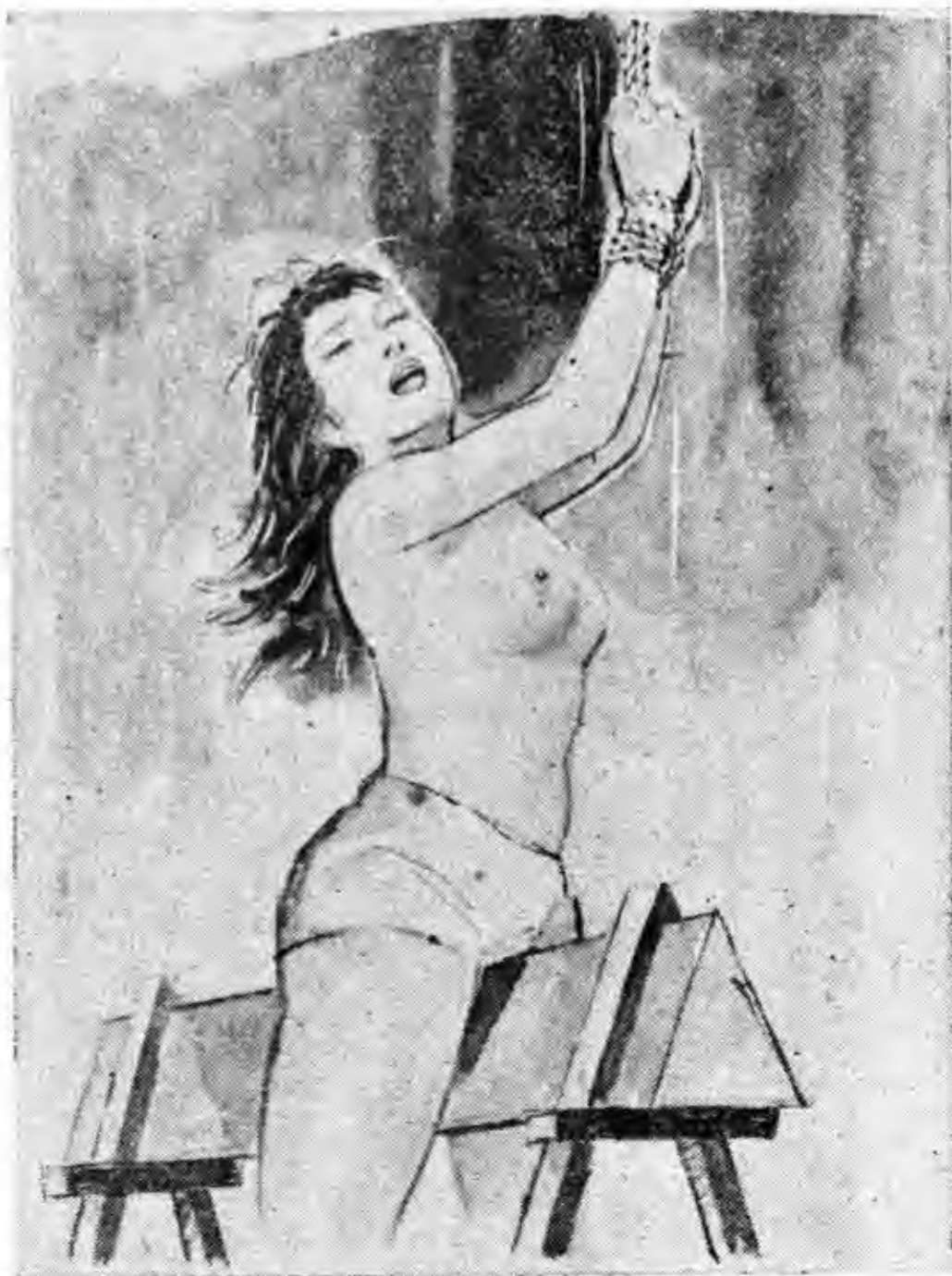
——成程言葉はうまく、ほかし同情めかしてはいるが、かりそめにも一時は子として、かわいがってмокれ、今は、れっきとした人妻になっている私に、売春を強要している。

昔と少しも交らぬ倉三の破廉恥さに、やりきれない嫌悪が胸を突上げてきた。

しかし、それを受入れる事の出来ないのは勿論だが又、一方的に拒否する事も出来そうに無い倉三の提案に、なんとか打開の途を見出さねばと、自分を励ました。いつの間にか床にさがり倉三と向い合って座り込んでいた。

「お父さん、いくらなんでも夫がある以上、軀を売る事は絶体出来ません。しかも夫は私が辛い程愛してくれています。それを裏切る位なら死んだ方がましです。夫に話まして、許される限りの物を売ってでも、出来るだけのお金は明日にでも、お届けします。それで許して下さいませんか……」

「馬鹿、軀を売ってくれなんて誰が云った。客に抱かれる女は他にいくらでもある。お前は、一寸したショーに出てもらうんだよ」 梶



子は生返ったような気がしたが……

「ショーって私は踊りも出来ないんだし、第一、そんなことで二十万ものお金を支配人が出してくれますの？」

「それは絶体、大丈夫なんだ。それにショーと云っても何も踊ってくれなんて云ってやしないぜ」

梶子は、最初、自分をほっとさせた倉三のしんねりとした口調と遠廻しな話し振りが、次第にねばねばとした蜘蛛の糸のようになって

て、まといついて来るようで、それを取払うのに疲れ切ってしまい息が詰まりそうになった。陰うつすぎる話にじめくした此の部屋を早く出て、外のからっとした空気が吸いたくなって来た。

「じゃあ一体、私は何をすれば、いいのです。はっきり云ってみて下さいな……。」

「そう云ってくれると有難い。手っとり早く云うとだな……こうするんだよ」

倉三の調子が一変したと思うと、其の手は素早く伸びて榎子のスーツの衿にかかり、どつとばかりに榎子を膝元へ引き倒していた。あっ！とあわてて体勢を、たて直そうとする榎子に、そのいとまをあたえず倉三は、どっかりとそのうえに跨がると、

「何するんです。のいて、のいて下さい」

今は全く他人である筈の男の体重を身に受けて一度に逆上し、恥かしさも忘れ芋虫のように腰を上下させて、はね返そうと必死な榎子の両手も、やがて、がっちり両膝で押さえてしまうと、落着いたようすで出口の方を向き、

「おい繁次」

と呼んだ。

「あゝ兄貴」

すぐに入って来たのは、さっきの若い男だった。どうやら部屋のすぐ外で張番でもしていたらしい。倉三はそれに、顎をしゃくって云った。

「こっちへ来い。いいものを観せてやる。こいつを裸にするんだ、手伝え」

「よしきた、兄貴」

その言葉だけで打てば響くように反応した繁次は、靴をならして榎子に近づいた。

（あ痛っ、ちえっ此の野郎、蹴りやがって）

子供のようにはいだ繁次の手によって、ハイヒールが遠くへ飛ばされ、びったりと榎子の腰を包んだ、タイトスカートが、びりびりと悲鳴をあげて、曳き下ろされ、純白のスリッパに包まれた榎子の下半身が剥き出された。

倉三の、ものなれた手は、繁次のそれより何倍か早く動いて榎子の恰好の好い鼻をねじるようにつまみあげ、その苦しさに思わず喘いだ口に汚れた自分のハンケチを押し込み、繁次の首に巻かれていた人絹らしいマフラーをぎり／＼巻きつけて、猿轡をしてしまうと、榎子の腰に跨がったまま首に手を廻し引きあげて上半身を弓なり反らせて、スーツにブラウスのボタンを、ぶつぶつと飛ばすと一挙にそれを剥いでいた。

猿轡を外そうとする両手が後手に縛られてしまうと、榎子の抵抗は大方、止んだ。

「おや？ こいつ！」

倉三はブラジャーと小さいナイロンのパンティー一枚にされた軀を俯伏せたままぐったりと転がっている榎子の肌に、いく筋もの鞭の跡らしいもののあるのを発見して、うろたえた。続いて彼は、その手足に、くっきりと残っている緊縛の痕を、はっきりそれと確認すると、頭を、がんと殴られたようなショックを受けた。

繁次の報告によって彼は、史郎の概略を掴んでいた。——その優男が榎子にロープと鞭を……？

——うまく亭主を教育しやがって、俺の仕込んでやったものを楽

しんでやがる——

流石の倉三も、その痕が梶子の必死な策によって昨夜初めてつけられたものとは知りようが無く、彼は此の時になって、ようやく梶子に裏切られた気になった。

そして、あわよくば折を見て二、三度も縛りあげ鞭を振ってやれば、自分になびいて来ぬでも無いと、いささか梶子の軀に自信を持っていたのが、どうやら駄目らしいと覚った時、たださえ烈しい気性の彼は、理由の無い嫉妬に身を焼き、むらむらと怒りの血を、たぎらせた。「くそっ」唸るように云った彼は、糸でも切るようにブラジャーを引き千切ると、ほんやり梶子の足を押さえている繁次の手を払い除け、破れ畳に、めり込ませようとでもするように、身悶える梶子を、いまいましげに眺めながら、

「どうだ凄いい女だろ。ええ俺のものだった時分には、まだ、こりこりしてやがったのに……」

二人の男に手足を取られて、焼魚でも返すように、くろりと、仰むけにされた梶子が、海老のように軀を曲げて、その視線を避けようとするのに、倉三の手は待っていたように伸びて、どこから取り出したのか、ざらざらとした麻縄を首へ巻きつけると、それを肩から足首へ取り、「ぐぐっ」と、梶子とその白い咽喉をのけぞらすまで弓なりにして縛ってしまふと、二の腕から乳房の上下にまで改めて縄をかけ、ひしひしと本縛りにした。

「ほら、思い出さないか。昔、よくこうやって縛ったなあ。満更嫌でもない筈だと思うんだが、お前にやって貰うのは此の通りの事を、やって見せるんだ。勿論、客にな。まあこれは予行演習って訳だ。驚いただろうが、判ったろ。どうだ、やってくれるな」

四つの眼から逃れたさに梶子は動転していた。なかでも倉三のそれには気の遠くなるような恐怖があった。

此の想いが梶子に一切の分別を失わせ、遂に梶子を屈伏させた。

「そうか、よし。」

梶子の無念なうなづきを、見てとった倉三は嬉しげにうなづき返すと、繁次に云った。

「おい、支配人の部屋にカメラがあつたな。あれを持って来い。」

——あうううう——

梶子は、たまげる絶叫を身内であげた。底知れぬ倉三の悪辣さに狂乱しながらも、どうする事も出来ぬ梶子は、目もくらむような姿態に次々と縛り変えられて、カメラに収められていった。

「さ、奴がかえって来んうちに服を着てしまえ」

促がされて、泣きじゃくりながらも、下着に手を伸ばす梶子に、

勝誇った倉三は容赦なかった。

「心配するな、明日のショーで写真は絶体に撮らせやせん。それに大層な金持ばかりが客だ。お前の知ってる奴等が来る筈も無い。それから、これはなあ——」

ようやくスリッパを着け終った梶子に倉三は抜き取った、フィルムを示しながら、

——明後日のショーが済み次第、お前に渡す。俺は、翌日は京都に居なくなる。二度とお前の前にや姿を現わさんよ。一切がパーで訳さ。お前にや少々悪いようだが、拾って貰った恩を万分の一でも返すつもりで、やってくれる事だな。さあ早く帰りな。明日九時までは来いよ。おっと言い忘れた。念の為に云って置くがな、時間通りに来なかったり、警察なんぞへ知らしたりしやがったら……

……」

倉三はフィルムを榎子の目前に突出して、二、三度、振ってみせながら、自信たっぷりな笑いを浮かべた。

「亭主の会社の連中や、お前の家の近所中に、うんと増殖して、配ばってやるからな。」

呆然とスマロを出た榎子を、比喩おろしの冷い風がなぶった。

そのまま真直ぐ家へ帰る気も失って、榎子とはとほと十本通りを四條の方へ向い、あてもなく歩いた。まだ昼すぎなのにどんよりとくもってあたりは夕暮のように暗いのが、その榎子の今の心にそっくりであった。

倉三の手にあった小さなフィルムが榎子の頭に焼きついて、離れなかった。

——とんでも無い切札を倉三に握られてしまった——、倉三はあのフィルムをポケットへ収め込んだ時、私の心を、完全に握ってしまったと自信を持ったに違いない。

あれを取戻す為には、なんとかして夫を欺まし、倉三の云いなりになって大勢の男の前で死ぬ程、浅ましい自分の姿を曝さなければならぬ。しかし、そうしても倉三は果して正直にフィルムを渡してくれるだろうか——。

榎子の身内には黒雲のような不安が、うずを巻いて荒れ狂い、クリスマスや正月の支度に追われているのであろう忙がし氣にあたりを行き交う人々が、今は別世界の一人かまるで映画スターでもあるかのように羨やましく思えるのだった。そしてたった五日前、倉三に会うまでの何一つ不安の無い幸福な生活を、まるでずっと昔の出来事のように思えるのだった。自分の浅はかさに、榎子は大声をあ

げて泣き叫びたかった。

ふと又、榎子は、今頃、会社で自分の作った弁当を、うまそうに食べているであろう、史郎の優しい顔を思い浮かべた。その顔はどうしても離したくなかった。昔の男の所へ、のこのこと出掛けていて、あんな写真を、あらたに撮られたと夫が知ったなら……。

結局、榎子は、猛禽のような倉三のつめに、がっちり捕えられて逃れることの出来ない自分を、発見するばかりだった。

いつの間にか千本丸太町を通り越した榎子のつい左手に、出世稲荷の赤い鳥居が灰色の街に、そらぞらしく浮上っていた。

埃りを、かぶって、どす黒く汚れた、その色は倉三の血のように思え、榎子に、おぞましい決心を促がしているようであった。

——榎子は、ついに史郎を偽り、スマロへ行く為の口実を考えを廻らしていった。

地獄

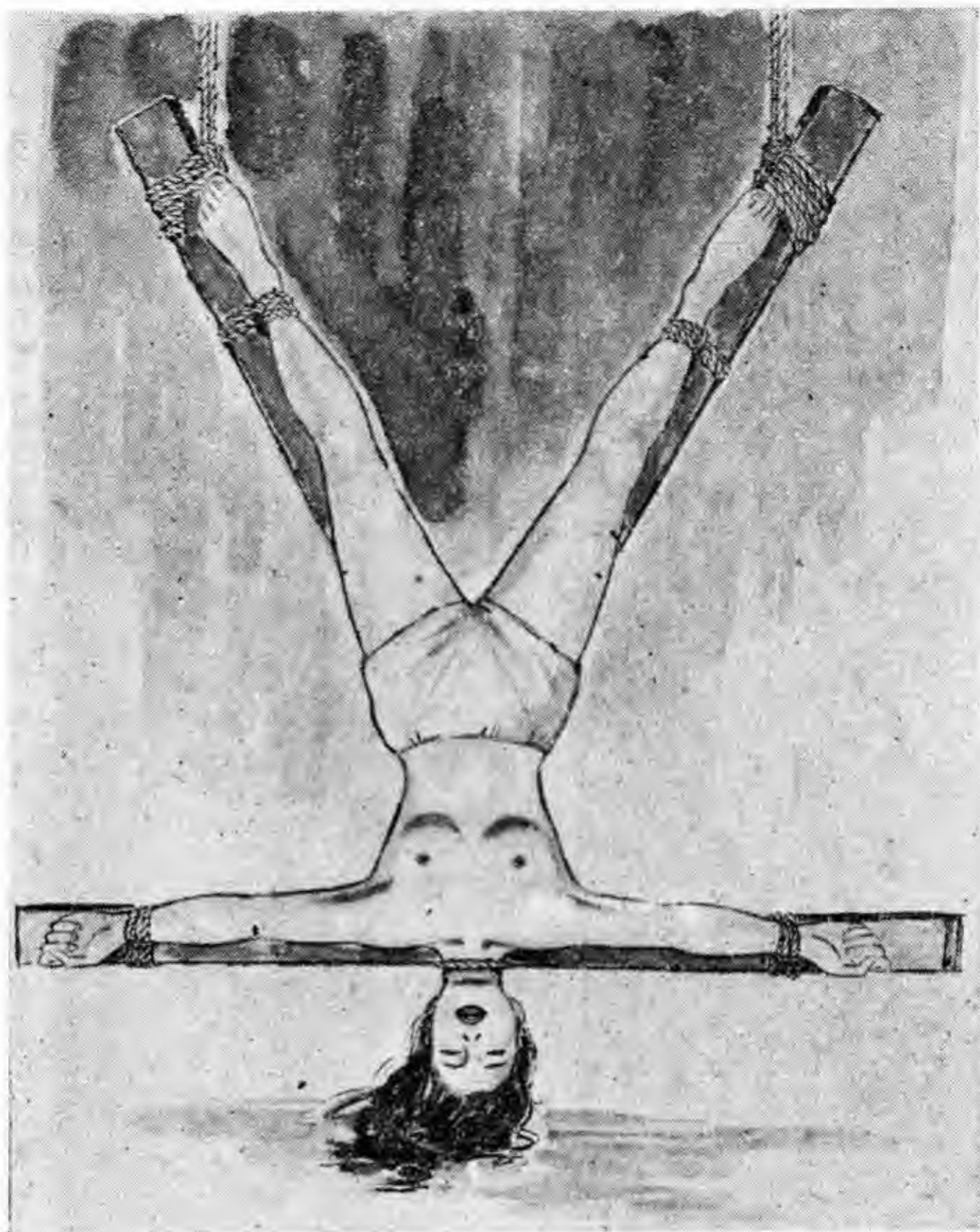
「おう、来たな」

九時かっきり、石の様な表情を現わした榎子を見て、流石に倉三は、ほっとした表情であった。相変らず繁次が一緒にいたが倉三になにか言いつかって出て行った。

「まあ座れ、まだ時間は有る。亭主の方は、うまく言訳できたらしないな」

夫のことを言われると、榎子は全身、針の先でつつかれるような氣持がした。それでなくとも、榎子は、人の良い史郎には、否やと云いようのない念の入った嘘を作り出し、欺して来た自分に、たまらぬ嫌悪と済まなさに、さいなまれていた。

歯ざしりたいのを、こらえながら榎子は倉三を、きっと見詰めて云った。



首、それを両方から、挟みつけるように盛上った肩の肉、榎子が何度も押しつぶされそうになった部厚い胸板、その、どれを取っても

「覚悟して来た以上、どうされようと、構いませんが、貴方に抱かれる事だけは絶体に来ません。約束して下さい」

倉三は、一寸、照れたような笑いを浮かべながら、

「そりゃ大丈夫さ。今夜の客に白黒を見て喜ぶような奴は一人もいないんだ」

「明日の夜、済み次第にフィルムを渡してくれますね」

「信用しろ、返してやるとも。まあ明日が済んだら、しっかり亭主を大事にしてやれ」

その時、繁次が戻って来て、

「兄貴、支配人が、いいかって？」

「ああ、いつでも、かかれるぜ」

「じゃあ、たのんます」

繁次が消えると、倉三は、くると服を脱ぎ、真白い晒で絞めあげた禪一本になった。

倉三の肉体は、昔と比べて少しも劣えていなかった。太く短かい

史郎に無い遅ましさがあった。目のやり場に困って、眩しそうにうつむく榎子を、倉三は、部屋の一角に小さく仕切つてある物入れのような戸をあけて押し入れた。すぐ目の前に別の戸があった。

「いいな、それを押して入るんだ。すぐショーにかかる段取になつてゐるんだぞ」

押しつぶした倉三の声に追われるように榎子が入り込んだ。其の部屋は今入つて来た方と天井以外、床から三尺ばかりを残して、べったりと鏡が張り廻らせてあり、天井に、はめ込まれてある、螢光灯が、煌々とそれに反射して、まばゆいばかりであつた。天井からは、さまざまなロープや鎖が不気味に垂れ下がっていて、鏡から下の回りには、いろいろな責道具らしいものが置かれてあつた。

鏡はマジックミラーといつて外側からガラス張りのように見える仕掛けであり、大勢の客が今や片ずを呑んで見ているのである。だが、榎子には、そんな客の眼を意識する余裕は与えられなかつた。

ようやく眩しさになれた榎子は、倉三と同じ姿をした繁次が、そこに居るのをみつけて驚いた。相手は倉三一人と思ひ込んでいた意外さに、「あっ！」と驚きの声をあげる榎子の後から続いて入つて来た倉三が、

「何を驚いていやがる。よくも逃げたりなんぞ、しやあがつたな。

この始末は、どうなるか、判つてゐるだらうな」

「どうしてやりましょう、団長」

繁次が妙に、へり降つた態度で倉三に調子を合わせて云つた。

どうやらショーを賣場へ導入する為の簡単な筋書や科白が二人の間で打合わされてゐるらしい。間違った。

「一緒に逃げやがつた女の行先を知つてやがるに違ひない。最初にそれを吐かせるんだ。それに、こいつは裸になるのが嫌だと云つて逃げやがつたんだ。裸にしてから、思い切り痛めつけてやれ。」

心得顔に繁次は手に黒い革の鞭を持ち榎子に近づいた。

「さあ、団長の命令だ。少しでも痛い目にあいたくなかつたら、さつさと、裸になれ」

覚悟して来た筈であつたけれども、ようやく榎子は鏡の仕掛けを察し、それを取巻いてじつと見入つてゐるであろう大勢の客の視線を意識して容易には裸になりかね、おずおずとスーツのボタンをまさぐつてゐるのに、

「なにを、ぐずぐずしてやがる、早くしろ」

と、怒声に似た繁次の声が飛び、びゅん、と唸りをたてた鞭で最初の洗礼を受けた。

「あっあっ」

思わず榎子が身をすくめるのを、今度は倉三がその肩を激しく突飛ばして床に転がすと、躍りかかつた繁次に榎子は忽ちスーツを剥がれた。その榎子の白い背に、

「ほら、これを嵌めてやれ」

倉三が投げ出した革製の幅の広い手錠をうつぶせに投げ出した両手に、嵌められると、それは天井から下がっている一本のロープに繋がれて、ぐいぐいと引き上げられた。

まず両腕が万歳をするような恰好で浮上り、そのまま腕ずいた姿になり、やがてそのロープを通された滑車の下へ、たたらを踏んで移動すると、ぎりぎり一ぱい爪先立つまで、引き上げられた。

「いいか、俺達を甘く見やがつて、簡単に逃げられてたまるけえ」

倉三は舞台の役者が、大見得を切るように云って、繁次の持っていた鞭を取り柄の方を先にすると、それを勢一杯、吊上られた軀に受けるものと、観念して、じっと首を垂れて目を瞑っている梶子の脇腹に、まるで、めり込ますような勢で突き立てた。

「うっ、うっ」

倉三の意外な責め方に、ぐうんと、咽喉を一杯に張って、のけぞる梶子の腹部の弾力を、なおも楽しむように改めて突き立てると、今度は所を変えて、あたり構わず突き立て初めた。

「あゝ、あゝ」

身をよじって苦しむ梶子の腹部には忽ち判を押したような赤い斑点が一杯に浮上った。

「団長、それより早く女が行先を吐かせませんか……」

「あ、そうだったな。やい、他の女はどこへ逃げやがった。お前達は、ちゃんと行先が打合せてあったのに違い無いんだ」

千切れるような脇の痛さに早や全身、油汗にまみれながら、顔をのけぞらせて大きく息をついている梶子の髪をぐいと掴んで倉三は自分の方に向けた。

「さあ早く云え」

返事のしようがない梶子は、髪の痛さに目を引き吊らせながら思わず微かに首を横に振ると、

「何、知らねえ。こいつめ、とぼけやがって。なめるねえっ」

芝居とも思えぬ、すごんだ形相になった倉三は、

「繁次、もう一尺ばかり吊るせ」

「へえい」

「あゝ、あゝ」

苦悶とともに、目の高さに浮上った梶子めがけて、

「さあ、お前が白状するか、俺がくたびれるかの根くらべだぞ」

倉三が、びゅんと鞭を唸らした。

それは一昨日、やっとの事で史郎から受けた鞭と違って、梶子にとっては何年振りかの、云わば本鞭と云える強烈なものであった。初回のそれを、先程さんざん突立て、さいなまれた、脇腹に受けた梶子は

「ひいー」

ここで初めて本格的な悲鳴をあげ、釣りあげられた魚のように、びくんびくんと身をふるわした。

「何を大層に音をあげやがって、そらっ」

倉三の顔は機械のように正確で非情だった。

梶子の悲鳴と苦悶を楽しむかのように一定の間を置き、まず胸、腹、股と、みるみる朱に染めてしまうと、背中へ脇腹へと位置を変り、一寸の肌にも鞭をあてずには、おかぬような残酷さであった。

やがて、正確にあげていた梶子の悲鳴が小さく途切れ勝ちになり、その体が皮を剥がれた獣のようになると、

「ちく生め、どこまで図太い奴だ。繁次、馬を持って来い」

繁次が部屋の一隅に飛ぶと、倉三は、滑車をきしませ梶子を自分の頭上まで吊り上げた。

「団長、これでしよう？」

がらがらと音をたて、繁次が曳き出して来た馬と云うのは、四方に小さな車のついた台の上に鋭い角を持った三角形の横木が、五尺ばかりの高さに平行してすえられているものであった。

「おう、此の下へ持って来な」

柩子は自分の真下に置かれた、それを目がけて、するするすると下ろされ掛けると、慄然とした。

「こらっ、足を開かんか。それに跨がるんだ」

縄のように身体をよじって振り、必死になってそれを防ごうとする柩子の両足を倉三は情容赦のない手でぐいと引き剥がした。

「繁次、早く降ろせ」

「止めてっ、止めてっ。嫌です」

あまりの恐しさに今は自由になる口だけで哀願する柩子にかまわず、ロープは緩められて、ざらっとした木肌とその鋭い角へ、柩子は跨がらされた。

「あっ、止めて、止めて止めて」

今は、もう肉体的な苦痛や恐怖に狂気のように昏乱する柩子の両手が、ロープの緩むに従って頭をかかえたようになった。

「痛っ痛っ、降して、降して、もう許して」

苦痛と屈辱に引きつった顔を駄々っ子のようにふって、全体重を横木に預け切って、上半身が傾きかけると、倉三はそれまで中腰になって掴んでいた柩子の足首を短かいロープでつないで、それに足を掛け、

「そらっ、しっかりしろ、落ちるじやないか。馬に乗ってるんだ。」

「しっかり跨がってるんだぞ」

汗みどろな、柩子の上半身に、繁次の振る鞭が、うなりをあげて巻きついた。

「ひいっゝゝゝ」

「殺してもいい奴だ。うたうまで痛めてやれ」

「へいっ」

息を吸い込んだ繁次の力まかせの鞭を、背に胸に腹に容赦なく受ける柩子の悲鳴が、段々と小さくなり、途切れがちになると、倉三は、足首のロープのわをゆさぶって、そして何度目かに

「ほら、しっかりしねえか。そう簡単には、うたわさねえぞ」

思いきりそれを踏ん張られると、精根つきた柩子は、がっくりと前のめりに倒れ、途中で吊られ、両手を持ち上げたなり、動かなくなっていました。

「ちえっ」と倉三は舌打ちして、

「もう参りやがって……まあいいや、後の仕事がやりやすい。繁次降ろせ」

倉三に指示された繁次が、柩子の汗と脂を思い切り吸った忌まわしい木馬を片側に押しやると、続いて曳き出して来たのは丸い台の上に五尺ばかり、大の字形をした礎柱が逆に立てられているもので全体が鉄製らしく、銀色の塗料が施されてあって、眩しいばかりに光っていた。ごろん、とそれが倒されると、二人に手足を取られてその上に寝かされた柩子は、じいんと背筋を走る鉄の冷たさに、ようやく意識を取り戻した。なにをされているのか、まだはっきりとは判らぬまま、

「ああ」と呻きながら、忽ち柱についている尾錠の付いたベルトで要所々々を、しっかり縛りつけられた。

「ほらっ」と二人の掛声と共に柱は起こされて、柩子の全身の血は一時に逆流を開始して、それがかえって柩子の意識をはっきりとさせた。しっかりと柱に固定されているとは云っても、やはり軀は少しずり落ちて、柩子の脳天はその重みを受けて、自分を支えている丸い台と激しく押し合って、当然、それに負けて、柩子は首がめり込

みそうに思えた。せめて床と水平に伸ばして縛られた両手の自由が欲しかった。

「くくくく」と喰いしばった梶子の唇が切れて、真赤な血が一筋つうと上唇から鼻筋へかけて流れると固く閉ざされた目頭に一たん落着き、やがてそこを溢れて梶子の白く広い額を一気に横切って鮮やかに染めた。

銀色に輝く奇怪な柱に逆かさにされて大の字に磔けられたさまは梶子が十分すぎる程美しいだけに、なんとも云いようの無い凄惨な眺めであった。それだけでも客達は、かたずを呑んで見入り、十分に堪能せしめると思えるのに、まだまだこの次に仕上げとも云うべきフィナーレが残されていた。

ごろごろと梶子は少し移動されて、丁度、部屋の中心に置かれると、一時の間を置いて倉三が云った。

「おい、しっかり目を開けて見るんだ。これが消えるまで白状しないと大変な事になるぞ。お前の軀が役に立たなくなるかも知れん。まあ、そうなるまでに、しっかり考えるんだな」

又もや残酷な科白で恐怖の追打をかけられた梶子が、真赤に血走って、ぼうと、かすんだ目を開けたが、つい目の前に倉三の足があって、彼の示しているものを見極めるのには、随分、目に無理をせねばならなかった。梶子は目を横にやって前方の鏡から辛じて、それを確かめる事が出来たが、果して、それが倉三の云うように、どう使われるのかは、ただちには察しようが無かった。

それは、そこから、あのガラスを爪で掻く音が、それに何倍かのものになって頭のしんへ、ぎりぎり突上ってくるような、やり切れない不快さと鈍痛を伴っていたが、梶子はもう悲鳴をあげる気力も

無く、わずかな呻きを洩したのみで、そのあまりにも、おぞましい行為を受けていた。

やがて、倉三はマッチをすり蠟燭に火をつけた。じじじ……と、しんが鳴って、とけた蠟がそれに昇ると、ゆらりと焰が大きくゆらいた。それは、間もなく梶子の肌を存分に嘗める蠟涙を思わせて嗜虐きわまりない情景を添えると、倉三は満足気に繁次とうなづきあい、元来た方から部屋を出ていった。

そして、これも倉三の仕事か、部屋中の照明が一斉に消されると周りの鏡は全部、ただのガラスのようにすけて、その周りに、ひしめき合っている客の姿が忽然と浮上って見えた。

梶子の置かれた部屋は丁度、広いホールの真中に置かれてあるガラス箱のようなものであって、このような特別の見世物が開演されると、その周りにテーブルや椅子が用意され、客達は好みの酒を呑み煙草を吸いして、自由に見物出来るようになっていたのであった。

だが梶子には、そんな事に今更、感情を乱される余裕などなくて息つく間も無い程に攻撃してくる焼けつくような苦痛に責めさいなまれていた。

その頃、控えの部屋で倉三と繁次の二人は、普段の服装にかえて、支配人の心づけらしいウイスキーを、うまそうに呑んでいたが倉三は思案に余ったように云った。

「繁次よ、俺は、あの女を離すのが辛いよ」

繁次は、へえーと云った顔になって、

「それじゃあ、兄貴は約束通り明日、あの女を帰すつもりなんですかい？」

「しようがないよ。いくら以前は俺の女だったにしても、今は、れ

つきとした堅気の亭主持ちだ。無理に引つ摺ったりしても、警察なんぞへ届けられたりすると厄介だしな。それもな、初めの裡は、無理にでも一、二度、俺の流儀で、かわいがってやりや、満更あいつもよりが戻せねえものでも無いと思っていんだ。ところがよ、ちゃんと俺の流儀を亭主に仕込んでやる。きのう裸にした時、それを見付けた時にや、がっかりしたぜ」

倉三は次第に伝法な口調になり、やけにウイスキーをあふった。

「毎夜、どんな手で楽しんでやるか、妬けてならねえが、しようがねえや。明日にや、すつとんで帰りゃがるぜ」

「兄貴にしては珍らしく、あきらめのいい事ですが、もし帰らないと云ったら、どうします」

「そりや、願ったりかなったりだが、今云ったように、そんなことは云いっこねえよ」

繁次は、こすずるい笑いを浮かべながら、倉三を、からかうような調子で云った。

「少し位、泣かしても、かまわねえんだったら、女の方からそう云わせる方法がなくもねえんですがね」

「そりやあ、本当かよ」

流石に倉三は喜悦に相どうを崩したが、すぐには、それを受取りかねて、

「お前にしちゃあ、うますぎる話だが、どうだ、やって見ねえか。ああは云ったが、出来る事なら旅につれて行きたいんだ」

繁次は珍らしく弱気に頼み込まれて、益々得意な顔になった。

「お世話になった兄貴の事です。そう頼まれなかったって、こっちから兄貴に教えた位ですよ。なに格別これって、やらなくても、明日のショーに一寸、おまけをつけりゃあ、いいんですよ」

「おまけ？」

「おまけと云っても、兄貴はなにもしなくても云いんです。おいらの腕を少しばかり……」

繁次がこれから、そのおまけなるものの説明にかかろうとした時部屋の隅で、ブーブとブザーが鳴った。

「おっとショーの終りだ。繁次、あとで、とっくりその話つてのを聞かせてくれ。さきに、あいつの火を消してやらないと、とんだ事になる」

倉三はうわずった調子で繁次を促がし立ち上がった。

一寸あまりに、せまった焰と絶え間なくしたり出した蠟涙に地獄のような責苦を受けていた梃子は、ようやく現われた二人に、それから解放された。そのままぐったり軟体動物のように崩れた軀を抱かえられて、倉三の部屋を通り越して、つい向いの小さな部屋のベッドに置かれると、泥のような眠りにおち入った。(次号へ続く)

ジャツとパンツが一つに続いたコンビネーションという下着がある。アメリカでは

ユニオンスーツと呼んでいるらしい。私は今、クレープのコンビネーション一枚の姿

でこの文を書いている。子供の頃はずっとコンビネーションを着せられていたが、これほど不都合な下着はないように思えた。上から下まで一つずきで被っ

ているのに、カンジンの隠すべきところはバックリ口をあけているのだから、男の子にとっては下になにもはいっていないのと同じことである。しかも、この上にパンツを

重ねることは許してもらえなかったのも、いつもじかに半ズボン一つという姿をさせられていた。

始めてはすかしい思いをしたのは小学校の二年生のときである。突然、身体検査があり、私はコンビネーションの上にチョッキとズボンをボタンでつないだものを着ていたので、どうしても上半身だけをぬぐことができない。チョッキを取ればズボンは落ちてしまい、その上、コンビネーションというのが、また上をぬげば下もぬげてしまうというわけで、裸で身体検査を受けた。身体検査は講堂で行われたから、同級の者だけでなく、全校生徒の前でハズかしい思いをさせられ、涙が出そうだった。

また体操のときには、シャツとパンツになるようにいわれた。コンビネーションの私はそうするわけにもいかなかったので、そのままオロオロしているところを、当時の厳格だった先生に叱られ、皆が並んでいる前でぬがされてしまったが、真赤になって前を手で隠してみたものの、後がパクパクあいていたのでは話にもならず、以後、私だけは半ズボン着用を許されたものである。



コンビネーションと灸

<告白>

高橋五六

コンビネーションの後ろの割れ目は、どういうものかウェストの位置よりも余程上のはうから始まっているので、パンツやズボンをはいても、あきの重なりが必ず上のほうに出るので、コンビネーションを着ている（はいている）ことははっきり分るものである。

したがっていつも肩身のせまい思いをしていたし、担任の先生がかわる度、身体検査がある毎に醜態をさらしていた。

小学校の高学年になる迄ときどき寝小便をしたので、灸師のところへ連れていかれ、腹と腰に生れてはじめての灸をすえられた。コンビネーションの割れ目をひろげて四ツん這いになり、灸をすえられるさまは熱いのと同時にはずかしさで、からだ中がほてるようであった。

風呂は専ら銭湯を利用していたが、コンビネーションをぬぎ着するのがはずかしかった。特に学友に見られないように注意しなるべく上に着たものと重ねてぬぎ着るようになっていた。この方法もぬぐときはうまく行くが、着るほうはなかなか成功しなかった。コンビネーションをぬぐと、たちまち点々と、黒い、或いは赤むけになった灸のあとが現われるのははずかしく、すっかり風呂嫌いになってしまった。

年うつり、今ではコンビネーションを強制する者はいない。あれほど嫌だったコンビネーションもむしろなつかしく、夏はクレープの、冬はメリヤスのを愛用している。コンビネーションの上に、じかにオーバーールを着るのも楽しいものである。

（おわり）



雄^{ゆう} 禪^{こん} 莊^{そう} 奇^き 譚^{たん}

青 植 村 奏
木 審 画

—

終戦から一年経っていたが、鎌倉の海岸には海水浴場らしい設備もなく、波打際に戯れている男女は派手な水着の進駐軍関係の外国人が多かった。

海を見下す別荘地帯の白く乾いた道を、ニッカーを穿き、サングラスをかけた肩巾の広い男が歩いてきたが、一軒の建物の前でピタリと足を止めた。石の塀をめぐるしたその家は和洋折衷のかなり大きな構えだが、妙に古びた感じなのは、雨戸が閉めきられたままで

人の住む気配がないせいかもしれない。

「アア、ちよっと——この別荘はいま人がいないんでしょうか？」

男は通りかかった中年の女に声をかけた。

言葉は丁寧だが、^{「蘭屋」}のような男の風態に、女は一瞬、警戒心をみせたものの、

「サア、よくは知りませんが、別荘番の人がいるようですよ」

と世間馴れた笑顔をつくって答え、足早やにたち去った。

男が門柱にとりつけられた呼鈴の鉦を押すと、くぐりが開いて四十前後の男が顔をだし

た。

「別荘番の方ですか？」

「ええ、まア、この家の管理を委せられている者ですが——何か……？」

「いまこの別荘は空いているようですが、売るか貸すかはなさるんでしょうかね？」

「売りはしませんが、貸すのならご相談にのらないでもありません」

「謝礼は充分にします。相場の三倍ぐらいはだしてもかまいません」

「あなたがお使いになるので——？」

「ええ、商買上の取引に使用します。期間は

二カ月。実は秘密を要する仕事なんでね、あなたにも特別に色をつけるつもりです」

別荘の持主である加納未亡人は肝臓病で入院したきりだった。彼女は半年ほど前から別荘を処分したい意向をもっていたが、管理を委せられている沢口は売り急いでは足許をみられるからと、一日延ばしにしていたのだ。それはもったもな理由には違いなかったが、彼の真意は、できることならその建物を人手には渡しなくなかったのである。いや、もっとはっきり云うならば、沢口は、金さえあったら自分が買いたいと思っていたのだった。

突然の来訪者がもちだした交渉の条件に、沢口が心を動かしたのは、勿論、金だった。何かは判らぬが、商売というのはどうせ非法な手段にきまっている。万一、警察ざたにでもなった場合は、まきぞえをくう惧れはあるが、その危険よりも、うまくいけば相当額の金をひきだせる計算のほうが、沢口の脳を占有した。

「とにかく中を見ていただきますよう」

沢口はそう云って首をひっこめ、男が入ってくるのを待った。

男は窮屈そうにくぐりから軀を入れると、

「ホウ、庭もなかなか立派ですなア」

と暫く立ち止まっていたが、

「家を見せてもらいう前に汗を拭きたいんだが。炎天を歩いてきたんでこのとおりだ」

「どうぞ、どうぞ。そこのテラスの横に水道がでていますから——」

「かまわなかね。裸になっても——？」

「かまいませんとも。私とあなた以外には誰もいないんです」

「失敬するよ」

男が着ているものを脱ぎだすと、沢口はタオルをとり奥へいったが、戻ってみると男はすっかり裸になっていた。沢口が思わず眼を瞠ったのは、筋肉の隆起した男の裸体の見事さにでもあったが、それよりもきりたての晒を固く締めこんだ六尺襦の白さに、軽い驚きを感じたからだだった。

「どうかしましたか？」

「イヤ、別に……」

沢口は周章でタオルを渡すと眼を逸らしたが、不思議な因縁のようなものが彼の心を支配しはじめていた。

男は裸になってもサングラスをはずさないので、容貌から年令は判断し難かったが、浅黒い皮膚には若々しい張りがあり、三十に

はなっていないように思われた。

屈託なげに固く絞ったタオルで汗を拭いている男を見ていると、犯罪者の臭いのする得体の知れぬ青年ながら、沢口は彼に対して次第に一種の親近感さえ抱いてくるのだった。

「何か着替えを持ってきましょう」

「いや、もしさしつかえなければ、私はこのままでいいんだが……」

「そうですか。暑いからそのほうがいいかもしれません。それに、この家には相応しくもありますからね」

「と云うと——？」

「いまに判りますよ。では玄関を開けましょう」

広い玄関の敷台に上ると、正面に高く扁額が掛かっており、墨痕鮮かに「雄輝」と書かれてある。よく見たが「雄輝」ではなく、輝、という字だった。

「へえ……。珍らしい書だな」

男がマジマジと見上げると、

「この建物は、かつて、雄輝荘」と呼ばれていたんです」

と沢口が感慨無量の面持で説明する。

「雄輝荘、ねエ……。何か輝にでも因んでつけたんですか？」

「そのとおりです。そして、この家には輝にまつわる数々の物語があるんですが、それは後でゆっくりお話しするとして、とにかく一通り見ていただきましょうか——」

玄関わきの洋館は一間きりだが、二十畳はある広さで、厚い絨氈や重々しい椅子・卓子の類が往時の豪奢な生活を偲ばせた。しかしそれらの調度よりも、部屋へ入ってまず眼をひくのは、暖炉の上に掛かった八十号ほどの油絵である。見た瞬間にミケランジェロの絵を思いだす逞しい男の裸像だが、よく見ると頭には軍帽をいただき、腰にはまがいもなく六尺輝が締められている。軍刀を前に支え自然に脚を開いて立ったポーズは、巧まぬうちに毅然たる武人の姿を表わしてあまりあった。その裸体画は勇壮・果斷・清廉等の軍人精神を象徴したものと想われたが、写実的な技法で描かれた軍人の典型ともいえるその貌は、何人かの肖像かとも思われた。

「その絵の方は、この別荘の持主だったいまは亡き加納少将です。ご存じかもしれませんが、陸軍省の要職にあった方で、武人という言葉がぴったりとしたそりゃア立派な将官でした……」

沢口はそう云うと深い歎息を洩らしたが、

男も感にたえぬ様子で大きく頷いた。

日本建築の母屋は、階下が十畳の二間続きに小部屋・浴室等があり、二階は八畳・六畳にしきられた部屋が三つあった。日本間はすべて簡素に造作されているが、相当に吟味した材料が使われているらしいことは素人目にも判った。

「これだけの広さは必要じゃない。とりあえず洋間を事務所にしで、あとは寢室に二階を一間、使わせてもらいましょうか」

男はもう借りると決まったようにそう云ったが、沢口にとっても、もはや異存はなかった。

洋間に戻った男は、思ひだしたようにテラスに脱ぎすてたままのズボンから紙幣束を掻みだしたが、そんな無造作さにも大きな金を動かしているらしいことが想像されて、沢口はすっかり男を信用してしまった。

改めて契約が成立すると、男は、はじめて「川上」と名のつた。

充分すぎる手金を受けとった沢口は上機嫌で、

「話が決まったら、今日はゆっくりしていただきましょうか。お口には合いますまいが酒の用意もあります。それにお聞かせし

たい話もあるんですよ」

と気ぜわしく台所へ入ると、何かコトコトとやりはじめた。

川上は安楽椅子にもたれ、煙草に火を点けると、仕事の手順でもたてているのかジッと考えこんだが、サンガラスをかけたままなのでその表情は判らない。

暫くして入口に現れた沢口は、

「いかがですか。先に一風呂浴びては。もうソロソロ沸く頃です。ご案内しましょう」

と廊下から声をかける。

「恐縮ですな」

沢口の後についていくと、案内された浴室は白一色のタイル張りで、内風呂にしては相応しからぬ大きさだった。透明な湯を湛えた浴槽は五、六人が一度に浸かれそうだし、流し場もかなりの広さだ。

まだ輝一本でいた川上は、手間もとらずに浴室へ入ったが、サンガラスは依然としてはずさない。それはいかにも異様で滑稽だったが、秘密をもつ人物ならあくまでも顔は見られたくないのだろうと思い、沢口は見えて見ぬふりをしていた。

「お流ししましょう」

少し遅れて浴室へ入ってきた沢口は、上半

身にはランニングシャツを着けていたが、下は六尺禪だけになっていた。色が黒く背は低いが、胸板は厚くガッシリした体軀である。

川上は沢口の禪を見てもまるで無関心で、ザブッと舌暴に浴槽をでた。

沢口は、川上の巾広い背に石鹼の泡をたてながら、

「あの当時、ピチピチした若い将校達が、四五人、一度に入浴して、ときには酔ったまぎれにふざけ合っていたさまなど、こうしていると眼に浮かぶようです。そうそう、一人飄々な中尉がいましたね。風呂へ入るときは『オイッ、当番兵。流しを頼むぞ』ときまって私を呼びつけ、背中だけでなく、赤ん坊みたいに背中を洗わせるんです。ええ、その頃から私は『雄禪莊』の下男みたいにして皆さんのお世わをしてきました。陸軍上等兵でしたが現役ではありません。加納家の女中頭の遠縁だったため、こちらへご奉公にあがったんですが、そのおかげで赤紙の心配もなく、いまもこうして無事にいられるのを本当にありがたいと思っていますよ」

と問わず語りに話す。川上は聞いているのかい、頷きもせず、軽く眼を閉じていた。



二

「失敬ついでにこのままいさしてもらおうよ」
風呂からあがった川上は禪姿で席につき、
沢口の用意した酒肴に遠慮なく手をつけた。

「川上さん。もしあなたの頭が五分刈りで、そのサングラスがなかったら、あの頃そっくりなんですがね。そうだ。私も失礼して禪一本にならしてもらいますよ。そのほうが話に興がのろうというものだ」

相伴の酒で早くも酔がまわったのか、沢口は自分も裸になった。頭は短く刈っているから、いくらか年をとったというだけで、彼のほうは、本当に当時のままといっているう。

加納少将は若い頃から六尺禪を愛用し、一部の者の間には、「軍人はすべから六尺禪を締めるべし」との提唱者として知られていた。彼の持論を要約すれば「六尺禪は、見た眼に男性的で美しく、その爽快な緊縛感（きんばくかん）は、自ずから武士道精神の涵養に役立つ」というのだった。

加納少将を「変人」として嘲笑う者があったのは当然かもしれないが、一方、共鳴者も少くなかった。殊に、陸士出の青年将校の間には人気があり、加納少将を中心にして「雄禪会」が生まれるにいたったのである。少将は自分の別荘を「雄禪荘」と名づけて開放し、会員相互の親睦をはかった。会合は定期的ではなかったし、全員が集まることには制約もあったが、それでも、十名前後の出席者は必ずあった。

会員の資格として六尺禪を常用することは勿論だが、会の席上、というよりは、雄禪荘の中では季節を問わず、いついかなるときで

も禪一本の裸体でいなければならない規則だった。将校達は玄關で脱衣し、都合で泊る場合でも、帰るまでは絶対に着衣を許されない。雄禪荘の管理その他、雑用の一切を委せられていた沢口上等兵も、集会の日には禪姿で仕事をするように命じられていた。

陸士出の将校なら誰でも強健な身体をもっている。だが、いわば互いの体軀を見せ合う「雄禪会」の将校達は、しらずしらずに対抗意識をいだき、いやがうえにも己の軀を鍛えようと、日夜錬磨に励むのだった。そうして男性美を誇る男達が裸体で一堂に会するのだから、その見事さは壯観というよりほかなかった。

中でも仁礼大尉の体格は抜群で、風にそよぐばかりの豊かな胸毛がさらに花を添えていた。彼はまた剣舞の名手で、同期の関根大尉の朗々たる詩吟とのコンビは勇壮の一語に尽き、喝采を惜しむ者はなかった。

集会は酒を飲むだけが目的ではない。庭前の芝生で相撲もやれば、剣道の試合も行われる。夏は海にでて遠泳もやり、冬は特に寒稽古と称して、みそぎや寒中水泳の行事もあった。

「申又は云わずもがな、同じ禪でも越中禪な

どは、ただ男の軀を覆うだけのものだ。それにひきかえ強く圧迫して締める六尺禪は、男性の貞操帯とも云えるものだ。節操の固さは尚武の気風にも通ずるし、殊に若い連中には望ましいと思うが――」

部内の高官達の集まる席上で、加納少将はそんな言葉を洩らしたことがある。いくらアルコールが入っていたし、「六尺禪貞操帯論」は大方の失笑を買ったが、事実「雄禪会」の青年将校達の中には、不思議なくらい女色を好む者はなかった。それは一つには「雄禪会」が彼等の若いエネルギーを適度に発散させてくれたからでもあったろうし、武士道にならって女色を恥とする者も少くなかったのだ。

しかし、軍人とはいえ人間である以上、ときに愛情の対象を求めることがあっても、それはむしろ自然である。

後輩である美貌の少尉をめぐるの、恋の鞘あてならぬ、友情の争奪もあった。その日は加納少将が遅れて出席したために、遠藤大尉と野崎中尉は、あわや真剣勝負となりかけたが、駆けつけた少将の一喝でことなきを得まもなく野崎中尉の転属で落着いたかたちとなった。

問題を起こさぬ限りにおいて、会員同士の

友情は、たとえ度の過ぎたものであっても公然と認められていたし、加納少将も雄禪莊に泊まるときなど、特定の士官を呼んで夜の無聊を慰めることがあった。

明け放った広縁から、すがすがしい夜気が流れこんでくる。庭には白いさつきが満開の花をつけていた。十畳二間をぶっとおした座敷では宴が酣だった。

「オイ、そろそろ仁礼の十八番がでてもいい頃だな」

加納少将が誘いをかけるように云うと、

「では、ご指命によりまして——」と立ち上った仁礼大尉が、

「沢口。俺の軍刀を持ってこい」

そう叫んで前にでる。

そこまでは、いままでと少しも変らなかった。皆が（オヤ？）と思ったのは、当然、詩吟役である関根大尉がブイと坐を立ったからだ。

「関根。どうしたんだ？」

と誰かが声をかけたが、大尉は固い表情でものも云わず席をはずしてしまった。

「おかしな奴だな——オイ、誰か代りをやれ」

少将の声で、仁礼大尉は末席にいた里見少

尉に眼を当てた。里見は一瞬躊躇うふうだったが、すぐに立ち、呼吸を整えるために胸を張った。

ただ独り洋間の椅子に頭をもたせて、凝々と天井をみつめている関根大尉を見つけた沢口は、心配そうに、

「大尉殿。ご気分でも悪いのでは……？」

「うん。イヤ、大したことはない。それより

沢口。ウキスキーがあったな」

「はい。あるにはありますが——」

「持ってきてくれんか」

「でも、大丈夫でありますか？」

「持ってこい。命令だ！」

不意に荒くなった関根の語氣に、沢口は慌ててグラスを運んできた。

「氣の利かん奴だな。そんな小さなものでなく壺ごと持ってくるんだ。早くしろ」

「はい。ただいま——」

沢口がおそろおそろ角壺をさしだすと、関根大尉はグイグイと四、五杯、続けてあおりフウツと熱い息を吐いた。

「オイ、剣舞は終わったか？」

「はい。終わったようです」

「よし。それなら、仁礼にここへくるように云ってくれ」

不安そうに沢口がでいくと、まもなく活発な発音がして仁礼大尉が入ってきた。

「どうした？心配したぞ」

「フン。まあ、かけろ」

「何か俺に用か？」

「どうだ？ウキスキー」

「イヤ、俺はいらん」

「フフ、俺が相手じゃさぞまずからうかな」

「何を云いたいんだ？貴様」

「仁礼。俺が今夜なぜ詩吟をやめたか判るか？」

「判らん。なぜだ？」

「とぼけるな！」

関根大尉の声は針を含んでいる。血走った眼は、発条がしこんであるようだと言った誰かの評した仁礼大尉の禪に注がれた。六尺禪は同じように締めても、人によって微妙な差異がある。仁礼大尉の禪の魅力は、それが肉体的条件に負うところが多いことを知ってはいながら、いやそれだけにおののこ、羨望と賞讃の眼で見ない者はなかった。

「貴様。酔ってるな」

「ああ、酔っている。だが氣は確かだ。おい仁礼。俺が盲だと思ったら大違いだぞ」

「……」

「里見少尉のことだ」

「里見か。あいつのことなら、一度貴様にゆつくり話そうと思ってたんだ」

「フン、俺の了解を得るためにか」

「とにかく改めてよく話し合おう」

「逃げる気だな、貴様」

「今夜はもう遅い。貴様も泊まるんだろ。二階へ一緒に寝ないか？」

「俺は階下へ寝るよ。ザコ寝でたくさんだ。それより里見を連れていったらどうだ？」

「里見は帰ったよ。じゃ、おやすみ」

遠藤大尉と野崎中尉の先例もあるので、悪いと知りつつ扉の外で様子を伺っていた沢口は、仁礼大尉の平静な顔色を見るとホッと胸をなでおろした。

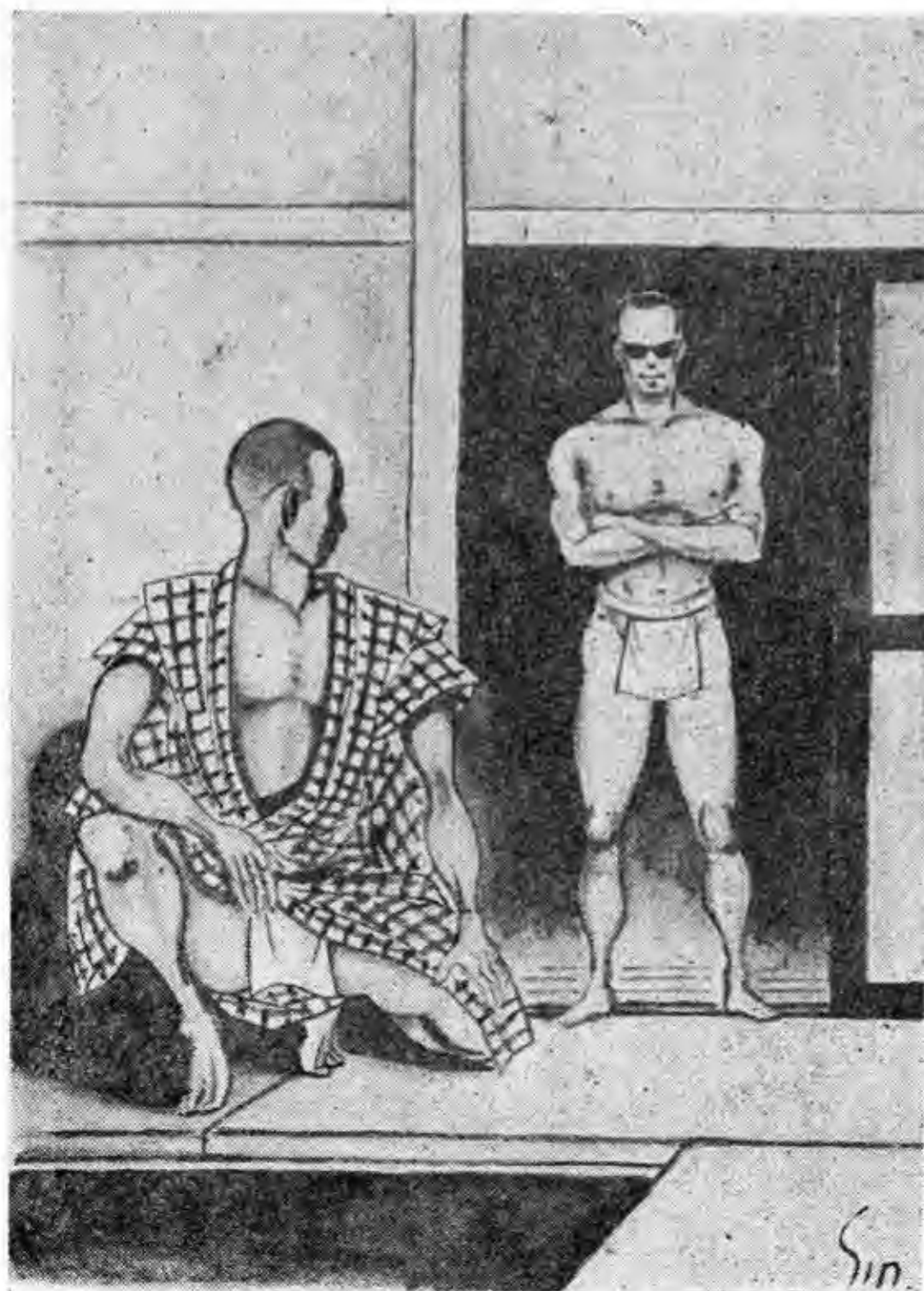
その夜、雄輝荘に泊った者は、沢口を別に、全部で九人の将校だった。ところが翌朝になってみると、二人の姿が消えていたのである。仁礼大尉と関根大尉だ。二階の八畳に加納少将が疲れたからといって独りで寝、隣の六畳に仁礼大尉がこれも独りで寝た。もう一部屋には二人の大尉が寝ていたが、仁礼大尉が部屋をでたのには誰も気づかなかった。それはまあしかたがないとしても、階下

に一人の中尉と三人の少尉に混じってザコ寝した関根大尉のことは、誰か知っていてもよさそうなものだが、皆よく眠っていたとみえてやはり駄目だった。

仁礼と関根。それに里見。彼等の関係をうすうす感じていた者は眉をひそめたが不幸

にも予感とは適中してしまった。

念のためにと海岸へ探しにでた三人の少尉が、無慙な死体となった関根大尉を発見したのである。死因は溺死とみられ、輝一つの死体は右手に一本の六尺輝を固く握っていた。その輝が仁礼大尉のものかどうかは明白でな



いとしても、関根が仁礼を道連れにした無理心中の結末だという推測は、もうほとんど事実として誰をも領かせた。浜にはボートをだした形跡があり、おそらくは沖にでて入水したものが、どうした加減か関根だけが浜に流れつき、仁礼のほうは遠く洋上にもっていかれたのだろう。仁礼大尉の死体はついに発見されず、彼等個人の名誉よりもっと大きな名誉のために、事件は闇から闇に葬られ、雄輝会の将校達ですら、やがて忘れていった。

大平洋戦争の推移につれて、雄輝荘に出入りする士官の顔ぶれも変り、やがて敗戦となるや、沢口ただ独りが残されたのである。

三

「ああ、すっかりお喋りをしてしまいました。ついぞこんな話はしたことがないんですが、あなたの六尺輝を見たせいかもしれません。オヤ、お寝みになったんですか?……」

川上は椅子にもたれたまま姿勢は崩していない。サングラスで眼が見えないから気がつかなかったが、いつのまにか眠っていたらしく、微かな寝息をたてている。

(悪党らしくもなく、たわいなし——)
苦笑すると沢口は、二階へ寢床を調えるた

めにソツと席を立った。

酔いつぶれてしまったかたちの川上を担ぐようにして二階へ運ぶと、布団の上へ大の字になるなり、すぐまた寝息をたてはじめたのを暫く見下していた沢口は、ツト手をのぼしかけたのをやめ、それでも心が残るようにふりかえりながら部屋をでた。

自分も床へ入ったが、沢口はなかなか寝つかれない。馴れている筈の波の音が耳につくのは神経が昂っているからだろうか。いつになくあんな話をしたことが後悔される。もっともあの男はろくに聞いてはいなかったらしいが。それにしてもあの男はいい軀をしているな。六尺輝の締めかたも身についている。そんなことを考えているうちに、沢口はどうともしたらしい。そして何かの物音にハッと目を醒ました。確かに廊下を踏む登音だ。

「川上さんですか?」

呼んでみたが答えはない。

沢口はガバと跳ね起きると障子を開けた。人影はないが、いま何者かが部屋の前の廊下を歩いていったに違いない気配を夢だったとは思えなかった。川上が便所へいくのなら、沢口の部屋の前は通らない筈だ。しかし、は

じめての家ではあるし、寝ぼけて間違えることだってある。沢口は自分も用を足すふりをして便所へ行ってみたが、川上の姿はない。思いきって二階へ上ってみると、寢床はもぬけのからで、そこにも川上を見いだすことはできなかった。

急に不安になった沢口は、

「川上さん!」と大声で叫んだ。川上が家の中のどこかにいるなら当然、聞えていい声だが、やはり返事はなかった。

何かが起こったのか?それとも起ろうとしているのか?

沢口は見えない影に怯えるように二階から駆け下りると、納戸を開け電灯を点けた。三〇ワットの電球が弱い光を放つ。沢口は何を思ったかいきなり畳をあげ、床板をはずそうとした。

「何をしているんだね?」

突然そう云って現れたのは川上である。彼は輝姿で入口に立ち、サングラス越しに黙ってこっちを眺めているのだ。

「ああ川上さん! いったいどこへ行ってたんです? 心配させるじゃありませんか」

「川上? そうか、俺はそう名のついていたんだっけナ」

「……？」

「沢口。俺を見忘れたかね？山上だよ」

そう云って男はゆっくりとサングラスをは
ずした。

「あッ、山上大尉！……」

沢口の面が、みるみる蒼白になる。

「フフフ、やっと判ったようだね」

「大尉殿。ど、どうしてここへ？」

「雄禪莊が懐しかったからさ。いや、仁礼大
尉が懐しかったからと云ったほうがいい」

「仁礼大尉……」

「仁礼を好きだったのは、関根や里見ばかり
じゃない。俺も彼が好きだった。それから、
沢口。おまえもな」

「自分が？と、とんでもありません。自分な
ど、とても！第一、仁礼大尉殿が自分などを
相手にされる筈がありません」

「もっとハッキリ云おう。俺は心中事件の真
相を究明するためにやってきたんだ」

「……！」

「おまえは、とうとう畏にかかったな。もう
いくらしらをきいても駄目だ。その床下を調
べれば、おまえの罪状は明白になる」

「畜生……」

力なく呟いた沢口は、へたへたと坐りこみ

ガックリと首を垂れた。

「事件の発見された前の晩、洋間の話をおま
えが立ち聞きしていたのを俺は偶然、見たの
だ。そのあと関根の様子が険悪だったので、
また決斗騒ぎでも起らねばよいかと案じてい
た。そこへあの事件だ。結局は無理心中とい
うことでけりがついたが、いくつかの疑問が
残った。その第一は、仁礼大尉の死体が見つ
からなかったことだ。第二には、泳ぎの達者
な二人が、入水という方法で簡単に死ぬるか
ということだ。しかし、あの当時は、情死と
いうことさえ伏されてしまったのだから、ま
して事件の究明などは許されなかった。その
うえ、まもなく俺には転属命令がきて外地へ
いってしまったのだ。それでも俺は事件を忘
れることができなかった。そして、とうとう
ある推論に到達するに至ったのだ。

沢口は、かねてから仁礼大尉を深く心に想
っていた。だが自分の相違からうちあけるこ
とはできない。そのためにいっそう想いは募
って、日夜悶々としていた。そこへあのチャ
ンスがきたのだ。大尉を独占するには彼を殺
すよりない。三角関係のもつれから関根がし
かけた無理心中と見せかければ、きつとうま
くいくだろう。沢口はまず仁礼の名を使って

関根を海岸におびきだし、隙をみて襲いかか
った。小兵ながら柔道にかけては沢口のほう
が上で、したたかに酒を飲んでいた関根は、
脆くも当身をくって倒れた。失神した関根を
ボートで沖に運んだ沢口は、関根の両脚をロ
ープで括り、左腕を胴につけてぐるぐると巻
き自由を奪っておいて活を入れると、気のつ
いたところを、すかさず海中に放りこんだ。
いくら泳ぎができてもこれではたまらない。
関根は自由の利く右手でむなく水をかくば
かり。沢口は頃あいをみて六尺禪を投げる。

関根の手が必死でそれを握む。しかし死は時
間の問題だ。沢口は、関根が死ぬと、その軀
に繋いでおいたロープを引き寄せて縛った手
足を解き、死体を流した。雄禪莊へ戻った沢
口は、今度は関根の名で仁礼を呼びだし、毒
殺して死体を納戸の床下に埋めたのだ。どう
だね？訂正する箇所があったら聞こうじゃな
いか」

首を垂れたまま黙って聞いていた沢口は、
静かに顔を上げると、

「山上大尉殿。自分にはもう何も申しあげる
必要がありません。すべてあなたの云われる
とおりです。ただこれだけは云わせてくださ
い。自分は心から仁礼大尉を愛していました

「……」

「うむ。それは判っている。だからこそ、刑事でもない俺に推理がたてられたんだ。しかし、俺は、本当はその推理が妄想であつてくれたらいいと、心のどこかで念じていた。いまになってみると、俺がここへきたことが果してよかったのか悪かったのか、判らなくなってくるよ」

山上は、さっきまでの調子とはまるで變つていた。沢口を八つ裂きにしても足らぬ奴と憎んでいたのに、不思議にも憎悪の感情は消えて、心が重く沈むばかりだった。

山上が黙ってたち去る気配に、沢口は愕いて、

「大尉殿。自分を警察へつきださないんでありますか？」

「その大尉殿はやめてくれ。もう軍隊はないんだ。——帰るよ」

「待ってください」

「俺は目的を果たした。もう用はない」

「しかし……」

失火の原因は判らなかつたが、焼け跡から別荘番の焼死体と身許不明の白骨死体が発見されたことも、人づてに聞いた。

山上が鎌倉にいてみると、そこにはもう何もなかった。僅かに残った土台の石も雑草に覆われ、虫の声だけがしていた。

山上は急に駆けだすと、一気に海岸への道を下った。夏の終った浜には人影もなく、波のうねりもくろずんでいる。

着ているものを乱暴に脱ぎすてた山上は、六尺襷一本になると、冷たい水にザンブと飛びこみ、沖へ向かい抜きでをきって泳ぎはじめた。

(完)

新装十月特大号目次【定価二四〇円】

色刷口絵「鏡を見てごらん」……四馬孝画
表紙裏「ニューファッション・モード」
「黒光りする拘束衣」……四馬孝画
扉「鉄枷と鎖の恐怖」……杉原虹児画
目次裏「風流いろは草紙」……佐保 忍
口絵「緊縛スタイル・ア・ラ・モード」
サイクリング。ノー・アンターウェア
——水着スタイル。ストップ・ルック。
オシメ・スタイル。……四馬孝画
「実写マゾヒスティック・ヌード」
肩車、懲しめ……本誌特写

「男性の自由を拘束する女」……米誌より
絵物語「暗黒集団」……四馬孝構成
女狩、捕獲、訊問、装束、検査、飼育
馴致、輸送
「緊縛艶姿五十態」
グラビヤ
慟哭、芳紀二十才の表情、女奴隷呻吟、
新人荷品第四号、豊饒鞭撻、放心と棄愧、
縋肌に紐結し。佳人鼻難、防声具と乳房賣
顔枷の装束、小町娘、諦観と観念、受縛の
初姿、テレビのある風景。
夜の畏……藤見 郁
女相撲と女斗美……雪崎京人

バスガールの運命……滝畑二郎
手帖雑誌欄と沼正三だより……沼正三
地底の女奴隷市……塔婆十郎
奴隷娘、悲しき十六才……赤沢英生
柳 魔……榎村 奏
哀れな女、秀緒の手記……藤山秀緒
淫蕩の棄恥にもたえて……山岸悠子
赤い羽根(須美子の告白)……須藤律夫
女性長靴フェチの二つの型
……一ノ瀬悦子
毎日こんなに淫蕩されてる
……川崎進一
宇宙のどこかで……佐治麻造

或る強盗事件……南 時天
夏から秋の縛り映画……東山映史
被虐の白い花……赤川道郎
マゾヒズム百景……馬場好男
曲馬団の訓練……白井 久
空しい情事……松井頼子
体験記 檻の時間……栗瀬 長
この足千四百万円……林 純夫
告白 女装の楽しみ……比良野裕
生贖裸女の喘ぎ……近藤 一
夕陽を染める乙女たち……藤山秀緒
マゾヒズム天国……田沼醜男



市隷女奴の地底

処刑の密室

塔婆十郎・作

四馬孝・画

私刑室の女

温泉ビル「宇宙会館」の経営者は、もと荒川組の組長、荒川勇造という男である。

荒川組というやくざの団体は、二年前に解散して、いまは存在していない。

しかし、この暴力団はそっくり「城東興業株式会社」という会社組織に形を変えて、親分は社長に、子分たちは社員という名に昇格して実在している。

京介と美加が、地下の地獄から脱出する打ち合わせを語りあっているとき、その荒川社長は、同じ地下二階にある一室で、一人の女に手ひどい私刑を加えていた。

その女とは——むろん、この女奴隷の監禁から逃走し、城東公園でトップ屋の京介に組織の真相を売ろうとした、ミドリである。

荒川社長の周囲には、四、五人の子分、いや社員たちがひかえていた。

床に横たわるミドリ一人に、険悪な視線をそそいでいる。この私刑室には、憎悪の気配がわだかまっていた。

ミドリの口から、秘密が洩れれば、この売春会社はたちまちにして当局の手入れを受けて潰滅してしまう。

この男たちしてみれば、眼に殺気を燃やすのも当然であった。

「——おい、ミドリ。大変なことをしてかしてくれたな。お前は城東公園の中で、あのブン屋に何をしゃべってくれたんだ」

荒川社長の声は低い。憤怒をおさえているのだ。

「あ、あたしは何もしゃべりませんでした」

ミドリの舌は、こわばっていた。恐怖のために、顔がゆがんでいる。

ミドリはいま、衣服をはがれ、両手と両足を麻縄で縛りあげられた姿だった。

男たちの足もとに、白い裸身が、まるい形になって虫のようにならずくまっている。

乳房が、そりかえってふるえている。むっくりと豊かな臀部は、いまミドリの四肢の中央に押しこめられていた。

というのは、両手両足を普通の形で縛られているのではないのだ。両腕はうしろに、そして両脚はこれも膝から下をうしろに折り曲げられている。そして両手首と両足首が、一つになってくくり合わされているのだ。

昔話にあるカチカチ山の狸の絵は、四肢を腹の前で一つにくぐられ、天井から吊り下がっているが、ミドリは逆に、腰骨のうしろで四肢がくくりつけられていた。

それだけではない。その腰のところで嚴重に縛り終えた結び目から、縄尻が良くのびて天井に届いている。コンクリートの天井に打ちこんである鉄の鉤に、長い縄尻はひっかけられ、そしてまた垂れ下がっているのだ。

つまり——。

この残酷なうしろ手縛りのまま、ミドリの身体を天井に吊り上げようというのだった。

「——さあ、どうだミドリ。いまのうちに白状しろ。もしあのブン屋にお前がよけいなことをしゃべったとしたら、おれたちはすぐに

あの男を探しだして殺さなければならぬからな」

荒川社長の声は、不気味に低かった。

そのブン屋が、顧客の特別会員に化けて、早くもこの地下の歓楽境にもぐりこんでいるのを、まだ彼は知らない。

「あたしは、なにもしゃべりません！」

ミドリの顔が、かすかにうごいた。病んだ犬のように、脅えた瞳だ。

「それなら、どうしてあんな公園の中で待ち合わせなんかしたんだ？……あの男とお前とは、どんな関係があるんだ？」

「それは……」

「フフフ……バカ女めが。おれたちもこの商売には命がけなんだ。

この商売の邪魔をしたり、おれたちの敵になった奴が、いままでにどんな目に逢っているか、お前も知らないはずはあるまい……」

荒川社長は、靴の先でミドリの顎のところを突いた。ミドリが顔をそむけると、つきには咽喉を踏んでおさえた。

「ゆるして下さい、ゆるして！……もう逃げたりなんかしませんから！」

ミドリは口を苦しげにあけて哀願する。

荒川社長の靴は、こんどは乳房の上を踏んづけた。

ミドリは手足を縮めて屈辱を耐える。

「いくら詫びても、もう遅いな。お前は一度逃げた。そのむくいを受けねばならない。掟だ。これからのみせしめのためにもな……」

荒川社長の瞳の底に、氷のようなトゲが生じた。

そして、子分の一人に顎の先をむけていった。

「岩下、はじめろ」

「へい」

岩下と呼ばれたのは、まるでプロレスラーのように、がっちりした体格の大男だった。

黒いズボンに黒いポロシャツを着ていて、胸板が厚く盛りあがり、腕の筋肉も赤黒くふとかった。こういう男が、こういう乱暴な仕事には役立つのだ。

「ミドリ、お前、まったくバカなことをしたな」

岩下は、錆びたしゃがれ声で、ミドリの顔をのぞきこんだ。

野卑な男の口臭が、ミドリの鼻孔に吐きかけられる。ミドリの白い顔が新たな脅えをみせてゆがんだ。

岩下の手が、おもむろに天井から垂れ下がっている縄をつかんだ。その縄は天井の鉤をとおり、それからミドリをくくった手足の結び目につながっているのだ。

「いいか、引くぞ。痛いぞ。かくごしろよ。泣くんじゃねえぞ」

なぶるように言いながら、岩下は両手で縄をつかみ、腰を落とすと、ぐいっつと引いた。たるんでいた縄がぴーンと張った。

「ひいッ！」

ミドリの咽喉から、悲鳴がほとばしった。

左右の肩が上方にひかれ、腕がねじあがり手首が吊りあがった。両膝がいっそう折れ曲がり、左右の足首は極端に腰部へひきしぼられた。

ズルズルズル！……

天井の鉤に縄がこすれて、にぶい音を発した。悪魔のふくみ笑いのような音である。

「うッ、うッ、うううッ！」

蒼白だったミドリの顔に、みるみる血がさしのぼった。まっ赤になった。はげしい疼痛が、いちどきに四肢の関節を襲ったのだ。

両手両足を一つにくぐられたまま、宙吊りにされかかっているのだ。

女のうめき声に、勢いづいたように岩下の手に力がこもった。両足を踏んばった。

ズルズルズル！……

魚の腹のように青白い女の腹が、床からわずかにはなれた。ミドリの身体は、当然、下を向いていた。俯伏せのまま吊られるのだ。

部屋の空気が、一瞬、声のないどよめきにゆれた。むごい光景に、さすがに息をのむ。

顔も、乳房も、腹も、すべては下向きである。重い腹が弓なりにそって垂れ下がった。

「ぐずぐずしていないで、もっと高く引きあげろ」

荒川社長が命令した。

だが、いくら力自慢の岩下でも、ずっしりとポリウムのある女体を、一人だけで吊りあげるのは、そうかんたんな仕事ではない。

「よし、兄貴、おれも手伝うぜ」

みかねて、ほかの子分二人が、縄に手を貸した。

三人の男が、力を合わせて一人の女を天井へ引きあげるのだ。

「よいしょ、こらしょ」

おどけた声だが、行為は非情だった。

ズルズルズル！……

ズルズルズル！……

速度が加わった。縄が鉤を鳴らした。この暗いコンクリートの部

屋全体が、重い縄と鉤のひびきにふるえた。

「ああッ、うううッ！」

熱い悲鳴がミドリの咽喉からあふれる。髪を左右にふってもだえる。だもだえればもだえるほど、苦痛は増す。

ズルズルズル！……

縄が鉤にこすれる音と同時に、ミドリの身体が、五十センチ、八十センチ、一メートルと床からあがっていく。

そしてついに、男たちの眼の高さまで浮きあがった。

自分の肉体の重みが、いまのミドリには呪わしい。一本の縄に支えられたその重量は、ぎゅぐゅと縄目に噛みこんでいく。

肌に食いこみ、肉をくびれさせ、骨にまで達するほどの、むごい形相になっていた。ミドリは腹で呼吸する。白い腹がヒクリッ、ヒクリッとあえいでいるのは、なにか動物的で、ひどくいやらしいものに見えた。

煉瓦責め

陰惨なリンチが展開していく。

このうす暗い地下の密室に、悪夢のような光景だった。

荒川社長とその子分たちにしてみれば、ミドリの逃走によって、あやうく自分たちの身が数珠つなぎにされるところだった。

途中で捕まえたからいいようなものの、まさに危機一発だ。

——殺してもあきたらない！……

と、ミドリを憎む。

だが、殺すことはしない。

ミドリは若いし、上玉だ。インテリくさい澄ました美貌が紳士たちによろこばれて、いつも高い値がつく。

生かしておけば、まだまだ稼げる女なのだ。殺しては元も子もなくなる。やくざたちは金には汚ないから、そういう不利益なことはいない。

だからこうして、殺さぬていどに責めあげて、二度と逃走の心など



おきないように、恐怖を身体に刻みつけるのだ。

「フフフ……どうした、ミドリ。苦しいか、痛いかな。苦しければ言ってしまう。お前はあのブン屋に、どんなことをしゃべったのだ」

私刑とともに、このことを確める必要がある。自分たちの安全を計るために、荒川社長の訊問は執拗だった。

「な、な、なにもしゃべりません！……」
ほそく苦しい息の下で、ミドリは首を横にふる。

縄尻は固定され、ミドリの身体は俯伏せのまま、一定の高さの空間に浮き、重くゆれていた。

「ほ、ほ、ほんとうです！」

この宇宙会館の地下で秘密売春がおこなわれていることを京介に告げ、さらにかねて盗んでおいた特別会員証のバッジを渡したことなどを白状したら、この男たちはさらに激怒するだろう。

もしかしたら、殺されてしまうかも知れない。

だからそれだけは、どんなに苦しい目に逢わされても、ミドリにはいえない。死の苦しみの中でも、命だけは惜しい。

「嘘をついたとわかったときには、この乳房に穴をあけ、



腹を切り
裂いて腸
をつかみ
だしてや
るぞ。い

いな？」

いま、荒川社

長の目の前に、

宙に吊られて龜のようにもがいているミドリの顔がある。

乳房も腹も腿も、下向きになって浮いたまま、男たちの眼の高さにあるのだ。醜い姿をさらけだしたまま……。

なんという羞恥であろうか。

ミドリはかたく眼をとじ、歯を噛みしめている。頭の中が火のよ
うに熱く渦巻いている。熱湯をそそぎこまれたように、のたうって
いた。

——ああ、お父さん、お母さん！……

ミドリは屈辱の中でうめいた。いまうめいても、どうにもならない
言葉だった。

ミドリは去年、名古屋から東京へ出てきた娘だった。恋人の後を追
ってきたのだが、その青年は東京ではかに女をつくってしまった。
はげしい恋愛だっただけに、ミドリは理性を失い、身を落とした。
父親は高校の教師をしていて、よい環境に育っている娘なのに、
無智といえは無智である。

しかし、女性の感情は、時に教養をうわまわる。一度、泥沼に墮
ちこむと、這いあがるのはむずかしかった。

屈辱の日夜に耐えきれず、必死の脱出を企てたあげくが、借しい
ところで失敗してこの責め苦だ。

トップ屋に材料を売って、いくらかの更生資金を得ようとしたの
も、いまにして思えば、あさはかな女の智恵でしかなかったのか。

やくざどもの暴力が、常識を越えた無茶なものであることを知ら
ないミドリではない。

だが、これほどまでに気違いじみた暴虐が自分の身に加えられる
とは、ミドリには予想できなかった。

——この地獄から、どうしても脱け出すことはできないのか！……
ミドリは泣いた。痛切な涙だ。

肉体を宙吊りにされ、縄目がギリギリと胸に喰いこんでくる苦痛
とともに、これは血のような悔恨だった。

「ヘッ、この女、一人前に涙をこぼしてやがる」

子分の一人が悪態をついた。

「泣くのはまだ早いぞ」

荒川社長がいった。そしてつぎに、さらに残忍な命令を発した。

「女の背中の上に、そこにある煉瓦をのせてやれ」

「へい」

部屋の片隅に、その煉瓦が十個ばかり積み重なっていた。この温泉ビルを建築したとき、装飾用に使った化粧煉瓦の余りだった。

岩下はその煉瓦を無造作につかんだ。右手で一個、左手で一個。そして、その二個の煉瓦を、吊り下がっているミドリの背中の上にのせたのだ。

「ううッ！……」

ミドリの顔に新たな朱がそがれ、煉瓦の色よりも赤くなった。自分の肉体の重みだけでも、骨がきしむほどの疼痛である。その上に、なおいっそうの重量が追加されたのだ。

湿っぽく、ずしりと重い煉瓦が、さらに二個、合計四個……。ザラザラしたつめたい肌ざわりである。

「う、う、うッ！……」

ミドリの咽喉から、汗がふきだした。

にじみだす汗は、やがて玉になって流れだす。咽喉から胸へ、そして腹へ伝わる。

金網にのせられた一匹の白い魚が、下から火で焙られ、ポタポタと油を流すような、苦汁の汗であった。汗は床にしたたり落ちるほどである。

「く、く、くるしい！……」

ミドリは口をあけ、舌をだした。犬のように、ハアハアと荒い呼吸をして、倍加されたこの苦痛を耐えた。

腕がぬけそうだ。足首の関節がはずれそうだ。

背中にとった煉瓦は、さらに六個をかぞえた。それ以上は積めない。山がくずれて落ちてしまう。

「どうだ、熱くはてった肌に、このつめたい煉瓦は気持ちがいいだろう。ウフフフ……」

ここまでくれば、ただの私刑ではなく、すでに嗜虐の遊戯だった。笑う荒川社長の顔は鬼の形相だった。

哀れな牝獣

そのとき、この私刑室のドアが、廊下からノックされた。

「あたしです、社長」

声があった。

「高本か、なんの用だ。まあ、入れ」

荒川社長は、ドアの錠をあけさせた。

高本というのは、荒川の片腕であり、この温泉ビルでは、副社長の位置が与えられている男だ。

「社長、おどろきました——」

部屋に入るなり、高本がいった。こわばった表情である。

「どうしたんだ？」

荒川社長の視線が、ミドリから高本にふりむいた。

「実は……」

高本は緊張して社長に報告した。

その報告の内容は、怪しい男が客に化けてこの秘密の女奴隷市に潜入し、美加をそそのかして逃走を計っているという、重大なニュースであった。

怪しい男というのは、むろんトップ屋の京介だ。

美加の部屋に備えつけてあった隠しマイクが、その相談を残らず

副社長の事務室に知らせたわけである。

「なにッ、ブン屋らしい男がめぐりこんでいる？」

それをきくと、さすがに荒川社長の顔色が変わった。警察も新聞記者も、暴力団にとっては最大の敵だ。

「それで、そいつはどうした？」

荒川社長は、セカセカときいた。逃がしたら一大事である。新聞にデカデカと書きたてられでもしたら、すべてが破滅してしまう。

「もちろん、とりおさえてあります。美加も一緒に」

高本はこたえた。

「ちくしょう、ふてえ野郎だ。どうやってここへめぐりこんだんだろう？」

ミドリが京介にバッジを渡したことを、荒川社長もまだ気がつかない。

「どうでしょう？」

「ここへ連れてこい、二人ともだ」

「へい、かしこまりました」

うなずいて、高本は部屋から出た。

荒川社長の瞳が、憎悪の光りに満ちて、ミドリにむきなおった。

「おい、ミドリ」

荒川の手が、ミドリの髪の毛を、わしづかみにつかんだ。女の顔が、ひきつってゆがみ、上向きになった。

荒川は左手で髪をつかみ、右手でミドリの頬をピシピシとなくった。

「ああッ」

ミドリは、とじた眼をつりあげ、息をのんだ。なぐられた反動で、

宙吊りの身体がゆれる。

「てめえ、やっぱりしゃべりやがったんだな。お前のお蔭で、はやばやとブン屋がやってきたぞ。くそッ」

荒川社長は、こんどは両手でミドリの髪をつかんだ。つかんだ頭を、はげしい勢いで左へ振った。ミドリの身体を回転させようというのだ。

「ヒューッ！」

鋭い絶叫があがった。

六個の煉瓦を背負って宙に浮いているミドリの肉体は、天井から垂直に張っている一本の縄を中心にして、グルグルと回転しはじめたのだ。

荒川は、なおもミドリの髪をつかみ、乱暴な力で、左へ左へと振りまわす。回転は速度を増した。

「ヒューッ、ヒューッ！」

ミドリの咽喉は、笛のようになった。悲鳴も、きれぎれに回転する。

回転と同時に、縄がよじれた。よじれば、縄はいっそう強く肌に喰いこむ。

天井から下がっている縄は、次第に短くなる。

「ア、ア、アッ！」

暴風の中の声のように悲鳴はちぎれた。

ミドリの頭も尻も、グルグルと回転する。

はずみで、背中に積んである煉瓦の半分が床へ落ちた。

と——荒川は、ミドリの頭からいきなり手をはなした。

左へ左へと回転していた身体は、こんどは逆に右へ右へとまわり

はじめる。
「ヒューッ！」



女体は風を切り、コマのようにうなりをあげて、めまぐるしい回転をつづける。

なんとという残酷な所業か。

嗜虐に酔った野獣どもは、眼を猫のように燃やして、この凄惨な白裸の回転を眺めている。

野獣というよりも、むしろ狂獣だ。苦悶にさいなまれる女体を前にしてよろこぶ、狂った悪魔だ。

「ムッ……」

ついに、ミドリの口からは、あえぎだけになった。悲鳴をあげる気力も体力もしほり尽くしたのだ。髪が前にざんばらに垂れた。

咽喉がヒクリッ、ヒクリッと、何かを求めするようにうごく。水が欲しいにちがいない。乾いているのだ。

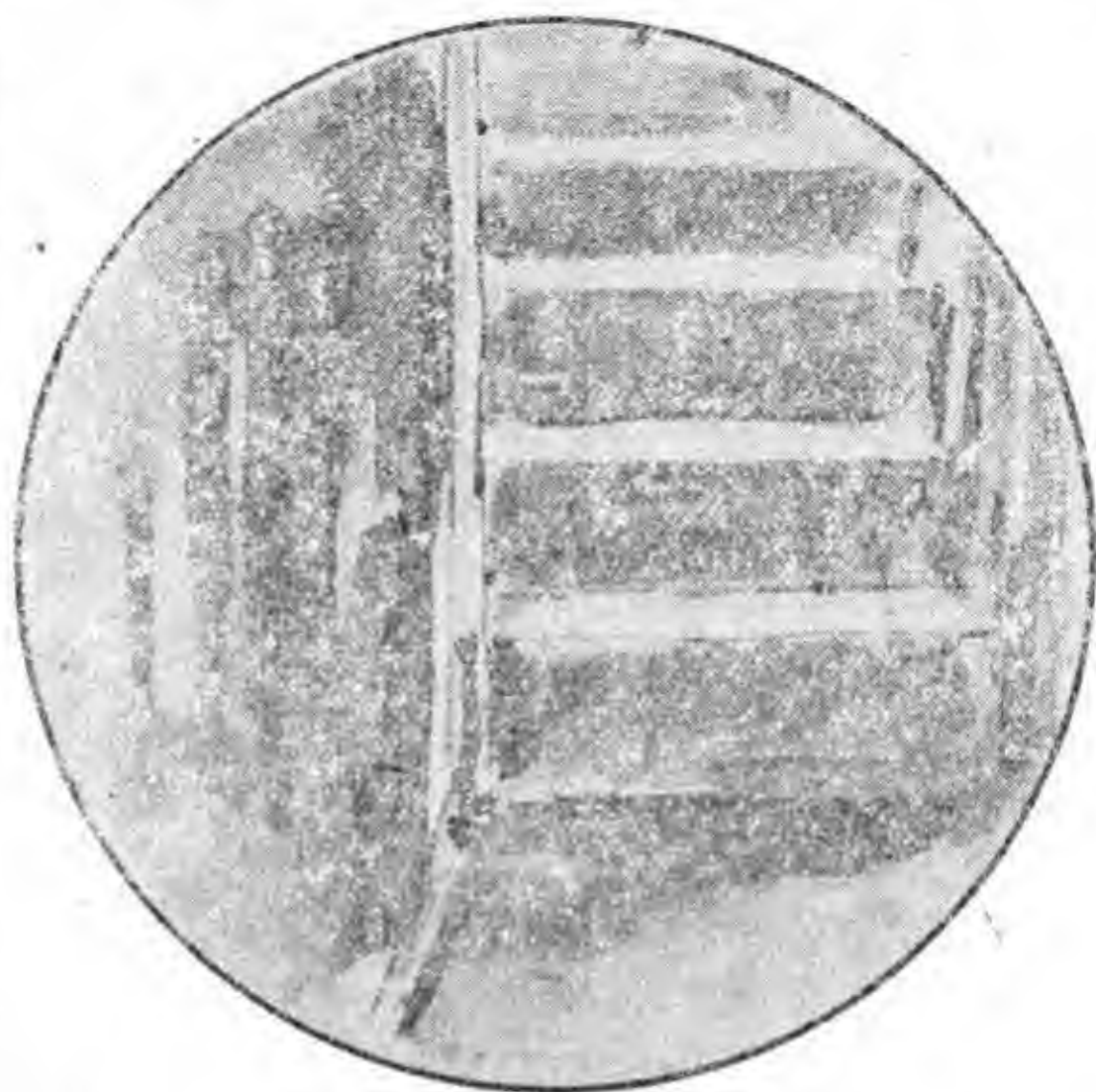
縄のよじれが飽和点に達し、回転がにぶくなった。

「おい、気絶したのか。くそッ、まだ気を失うには早いぞ」

荒川社長は、平手でミドリの太腿のあたりを、はげしく叩いた。

まるで馬の尻でも叩くような調子だった。

太腿は、ペタッペタッと鳴った。妙に肉感的な音を発した。



「えへ、えへへ……」

子分たちは歯をむきだして笑い、その音に舌なめずりした。縄で縛りあげられ、くびれあがった白い肉体……。

苦汁の汗をしたたらせてうめく柔肌……。

人間というよりも、白い衰れた牝獣のような感じである。

ジャングルで捕えられ、四ツ足をくくられて、檻の中へ運ばれて

いく牝の動物。

白い肌が汗にまみれて、ヌラヌラと光っているのだ。その汗の匂い……。

それが子分どもに、奇妙な想像を抱かせるのだ。

荒川は、なおも平手でペタペタと叩いた。おもしろがっている。鳴らすために叩いているのだ。

荒川の手が、ミドリの汗で濡れた。その手でミドリを叩くと、ベタリッ、ベタリッという湿った音がした。

それはいっそう動物的で、卑猥な音になった。

迫る銃口

「――社長、つれてきました」

副社長の高本が、ふたたびこの部屋に姿を現わした。

一組の男女をひきずっている。

京介と美加だ。二人とも、うしろ手に縛りあげられていた。

京介の背広もズボンも裂けて、唇からは血をながしている。抵抗のあとだった。

二人の脱出計画を隠しマイクで知った高本は、すぐに三人の子分に命じて、京介と美加を捕えさせたのだ。

腕っぶしにはいささか自信のある京介も、不意に拳銃を突きつけられ、前後左右からなぐりかかられては、どうしようもなかった。

さんざん痛めつけられたあげくに、縛りあげられてしまった。

「ブン屋というのは、きさまか？」

荒川社長は、険しい眼で京介にいった。

「ただのブン屋じゃない。トップ屋だ」

京介は、ふてぶてしくこたえた。こうなったら、もうジタバタしても無駄だ。

「トップ屋？……ああ、週刊誌に記事売り込むとかいう商売か。名前だけはきいている。そうか、お前がそのトップ屋か。それなら、なおのこと生かしてはおけねえな」

荒川の眼に、殺意が走った。

「殺すのか？」

京介は、唇をまげた。

さすがにたじろぐ。

「そういうことになるだろうな。お前を、ここから生かして出したら、おれたちが苦心して築きあげたこの組織を、おもしろおかしく書きたてやがるだろう」

「むろんさ。それがおれの商売だからな。だが、書くと同時に、すぐ警察へ知らせるだろうよ。こんな非人道な奴隷市が、いまの時代にあっているものじゃないからな。一日も早く、一刻も早く叩きつぶすべきだ」

京介は昂然とし、なかば捨て鉢の返事だ。

「フフフ……いったな、小僧。だがな、この商売は、お前らが想像している以上に儲かるのだ。ぼろいのだ。いくら非人道だろうが、ちよつとやそつとではやめられない。いま警察に知られては困る。そこで、おれはお前を殺さねばならないのだ」

荒川社長の口もとに、のっぴきならない凄みがこもった。

背広の内ポケットから、静かに拳銃をとり出した。

銃口を京介の胸に、ピタリとつけた。

本当に引き金をひく眼だ。

一瞬、この部屋の空気が緊迫し、静寂になった。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ。いま何時ごろだ？」

京介はあわてて時刻をきいた。ここで死ぬのは困る。京介は、うしろ手に縛られているために、自分の腕時計を見ることができないという素振りをした。

「——0時四十五分だ。つまり、きさまの臨終の時刻がな」

副社長の高本が教えた。

「ありがとうよ。おい、いまおれを射つと、まずいことになるよ。おれが午前一時までに事務所へ戻らないと、おれの可愛い助手が、警察に電話することになっているんだ。うちの社長が、城東楽天地の温泉ビル、宇宙会館へ行ったきり帰ってきませんが、至急捜査して下さいとね」

京介は、不敵な微笑でいった。

「なんだと？」

「トップ屋ともあろう者が、こんなぶっそうな所へもぐりこむのに、何も手をうたずにくると思うのかい」

「なにイ？」

やくざどもは歯がみした。狼狽した。

「お前の事務所というのは、どこにあるんだ？」

拳銃を下におろして、荒川がいった。

「それをきいて、どうしようっていうんだい？」

「面倒だ。おい、この男のポケットを探がせ。名刺か何かそんなものが入っているにちがいない」

荒川社長は、ややあせり気味に命令した。

「へいッ」

子分たちは、いっせいに京介に躍りかかった。

京介はもがいた。二、三発、頸をなぐられてのけぞり、数本の手が京介のポケットをかきむしる。

名刺はかんたんに見つけだされた。

「——ふうむ、現代情報社か……。名前は、利根京介で、事務所は銀座か……。よし、おい、健司に政、お前たち二人、大至急でこれから、このトップ屋の事務所へ行って、その助手とかいう奴を、こへ引ッ張ってこい。おれの車を使え。嘘か本当か知らないが、一時までにその事務所へ着かねえと、まずいことになる。いそげ、大至急だ！」

「へいッ！」

健司と政の二人は、とびあがって部屋を出ていく。

——しまった！……

と、京介は思った。

殺される寸前の苦しまぎれに、ついしゃべってしまったが、まさかこの男たちに、これだけ敏捷な機動性があるうとは気がつかなかった。

——妙子の身があぶない！……

京介は後悔した。が、もう遅かった。

妙子は銀座の事務所で、ほんとうに京介からの連絡を待っているのだ。

女の調教法

二人の子分を見送ってから、荒川社長の視線が、つぎに美加にむいた。

美加は、さっき奴隷市のステージにあがった時のままの衣裳で縛られている。

薄い布きれを一枚、素肌にまとっただけの半裸だ。その薄衣もわずかにいまは腰のまわりに巻かれてあるだけだった。

指をひっかければ、すぐ落ちてしまうほどである。

「——美加、お前、このトップ屋にそそのかされて、この結構な極楽から逃げたそうとしたんだったなあ……」

荒川社長は、ことさらにやさしくいった。

「かんにんして！……ゆるして！……」

美加はもう泣き声だった。つい十五分前の決意は、発見され縛りあげられた時に、むなしく消えていた。

こうなっては、むしろ京介の説得や激励も憎いのだ。恐怖だけが眼前に迫っていた。

運命を踏み誤まらなければ、まだ高校三年の女学生なのだ。身体こそ成熟しているが、まだ心にはあどけないものを抱いている娘である。

「おい、美加、こっちを見ろ。これが誰だかわかるか。お前と仲良しのミドリだ。ミドリはな、ここから逃げたそうとしたばかりに、こんなぶざまな恰好になっているんだぞ」

荒川の頸が、まだ宙吊りのままのミドリにむいた。

「ああ、ミドリねえさん！」

そのむごたらしい吊責りめの姿に、美加は思わず棒立ちに立ちすくみ、凝視した。縄にくびれあがった柔肌の痛々しさに、美加はす

ぐに眼をそむけた。

「なに、ミドリだって！」

京介も声をあげた。手足を背中にくぐられて、天井から吊り下がっている姿をみた。

肉屋の倉庫にぶら下がっている肉塊のように、ぐったりと動かないが、その女はたしかに昨夕、城東公園のベンチで逢ったミドリにちがいなかった。

——そうか、やっぱり……

京介は唇を噛みしめた。

昨夕、自分がもうすこし注意ぶかければ、ミドリをこの地獄へ突き落とさなくともすんだのだ。

——ゆるしてくれ、ミドリ！……

京介は、心で詫びた。せっかく奴隷から這いあがりかけた女を、自分の油断から、こんなリンチに逢わせている……。

「美加、お前もこのミドリと同罪なんだぞ。わかっているだろうな。いまのうちに覚悟をしておけ」

荒川が、美加の頸に手をかけていった。

「ゆるして、社長さん」

哀願すると、美加は背後から突き飛ばされたように、荒川の足もとに膝まづいた。

「このとおりです、社長さん。もう決して逃げようとはしませんから……」

床に頭を下げて許しを乞う美加である。哀れな女奴隷の姿だった。

京介は、沈痛な瞳で、早くも敵に屈した娘を見つめた。

「駄目だ。仕置きはきちんとしないと、あとあとのためにならないからな」

荒川社長は、どこまでも冷酷だった。

これは荒川の信念なのだ。

女というやつは、身体も神経もにぶい。バカである。

口でいくら言ってもかきせてもわからない。

女は獣と同じだ。鞭で教えなければ何事もおぼえようとしない。

感受性が鋭いようで、じつは案外に鈍感である。皮下脂肪が厚い

せいか、触感も鈍重で少々ぐらいのことはこたえない。

だから、命令にそむいたり、失敗したときには、肉体にきびしい

苦痛を与えて調教するのが、一番手っとり早く、確実だ……。

荒川社長は、この野蛮きわまる信念で、地底の女奴隷たちを服従

させてきたのだ。

このモットーを胸に思いうかべ、彼は美加に加える鞭の方法を考

えはじめた。

「——よし……」

荒川社長は、何を思いついたか、一人でニンマリと笑った。そし

て、うしろをふり返っていった。

「おい、高本。スピーカーを使ってな、各室のお客さまに、もしお

身体が空いておりましたら、地下一階の大浴場までお越し下さい、

と伝えろ」

「はあ？」

副社長は、げげんな顔をした。

「まもなく大浴場でおもしろいショウがはじまるから、と説明する

のだ。今夜のお客さまに対して、これは特別サービスだ。今夜の客

は運がいいぞ、フフフ……」

不気味なふくみ笑いをして、荒川は腕時計をみた。

午前一時である。

——健司に政の奴、間に合ったかな……

荒川はチラッと思いうかべた。

深夜だから、車をすっ飛ばせる。十五分あれば、銀座へはたっぷり間に合う。警察へ電話しようとしているトップ屋の助手をとりおさえることもできよう……。

いま荒川が腕時計を見たのは、もう一つの理由があった。

二時間前に、一人ずつの女奴隷を買って、あてがわれた個室におさまった紳士たちが、それぞれ遊戯の「第一回戦」を終えた頃だ、と思ったからだ。

精力のたくましい紳士は、早くも遊戯の「第二回戦」に入っているだろう。ある紳士はもう眠くなって、女奴隷とともにこころよく疲れた身体を、ベッドに横たえているかも知れない。

またある紳士は、咽喉が乾いてビールでも飲んでる時刻だ。

各室に通じてあるスピーカーで呼びかければ、これからじまるというショウ見物のために、客の半数ぐらいは、大浴場にのこのことあがってくるかも知れない。

地獄への階段

「——みんな、この部屋をひきあげて、地下一階の大浴場へいくんだ」

荒川社長が命令した。

「この二人の女も一緒にですかい？」

大男の岩下がきいた。

「あたり前だ、バカ野郎。ついでにこのトップ屋もだ」

「かしこまりました」

岩下は壁の環に結んであるミドリの縄尻を解いた。

ズルズルズル！……

という音がしてミドリの身体はやっと宙吊りをゆるされるのだ。腹から先に、ペタリッと床の上に着く。

「ああ……」

骨がバラバラになるような疼痛だった。

ミドリは全身で息をした。眼を半びらきにして、かすかに生き返ったような表情をとりもどす。

「ミドリの縄を解いてやれ。すこしの間、休憩だ。ただし、すこしの間だけだぞ。フフフ……」

この強烈な縄目をゆるされることは、たとえ五分でも、十分間でもありがたかった。

噛みついた縄が、次第に肌からはなされる解放感に、ミドリはゆえ知れぬ涙をポロポロとこぼした。

みじめな自分……。

あまりにも哀れなこの姿……。

白さを誇った乳房の上下に、二の腕に、胴まわりに、手首に、数条の赤紫色が、くっきりとしみこんでいる。

赤い縞蛇が巻きついていっているような、不気味な縄目の痕だ。

「さあ、立て。立って歩くんだ」

荒川社長は、靴でミドリの尻を蹴とばしていった。

ここは地下二階である。地下一階の大浴場へいくには、階段をあらなければならない。だが、ミドリにはその体力はなかった。白い身体は濡れた雑巾のように、ぐったりと床に俯伏している。

「立つんだ！」

岩下が、ドスのきいた声でいった。

ミドリは腕と膝に力を入れて、床から身を起こそうとした。だが駄目だった。疲労がはげしく、すぐにまた、へたへたとくずれ折れた。

「ちえッ、芝居をしてやがる。女の身体なんてのはな、鈍いもんだ。これくらいの吊り責めで参るほど、しおらしいもんじゃねえ。かまわねえから、ひっぱだけ。ピシピシひっぱれば、すぐに起きあがる」

荒川が、容赦のない言葉を吐く。

「へい」

岩下は、周囲を見まわした。片隅に竹箒のこわれたものがころがっている。鞭にするには手頃な竹の棒である。

岩下はそれをひろいあげた。

ふとい腕が竹棒を握りなおし、それを一度、宙に空振りさせる。

ヒュウッ！……

という風を切る音がした。

「おい、ミドリ。こいつが鳴らないうちに、おとなしく立てよ」

ミドリの耳にも、その竹鞭の空鳴りはきこえた。

ミドリは両腕を床に突っぱらせ、犬のような形になって起きあがろうとした。

「ムムッ……」

しかし、すぐにくずれた。それだけの力がなかった。

「ようし、それじゃ、この竹棒で立たせてやるかな」

岩下は、鬼のような形相になって、竹鞭をふりかぶった。

ビシリッ！……

それは、豊かな腰のまるみに命中した。

「ひええッ！」

ミドリの頭だけが、がくりッとのけぞる。髪がはねあがった。大きな柔らかい隆起に、たちまち一本のふとい線が走った。その線は血をふくんでみるまに赤くなり、ムクムクと腫れあがった。

「やめろッ、乱暴はやめろッ！」

たまりかねた京介が、うしろ手の身も忘れて、岩下に体当たりをくわせた。

「うるせえッ、この野郎！」

たじたじと後退した岩下は、足を踏んばって身構えるや、竹鞭をふりかぶって、京介の顔面になぐりつけた。

「うわッ！」

京介は、仰むけざまにぶっ倒れた。竹鞭はまともに炸裂し、京介の額を割った。傷口から、たちまち血があふれだした。

「ざまをしろ、トップ屋め」

ペッと唾を吐いてから、岩下はまたミドリにむいた。

「さあ、ミドリ。お前の色男は一発でのびちまったぜ。こんどはお前の番だ。のびねえように、すこしずつ痛めてやるから、早く立って歩くん」

岩下はまた竹棒をふりかぶった。

ビシリッ…… ビシリッ…… ビシリッ……

プロレスラーのような頑丈な腕が、手加減をせずに打ちおろすのだからたまらない。

「ひいッ、ああッ、ああーッ！」

ミドリの裸身は海老のようにね返った。竹鞭が鳴るたびに、反射的にのけぞった。

ビシリッ……

ビシリッ……

竹鞭が皮膚に弾む。若い女の柔肌だから、岩下にしても叩き甲斐があるのだ。身体はどこを打っても弾力がある。

「ひいーッ、ううーッ、ああーッ！」

ミドリは本能的に竹鞭を避ける。ゴロゴロと床をころがり、のたうちまわる。

いくら逃げてても竹鞭は追う。

肩に、首すじに、腕に、背中に、腿に、まるで大掃除のときに布団か畳を叩くような手つきで、岩下は責めつつける。

ビシリッ……

ビシリッ……

打った部分からは、すぐにふといみみずばれがくねりはじめる。

二度三度と打たれた箇所からは、皮膚が破れて血がながれた。

「ゆ、ゆ、ゆるしてッ、ゆるしてえーッ！」

ミドリは切れぎれの声でうめき、犬のように這って、荒川社長の足もとにひれ伏した。

「フフフ……そうれみろ。まだそんなに元気で這いまわる力が残っているじゃないか。世話をやかさずに、その元気で立つんだよ」

鬼畜のような言葉を吐いて、荒川は上からミドリの背中を見おろす。

す。

その背中には、一本二本三本四本の赤い鞭痕が、交叉して腫れあがっている。

「た、た、立ちますッ……」

蒼白な表情で、ミドリがいった。

額には、あぶら汗がうかんでいる。前に垂れ下がった髪の毛が、その汗のために、べったりと顔に貼りついていていた。

ミドリは、渾身の力をふりしぼって、両腕のひじを張った。膝に力をいれた。血のどろどろに唇を噛んでいた。眼は血走っていた。床から手をはなし、そろそろと膝をのばした。ミドリは立ちあがった。

おそろしいものだった。たしかに鞭は、疲労困憊して半死の身体を起きあがらせたのである。

「フフフ……それみろ。立派に立てたな」

荒川は、自分のかねての持論が実証されたので満足げに笑った。

——女を自分の思いどおりに動かすのは、おれがいつてるようにやっぱり鞭だ……

「さあ、歩け！」

岩下がミドリの背後にまわってどなった。

「ハ、ハイ」

ミドリは、よろりと一歩、あるいた。

がくりッと膝が折れて、ミドリはまた前に突んのめり、這った。

「くそッ、なめるな！」

岩下の竹鞭が、うしろから白い腰をなぐりつけた。柔らかいふくらみがブルルと鳴る。



夏芝居禪立姿

R

生

「アアッ、立ちますッ」
無我夢中の気力だけで、ミドリはふたたび立ちあがった。跣足の裏を踏みしめる。

「さっさと歩け！」

まるで、馬か牛でも追いたてるような調子だった。

岩下は竹棒の先で、ミドリの背中を、ぐりぐりと小突きながら歩かせるのだ。

ミドリを先に立て、一同はぞろぞろとこの私刑室から出た。

つづいて美加も、縄尻をとられて引きたてられる。

「おい、きさまも行くんだ！」

床にころがされている京介も、脇腹を蹴りつけられて起きあがっ

た。割られた額から、まだ血が流れている。

荒川社長、高本副社長、それから三、四名の子分たちも、そのあとからゆっくりとつづいた。

地下一階へ通ずる階段を、一步一步のほりながら、ミドリの足はいくどかつまづいた。

美加の膝は、ガクガクとふるえた。すでに生きた心地ではなかった。

これから大浴場で、どんなおそろしい現実が展開するのか。荒川社長の残忍な胸中は、ミドリにも美加にもわかつている。だが、竹鞭で背中を突かれれば、この地獄への階段をのぼるよりは仕方のない二人の女なのだ。

七月の東都の演劇の中で何と言っても禪姿をふんだんに見せたのは明治座でやった北条秀司原作の「海女さわぎ」であろう。翠扇、霧立、英つや子など中堅、若手女優が紺緋に白パンツの海女姿よろしく、舞台をあばれ廻るのに対して、男性軍は赤禪、白禪の六尺の勇しい姿でこれも舞台せましと活躍する壮観、瞠目すべき芝居であった。

映画も夏になると海女ブームで松竹、大映、新東宝各社きそって海女を主題にしたものを出すのが恒例だが、どれも男性はショートパンツで失望させられる。それに反して桧舞台の上の演劇がオール禪という芝居もめずらしく堪能した。事件の発端になる島の一青年が婚約者の海女をもちながらバーの女と懇になるのを発見され、島の海女達に吊し上げられるシーンがある。男は赤禪一つで砂の上に手について詫びるのを女達は

威丈高に「拷問にかけても白状させる」と責めつけるシーンは、一寸マゾ向きである。男は若手の俳優で何とかいうハンサムな男だったが、仲々いい場面で忘れられない。海女達がストライキを起すのに向振わない男性軍に対して竜神様の申し子だという漁師の青年（金田竜之助）が一人、男らしく女軍を圧倒する。金田が堂々たる体軀に赤禪一つで翠扇の海女と大立廻りの場面など圧巻である。この男が意久地なく妥協しようとする島の漁夫たちに「お前たちはそれでもきんたまをぶら下げてゐるか」と怒鳴って自分の禪の前袋のあたりを叩いてみせると、観客はどっと沸く、女性の観客の多い新派の芝居だけに一そう興味がかかった。とにかく十数名出てくる漁夫のすべてが六尺禪一つというのも珍らしい芝居だった。北条秀司の演出だが作も演出もよく我々禪ファンを満足させた。

新宿第一劇場で実川延二郎三役早替りの「怪談乳房榎」も好評の芝居だったが、終り近い十二社の大滝で悪人の三次と忠僕孝助とが本水の滝壺で大立廻りをする場面があった。一人で善悪二役を演ずる延二郎の早替りの美事さに驚嘆したが、禪になると俱利伽羅紋々の刺青をして六尺一本の三次は仲々美事な裸ぶりだった。延二郎は先代の延若と違って瘦形でポリウムが欠けているが、動作がきびきびして仲々立派だ。六尺禪の場合、腹

巻をするものが多いが、あれは色消しで臍をはっきり見せないと魅力は半減する。延二郎はそれをよく心得ていて腹巻などしない。禪の締め方はゆったりとした感じで悪くない。古老から「禪をゆったりと極めて舞台に出られる役者は一人前だ」といわれているが、新派の俳優にしても延二郎にしても皆緊禪でないのは男の縁をはっきり出して仲々よかった。夜の部で延二郎は宇野信夫の「巷談宵宮の雨」で虎鯢の太十という粋な遊人の役をやった。強慾な伯父の破戒僧を殺すのであるが、藍微塵の単衣がはだけて禪をふんだんにみせる、仲々魅力のある役であった。

現在の歌舞伎で裸になって禪姿のよいのは羽左右門、海老蔵、幸四郎、延二郎の順で勘三郎、松緑は寸足らずで駄目、新国劇の辰己柳太郎が最高という事になる。着流して禪あらわの大立廻りをする丸橋忠弥、中山安兵衛など独得のものである。同じ新国劇でも島田正吾の裸は彼にくらべて一段落ちる。

「ふんどし医者」が映画になる。筆者は猿之助、時蔵の初演を数年前、見たが、中野実原作の仲々いい芝居である。初演の時「禪医者」と漢字で書き、幕合で劇場の女アナウンサーが「ふんどし」という語を照れながら言っているのを記憶したが当用漢字にない「禪」を「ふんどし」と平仮名にしたのは却って別の効果がでて来た。ただしこの芝居は医者が賭

け事が好きな妻と一しよに賭場に出かけ、無一物になり禪一本で帰ってくるので村人が「ふんどし医者」とあだ名をつけるので、映画でも森繁が腹巻をしたり前下りを長くしたりして出てくるらしいので魅力の方は全く期待できない。それにしても映画の禪姿がまるで見られなくなり、大映の「切られ与三郎」で雷蔵が玄治店の強請の場で裾をまくると半パッチを（半股引）を穿いているのには驚いた。あの芝居で禪がどんな効果をもたらすか名演出者の伊藤大輔も知らないらしい。

「禪りながら晒を一本切ってきたのだ」という科白はもうきかなくなった。歌舞伎の人々が勇敢な禪姿をみせたのに対して映画の方は演出者の感覚がズレている。時代物専門の東映あたりでもやくざは大抵、半股引できりりとした禪姿はまるでみられない。テレビの時代物あたりになると最近は何でもパンツを穿いているのに驚く。風俗考証とまでむつかしい事は言わぬが、侍や遊侠の徒は必ず六尺、一般の町人は越中禪を使用していたくらい心得てもらいたい。越中禪も又効果としては悪くなく「ああ江田島」の野口啓二、「炎上」での海兵生徒のともにワンカットではあるが、純白の越中禪が目玉のように映ったのを未だに忘れられない。映画製作者はこの辺をもっと注意ぶかく研究してみたら映画も演劇ももっと当ることうけ合いである。（終）



女の相撲に就いて

雪 崎 京 人

男と女とが相撲をとるといふと男女間の性的行為を連想され勝ちである。

これからが女相撲とそびくなり 古川柳

両国の相撲見物の後、友達同志誘い合つて女の居る水茶屋へでも出かけようという所である。

泣き出され夫婦相撲の仲が割れ 古川柳

これは赤ん坊に泣き出されて組み合つていた体を解いた所である。

この様な性的行為そのものでなく、男女が相撲をとつたらどうだろうか。体力的に男は

女よりも優れているから問題にならない様に思われるが、そう簡単にも言い切れない所に面白味がある。

紀元前数世紀の昔、ギリシヤでは色々のスポーツが行われ、相撲といつても勿論、日本の相撲とは異り、今のレスリングの様なものだが、この斗技が盛んに奨励され、男同志、女同志の外に男女の間で、しかも驚くべきことには全裸で行われたことだ。南国の明るい太陽の光の降りそそぐ競技場でアポロの様な男性とヴィナスの様な美女とが一糸まとわぬ全

裸で力の限り格闘し、花の如き美少女が、力つきた男性を組み敷いて凱歌を挙げる有様もあつたことだろう。

柔道などでも体力を抜きにすると女性の技は上達が早いということだ。フランスから招かれて柔道教授に行く日大の小坂幹子三段も、男の人とやっても一本勝負なら勝つ自信がある。しかし長びくと分が悪いと言つていい様だ。相撲でも職業的の女相撲では、以前は飛入りを歓迎し、懸賞を出したものだ。昭和の始め、浅草で女相撲の興行があつた時

女力士は肉じゅばん（シャツ、パンツ）を着て、は居たが飛入りの男は裸に褌をしめて取組んで評判になったが、当局からやがて禁止命令が出た様である。稀には女の飛入りもあった様であるが、殆どが男で、地方などでは女力士も真裸に褌という姿で相手をした。男は裸の女と相撲をとるといふ好奇心とあわよくば懸賞の品を取りたいという欲心とで出場、又何といっても男女どちらの側からいっても性的な関心が皆無というわけにも行かなかった様だ。例えば大相撲をとって汗みずくになつて土俵へ降りた女力士の締めてゐる褌を、飛入の男がそのまま借りて締めて貰い出場したり、女力士の方も四つになつて引きつけ飛入りの男と胸と胸、腹と腹をピッタリ合せて動かずに居たりする。所で勝負は素人の男よりは女乍らも本職の女力士、仕切りの後に受けて立ち、十分に組ませて置いて鮮かな投げや、柔軟な腰に物を言わせて土俵際の巧みなうっちゃりや、或は抱き上げて腹櫓に吊出したり殆ど女力士に軍配が上るのが普通だが、中には女力士を投げ倒し懸賞金を貰つたり、大相撲の末、取りつかれ水が入るのや、熱戦のあげく同体倒れ、物言いがつき取直しとなるのなど賑かだった様だ。又、弥次合戦が盛



んで見物、女力士、共に口角泡を飛ばし、女力士等は黄色い声で声援し、口々に「○○ちゃん、負けるな」などという騒ぎだった。演劇などに現れた男女相撲で記憶に残るのは、これも昭和始めに帝劇で上演された有馬騒動の中の一場面だ。殿の御前でお抱力士小野川が美しい腰元相手に相撲を取る所で、これは無論、褌というわけには行かない。小野川は助高屋高助という俳優、大たぶさの相撲髷、はでな模様の着物を着て、草履を脱ぎ、庭先に仁王立ち、之に対する腰元は美しい若手女優数人、高島田に紫矢がすりの着物、立矢の字に帯を結び、紅だすき十字に絞取り、高島田に白鉢巻を締め、褌をからげ、裸足になつて、小野川は、やあ、などという乍ら片

端しから投げ飛ばし、殿から、流石は小野川、天晴れなるぞ、などとお褒めの言葉がある。天下の力士小野川ともあろう者の相手をさせるのなら家中の力すぐれた若侍達を選ぶべき所を、眉目美わしい腰元達を選んだ所が面白い。

彼女等は小野川の相手をするだけあつて武術、体術に秀れて居る娘達だったのだらう。仕切る時など、頭突きをしても滑らぬ為、額に唾をつけたり、腋の下に砂をつけるしぐさなどして見物を喜ばせた。ここで私は思うのだが江戸時代、大名が花見の時など腰元に裸相撲を取らせて余興にしたことなどから、この小野川対腰元達の相撲を双方共、裸になつて褌を締めただけの姿で行われたら色っぽ

いこと、又美しいこと格段の違いとなると思う。

次いで思い出されるのは同じ頃、歌舞伎座で、チャップリンの映画「街の灯」を雷物に翻案した「蝙蝠の安さん」という劇だ。切られ与三郎とおとみに出てくる蝙蝠の安ではなく、憐れな少女の為に懸賞金を目あてに、安さんが女相撲に飛入りで出る場面がある。安さんは先代守田勘弥、女相撲は市川団右エ門という六尺近い大男の役者を始め男の俳優が島田蟠をつけ乳房をつけた肌色の肉じゃぱんを着用、化粧廻しを締めたグロテスクな姿でやせっぽっちの安さんと滑稽な相撲を取る所が見せ場だった。以上の二つの劇など今のストリップ劇場で素晴らしい肉体をしたグラマー・ストリップパー達が禪一本の力士姿で演じたら面白いものになるのではなからうか。

これは演劇ではないが、落語で、夫婦で相撲をとる面白いのがある。私が知っているのでは「蚊柱」というのと「さい投げ」というのだ。この頃、都会では蚊が少なくなり見られないが、以前は夏の夕方、何百という蚊が柱状に集団となり、その羽音がワーンという様に聞えたものだ。これを蚊柱というのだが、下げにこの蚊柱が使われている。相撲狂

の主人が、夕方ふさぎ込んで帰宅する。細君が出迎えどうしたのかと問うと、本場所を見に行つて今日、ひいきの〇〇山が、借しい所で、かねて虫の好かぬ〇〇川に負けてしまい何とも胸くそが悪く、気も滅入って、くさくさして不愉快だという。そこで細君、主人思ひであるから一計を案

じ、よいことがありますわ。私とその憎い〇〇川になり、あなたが御ひいきの〇〇山になってここで相撲を取り、あなたが思う存分、私を負かしたら、胸のつかえも下り、御気分もさっぱりなさるでしょう。という亭主も、それは面白い、一つ相撲を取ろうか。ということになる。細君は、襷をかけエプロンを外したくらいのふだん着の姿、現代ならさしづめ、セーターにスラックス位の姿で相手をする積りだったのが、亭主は承知しない。そんな恰好の関取がありますか。おなべや、兵児帯を二本持っておいで。ああよしよし、そこへ置きなさい。さあ、お



前、着物を脱いで裸におなりと、いやがる細君を無理矢理に裸にし、兵児帯を禪の代りにして締めてやり、自分も支度をする。この細君、大柄で肌も美しく引きしまった肉付をしており、黒ちりめんの兵児帯の禪がよく似合うので亭主、こうして見ると腰から下は本物の関取の様だよ、と大満悦。細君の方は思いがけないことから裸にされ禪まで締めさされ大弱り。女中に、呼ぶまで、こちらへ来ては絶対駄目よといっている。

座敷に蒲団を敷き土俵とし、蚊帳をつり、これを四本柱に見立てて、いよいよ取組むこと

こうもりの安さん女相撲と取組む図



になる。四股の踏み方、仕切の姿勢など羞かしがる細君に手を取り足を取って教える所がある。気合、合して立上り細君は亭主に武者ぶりつき、揉み合っている内に、段々本気になり、いっそ亭主を負かしてやれとばかりに攻め立てる。亭主も適当な所で、そつと軽く横に倒しでもすればよかったのを、寄って出てくる所を本式に上手投を打てば細君もんどり打って次の間まで投げ飛ばされ、そのはずみに蚊帳のつり手が四方共切れ、細君の体についてふっとんでしまう。蚊帳がとれたので蚊帳の外で蚊柱をなしていた蚊がワーンという羽音なので亭主、〇〇山が勝ったので、どうだい見物のこの歓声はというので終っている。

又さい投げというのは大正から昭和の始め頃流行った柳家三五楼という落語家のやつ

たもので、前記蚊柱と同巧異曲で、若い細君を裸にして、褌を締めさす所や、仕切りの姿勢など、亭主と細君の間答のやりとりが滑稽で、又その情景を、ほうふつさせる。取組んでから亭主、力あまって細君を投げ飛ばし細君は壁を突き破り、露地へ転がり出てしまう。ゆで玉子をむいた様なお尻を泥だらけにして、痛さに呆然としている所へ、パトロールのお巡りさんが通りかかり、裸の婦人が、しかも兵児帯を褌にして通りに転がっているので不審尋問を受ける。どうしてこんな姿をして居られるのですかと聞かれ、「あのう、たくとお相撲を取っていたのですわ」「ははア、お庭に土俵を築いて御主人と相撲を取られる、体育として甚だよろしいですな」「いいえ、お庭ではなく、お座敷にお蒲団を敷いてお相撲をとったのですわ。そして私は主人に投げられ壁を破って外に飛出した所をお巡りさんに見つかったので御座いますわ」「なるほど、それでは御主人を犯罪容疑者として逮捕します」「ええっ、夫婦でお相撲とてはいけないんですの」「いや、とばくの容疑です。さいを投げたから」というのが下げであった。

矢崎武子という女流画家がよく若夫婦が相

撲をとって遊ぶ漫画をかいていた。相撲というものは相手が一人居れば楽しめるスポーツで道具がいらない。裸で取る場合だけ褌が必要だが、これは前記落語の様に兵児帯などでも代用出来る。全身の運動になって冬でも体中ポカポカして来る。昔、裏長屋に盲人の夫婦が住んで居り極めて仲のよいのが評判なのに夜になると、どたん、ばたんと取組み合っの喧嘩らしい。近所の人が、お前さん達仲のよいのに何故こんな大喧嘩するのだと止めに入ると、喧嘩でございませぬ。あまり寒いので、こうして二人で相撲を取ってから寝ますと体じゅう温かになるのでございませうという話があり、これから思い付いて、盲人と女の裸相撲の興行が両国で行われたといわれている。この盲人夫婦の様に相撲をとれば寒中でもあるが温まるが、裸体でやれば尚効果がある。皮膚の鍛練になりこれは空気に触れるだけでなく、お互に肌をぶっつけ合い、摩擦し合うことになるので皮膚が丈夫になり風邪を引かない。素人の女性は羞恥心から裸で相撲などといういやがる人が多いと思うが、馴れると女性も相撲をとることが好きになる人もいる。殊にこの頃テレビ、ラジオなどで大相撲の実況がしじゅう見られるので女性で

も相撲通の人が仲々多く、細っこい男性を見ると、お相撲とったら、私、あなたなんかには負けないわよ。という女性を何人か知っている。

この頃の女性は体格が目だってよくなった。腕力のあるかもれないが体の柔軟な点など、女性と相撲をとった事のある人は感じるだろうが、組み付かれるとベタベタひつつく様な感じで、内掛、外掛などからみつかれると思わず、尻もちをつかされたり、土俵際の粘りと、し太さなど、馬鹿に出来ない。女相撲に勝つ秘訣はどこまでも突張って組ませないことだとさえいわれている。

若い女性は着物（洋服も）をまとっている時よりも裸になった時の方が顔ま

小野川関と御殿女中の取組



で美しく見える。

四肢の見事に發育し、牛乳色をした肌の女の子が裸に褌を締めた時の美しさは例え様がない。それがなりふり構わず、汗みずくになつて格闘する女同志の相撲の女斗美は度々書いて来たが、私達男性がこの女豹達と相撲を取るのも興味深い。

体格のよい大柄な女性も勿論、手応えがあつてよいが、小柄でもひきしまった体の運動

神経のよく発達した女性も相手にして面白いものだ。四つに組むと、先ず男同志と違つて肌が柔かく弾力があるのは勿論だが、若い女のむせる様な体臭を、じかに感じ、ついフラツとする所を技をかけられ不覚をとったりする。

最も手近に簡単に女性と相撲をとるのは、

「蚊柱」の様に細君を口説き落し、裸になつて貰い、褌を締めて相撲をとることだ。毎晩

床に入る前に褌一本の裸で夫婦相撲を取れば、健康と夫婦和合の一石二鳥というわけである。

細君の方が強かつたりしたら更に面白いことであろう。但し夫婦喧嘩の時に、相撲で勝負をつけましようなどと言われては参つてしまふかもしれない。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (6×6.5cm) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	八〇円
五組五枚	三〇〇円
十組十枚	五五〇円
二十組二十枚	一〇〇〇円
三十組三十枚	一四〇〇円
四十組四十枚	一七五〇円
五十組五十枚	二〇〇〇円

Y1 全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2 乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3 観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4 見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5 浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6 麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7 逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8 裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9 逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10 全裸ねの縛り	(田中芳代)
Y11 なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12 全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13 蒲団裏側またぎ	(大塚啓子)
Y14 初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15 ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16 全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17 セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18 庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19 全裸全身裸自慢	(愛川悦子)
Y20 豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21 追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22 遅ましきヒツプ	(愛川悦子)

Y23 大の字晒し	(絹川文代)
Y24 縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25 胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26 麗人受難の巻	(益田房子)
Y27 もつこれで許して	(益田房子)
Y28 むしられたスロース	(花坂道子)
Y29 全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30 鎖座する縛り女神	(平野笑子)
Y31 囚女後手縛り	(大塚啓子)
Y32 全裸強列股間縛	(絹川文代)
Y33 ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34 開股一番一直線	(絹川文代)
Y35 縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36 亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37 全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38 妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39 椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40 強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y41 ハタ力縛り人形	(絹川文代)

Y42 濃艶ハタ力縛り	(絹川文代)
Y43 あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44 全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45 後手立木吊り	(村井知可子)
Y46 全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47 全裸寝台裏恥責め	(花坂道子)
Y48 振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49 長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50 ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51 手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52 柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53 不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54 カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55 緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56 膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57 前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58 股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59 聖壇のさし者	(絹川文代)
Y60 エビ責めの表情	(絹川文代)



浣腸器に憑かれた男の手記

或る浣腸マニヤの一日

栗

瀬

長

滝

れ

い

子

画

午前七時。春のやわらかい朝の日差しが雨

戸の隙間から室内に忍び寄る。春宵一刻値千金というが、熟睡した朝は、もの憂いどころか頗る爽快だ。昨夜の浣腸で、腹がすっかりきれいになっている為か、早朝から空腹を感じ、気分も甚だよろしい。

早速起き出して、インクの香も新しい朝刊を手にするのも朝の楽しみの一つである。先ずスポーツ欄でプロ野球、次に三面記事、小説と目を通すうち、第十面の左下に全面八つ

切でイチヂク浣腸の広告があるではないか。

第十面全部を家庭薬広告特集という訳。お定りのビタミン、健胃錠、虫下し等と共に、一番下の左が我がイチヂク浣腸の広告だ。おなじみのイチヂクの葉と実のマーク、可愛らしい三才位の坊やの顔、これが、浣腸の図であつたらなあとと思う。便秘に、ヒキツケにと相変らずのうたい文句だが、もう一つ「浣腸マニアに」とあつたら完璧だがと思う。何れにせよ、見なれてはいるものの、マニアの感

情を操る朝の一駒である。

午前八時、出勤。通勤電車は今日も亦殺人的混み方である。都心に向け一駅毎に猛烈な勢でドアから押し込んでくる通勤者で、車体もふくれ上るかと思われるよう。折しも、ダッとする人並に押され、私の右脇腹に、妙齡の婦人が押し付けられてきた。小心者の私は、あわてて避けようとしたが、既に定員の三倍は詰め込んだであろう車内では、も早、

一寸の身動きも出来ない有様である。下手にもじ／＼体を動かせば、痴漢じやないかとかんぐられるのが関の山と観念して、じっとしている事にした。ここでマニアの基だ怪しからぬ妄想が雲の如く湧いて来る。

顔は見えぬが、恐らく美人であろう。いや美人としよう。少くとも身長は、たとえハイヒールであろうと、五尺四寸は切れまい。まあ十人並以上のグラマーと想像してよろしい。さて、私の妄想は発展する。先ず可愛いらしい口に猿轡をかませ、両手は胸に組合せて緊縛し、両足を夫々机の足に縛りつける。そこでやおら浣腸器を取り出す。彼女は身悶えて猿轡の下で呻くだろう。大人しくしろとばかり、強烈な一鞭を呉れてから、有無を言わず施薬する。

途端に、カーヴに差ししかかったのか、ガタンと一ゆれ、ググーッと人並がゆれて彼女の体は斜後ろにすべり、変って五十がらみのでっぱり肥った紳士の背中で私は又押しつぶされそうになった。

ああ、幻滅。でも私は、「俺は痴漢じやない、痴漢じやない。浣腸マニアなんだ、マニアなんだ」と、彼女の方を伺いながら心の中で叫ぶのだった。

午前九時。出勤簿に判を押すと、私はきまつて横町の薬屋へタバコを買いにゆくのが日課の一つである。

「煙草なら買って来てあげてよ」はじめは、そう言つて呉れた女事務員達も、

「僕はフェミニストだからね、私用にお使い立てしちゃ悪いよ」そう言つてことわる毎日に、今では買いに行こうという者もない。

どうして、毎日わざ／＼出勤後、煙草を買いにゆくのか。人知れぬ楽しみが私にはあるからに外ならない。煙草ケースの片側に、どこ

の薬屋にもよく見られる、あの衛生器具ケースが並んでいるのだ。ピカピカに磨き上げられたケースは二段になっていて、上段には乳針、哺乳ピン、計量器等、下段には注射器と並んで、尿瓶、ガラス製浣腸器、スポイトが如何にも私の嗜好を満足させてくれるように客待ち顔である。しかし前々日も、前日も、浣腸器の位置は変つていなかったのに、おおその朝はどうだ、歯がぬけた様に、三〇CCグリセリン浣腸器がないではないか。住宅街でもないこの辺でも、単なる飾りとしか見えなかった浣腸器が、やはり買われたのである。誰が買ったのであろう。隣の会社のマニアかも知れない。或は案外うちの会社の女の子

が買ったのかも知れない。

このケースには、すぐにも、問屋から新しい浣腸器が補充されるだろう。でも毎日、私の目を楽しませて呉れたあの浣腸器が誰かの手に渡ったのは、何か私には寂しかった。

午後一時。郊外の研究所まで出張。田園の雑木林を切り拓いて建てられた研究所へ出かけることは、毎日、都心の雑踏に神経をいらだたせている私達にとっては、一服の清涼剤という所である。

国電の駅を下りると三十分間隔というバスはつい今しがた出たばかり。えいままよとばかり歩いて行く事にした。駅から五分程で商店街の家並も疎らとなり、畠の中をほこりっぱいアスファルトのバス道路が一直線に森の彼方に消えている。その森影の左手に研究所はあるのだが、バス通りを歩くのも味気ないままに、つと左手に折れて、ハイキング気分が畠の中の小路を行く事にした。一面に続く蔬菜畠、最近では金肥は少くなり、化学肥料が圧倒的というものの、田園の香水とかいう金肥の香があたり一面に漂うのも、ここならではある。

ふとみれば、ようやく芽を出した大根の双



葉に、おおいかぶさるやうに一個のイチヂク浣腸のカラがあつた。私は思わず歩みを止めて、靴の先でそつと踏んでみた。プスツと空気がぬけて、あとから水が一、二滴滲み出した。雨水であろうか、或は浣腸液の残液であろうか、その音が何か物悲しかった。

可愛らしい小学生の女の子が、いや／＼をするのを無理に押さえつけられて、このイチヂク浣腸をされたのかも知れない。便秘になやむ美しい婦人が、人知れずトイレでこのイチヂク浣腸を使用したのだろうか。或は私のようなマニアが、寝床でそつとこのイチヂク浣腸に頼りしてから、我と我が身を苦しめるのに用いたのかも知れない。

こうした想像に、研究所迄三十分の道のりが、至って短いものに感ぜられたことであつた。

午後四時。研究所の仕事が早く片づいて、夕刻、客を招待する迄に少しの時間が出来たので、ニュース映画でも見て暇をつぶす事にする。ありきたりのニュース、編集もマンネリズムの様だし、大体テレビニュースで殆どお目にかかっている題材ばかりで、暇つぶしとはいい条、一向感興も湧かぬままにトイレに行く。

ロードショウの大劇場は別として、ビルの地下なるニュース映画館のトイレは、相も変らぬ稚拙な絵が到る所に散乱している。書かれては消し、消した上に又書くの繰り返しで壁一面がどんよりと薄よぐれ、臭気と共にむせ返るようである。

その中に、少し絵心でもあるのだろうか、ややこまじな婦人の画が目についた。一瞬、この場の雰囲気私にもむら／＼と

いたずら心が湧くのを押さえ得なかった。手帖の鉛筆を取り出すと、あたりに人気のないのを幸い、手足に縄を二巻き三巻き書き加えその上、グリセリン浣腸器を書き添えたものである。ほんの二三十秒の作業で、この画は女性緊縛浣腸の図と生れ代ったわけである。我ながら感に耐えぬ思いで、改めてながめやる時、ドアを開けてくる人の気はいに、あわてて私はその場を離れた。

それにしても、学生時代、黄金文学と称して、学校のトイレに、天下国家を論じ、詩を書き、或は誰か分らぬ友人の反論を期待しつつ哲学らしきものを論じ、それに応じた反論に又反論するといった落書以外したことなかったトイレに落書というなさない行為を今犯してしまった悔恨に、私はマニアの宿命を、自己嫌悪せざるを得なかった。

午後十時半。

取引先の人と夕刻より飲み歩き、最後はお定りのキャバレーへ。

顔も定かには見えぬ位のボックスに腰を埋めると、フロアでは青白いライトに浮き出されて今やショーの真最中。散々飲んできただけに、ビール瓶の乱立にもオードブルにも、

何等の感興も湧かない。今となれば、客の接待も何もない。人は人、我は我、両側の夜の蝶と戯れ言を取り交すのみ。

ショーの終了と共に、一きわ高くバンドがなり立てるのにさそわれて、踊りに立つ。

「ナーさん（私はここではナーさんで通っている）今日は又御機嫌ね。うちで飲まないでどこでこんなに浮気して来たの。今日の踊り方はぎごちないわね。ほら、よろしくしてるんじゃない。足なんか踏んだらひどいわよ」「ひどいって、どうする？」

「お仕置しちゃうから」

「君にならお仕置してもらいたいね」

こんな戯れ言を交しながら踊る中

「トイレに行く、どこだい」

「まあ、これからという所でトイレだなんて、どこだかよく知ってるくせに。つれてったげる」

「どうもこの頃、通じがなくなっただけ」

「ふーん、便秘の女みたいね、浣腸したら」

「君がしてくれるかい？」

「おおいやだ。自分でしなさいよ。イチヂク

浣腸買ってきて」

「君も時々使うのかい」

「うん、あたし達不規則な生活でしよ。時々

体が変調を来して、便秘勝ちになるもんだから。浣腸かけるとスカッとしていい気持」

「じゃ、今度、僕が担当して、やろうか」

「結構でございます。いやらしい事言わないで、早く入んなさい」

彼女等は、夜の更けると共に大胆になるらしく、トイレの中迄私を送って来ながら、ボンと私の背中をたたいて押し込む様にした。彼女は殊によるとマニアかも知れん。私は彼女の浣腸の図を想像しながら、今のとんでもない浣腸問答に、思わず微笑が湧いたものである。

午後十一時半。酔いしれて、くずれる様にアパートに帰りついた私は、そのまま寝ようとして、矢張りこれを忘れる事は出来なかった。戸棚から、ふらつく足を踏みしめて取り出したのは、螢光燈の光に青く光る、グリセリン浣腸器。しばらく手の中でもてあそんだ挙句、グリセリンの瓶の口に当てがう。音もなくグリセリン液が硝子筒の目盛に添って上って来て、私の胸は次第に高鳴るのであった。

(完)